

博士学位論文

現代日本語における複合語の意味形成
構文理論によるアプローチ

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本言語文化専攻

野田 大志

平成 23 年 2 月

目次

第1章 序論	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 本論文の構成.....	2
第2章 理論的背景 構文としての複合語	4
2.1 はじめに.....	4
2.2 構文としての複合語.....	4
2.3 構文理論の諸側面と現代日本語の複合語研究.....	9
2.4 その他援用する諸概念.....	15
2.4.1 概念化.....	16
2.4.2 意味の動機づけ.....	16
2.4.3 カテゴリー化.....	17
2.4.4 百科事典的意味.....	18
2.4.5 フレーム.....	18
2.4.6 図地反転.....	19
2.5 本章のまとめ.....	21
第3章 [動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞の意味形成	22
3.1 はじめに.....	22
3.2 先行研究について.....	23
3.2.1 先行研究概観.....	24
3.2.2 先行研究の問題点.....	35
3.3 構文としての複合動詞.....	37
3.4 複合動詞の構文的多義性.....	38
3.4.1 構文的意味	39
3.4.2 構文的意味	42
3.4.3 構文的意味	45
3.4.4 構文的意味	47
3.4.5 構文的意味	51
3.4.6 構文的意味	53
3.4.7 構文的意味	57
3.4.8 構文的意味	60
3.4.9 構文的意味	63
3.4.10 構文的意味	67
3.4.11 構文的意味	69
3.4.12 構文的意味	71

3.4.13 構文的意味	74
3.5 複合動詞の構文的意味拡張.....	77
3.6 構文的多義ネットワークにおける主体化・主観化の関与.....	85
3.7 本章のまとめ.....	91
第4章 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成.....	92
4.1 はじめに.....	92
4.2 先行研究の問題点.....	93
4.3 構文としての[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞.....	95
4.4 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の構文的多義性.....	96
4.4.1 構文的意味	97
4.4.2 構文的意味	100
4.4.3 構文的意味	102
4.4.4 構文的意味	104
4.4.5 構文的意味	106
4.4.6 構文的意味	107
4.4.7 構文的意味	108
4.4.8 構文的意味	109
4.4.9 構文的意味	110
4.4.10 構文的意味	111
4.4.11 構文的意味	112
4.5 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成に關与する比喩.....	113
4.5.1 個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩.....	113
4.5.2 構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩.....	115
4.6 構文的多義ネットワークにおけるカテゴリーの連続性.....	125
4.7 本章のまとめ.....	132
第5章 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の意味形成.....	133
5.1 はじめに.....	133
5.2 先行研究の問題点.....	134
5.3 構文としての[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞.....	135
5.4 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の構文的多義性.....	136
5.4.1 構文的意味	136
5.4.2 構文的意味	138
5.4.3 構文的意味	139
5.4.4 構文的意味	140
5.4.5 構文的意味	141
5.4.6 構文的意味	142
5.4.7 構文的意味	144

5.4.8 構文的意味 と構文的意味 に関する類義構文との比較.....	145
5.5 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の意味形成に關与する比喩.....	145
5.5.1 個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩.....	146
5.5.2 構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩.....	147
5.6 本章のまとめ.....	153
第6章 結論	154
参考文献	163
謝辞	168

本研究の第3章から第5章は、以下の論文に基づき、その後の研究によって明らかにしたことを加味して大幅に加筆・修正を施したものである。

第3章： 2008年3月「現代日本語における複合動詞の認知言語学的研究」
名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文

2008年5月「複合動詞の構文的意味拡張に関する一考察」
『日本認知言語学会論文集』第8巻 pp.97-107(日本認知言語学会)

2009年2月「現代日本語における複合動詞の意味形成 構文理論による分析」
広島大学北京研究センター編『北研学刊』特集号・日本語の複合動詞 pp.173-184(出版：白帝社)

2009年5月「構文的多義ネットワークにおける並列型及び補文型複合動詞の位置づけ」
『日本認知言語学会論文集』第9巻 pp.143-153(日本認知言語学会)

第4章： 2010年5月「[名詞+他動詞連用形]型複合名詞の構文的多義性に関する一考察」
『日本認知言語学会論文集』第10巻 pp.204-214(日本認知言語学会)

第5章： 2011年4月(近刊)「[他動詞連用形+具体名詞]型複合名詞の意味形成」
『日本語の研究』第7巻第2号(日本語学会)

本論文における表記法

- (1) 例文には、各章ごとの通し番号を、()で括って付してある。
- (2) 引用例の出典は、例文の後の()内に示す。なお、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』を用いて採集した例文に関しては、文庫名を『 』で括って記載してある。また、インターネット上で公開されているウェブページから検索エンジン Google を用いて採集した例文に関しては、()内に URL を記載してある。
- (3) 例文や考察対象語句の文頭に付された「*」は、その表現が容認不可能であることを示す。
- (4) 例文中、直接考察対象となっている箇所は実線(____)で示し、それ以外の問題となる箇所は破線(.....)で示す。
- (5) 英文の引用の後に()付きで日本語訳が示されている場合、特に断りのない場合は筆者によるものである。
- (6) 先行研究を直接引用する場合、その引用部分を「 」で括って示す。
- (7) 図表番号は、各章ごとの通し番号を付してある。
- (8) 注は、各章ごとに通し番号を付し、各ページ末に挙げる。
- (9) 個々の複合語の意味、構文的意味、構文スキーマなど、あらゆるレベルの意味を、< >で括って記述する。

第1章 序論

1.1 はじめに

現代日本語には、極めて多数の複合語（2つ以上の自由形態素¹の合成によって成り立つ語）が存在し、それらの語構成パターンも実に多様である。そして、それらの複合語に対する研究は、構成要素間の意味的・統語的關係性を分析する語構成論や、ある2つ以上の自由形態素がどのような過程を経て合成し複合語となるかを分析する語形成論²など、従来、様々な枠組みにおいて研究がなされてきている。

中でも、「殴り倒す」、「降り始める」のような[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞や、「花見」、「鉛筆削り」のような[名詞＋動詞連用形]型複合名詞を中心として、構成要素間の意味的・統語的關係に基づいてそれぞれの複合語を複数のパターンに分類していくというタイプの研究は、非常に精力的になされてきた。

しかし、本稿の次章以降においても詳述するように、現代日本語の複合語に関する従来の研究は一般的に、例えば複合動詞であれば、「駆け上がる」は前項要素が後項要素の「様態」を表し、「殴り倒す」であれば前項要素が後項要素の「手段」を表す、また「花見」であれば「行為」を表し「鉛筆削り」であれば「道具」を表す、など、全体を部分に分割し、部分を解明した上で全体を再構成するといういわゆる要素還元主義的なアプローチによってなされてきた。また、複合語の分類において、（複合動詞における、影山(1993)による「他動性調和の原則」をはじめ）様々な語形成規則が提案され、それらの語形成規則によって規則に適合する事例と例外とを峻別したり、（同じく影山(1993)をはじめとして、「統語部門」において形成される「統語的複合動詞」と「レキシコン」において形成される「語彙的複合動詞」など）複合語を、それらが形

¹ なお、一般的に、「合成語」は「複合語」と「派生語」とに大別され、構成要素に拘束形態素を含む合成語は、派生語と呼ばれている。

² このように、静的な観点からの合成語の分析の枠組みを語構成論、動的な観点からの合成語の分析の枠組みを語形成論と呼ぶことが多いが、玉村(1992: 85-86)も指摘するように、「語構成論」、「語構造論」、「語形成論」などの術語が指す範囲は研究者間で相違がみられ、さらに、それらの枠組みが常に明確に区別されるものではなく、また区別することは難しい。

成される部門によって峻別するというアプローチもなされてきた。これらの背景には、合成表現の意味は、構成要素の意味を規則に従って組み合わせれば得られるという、「合成性の原理」という考え方が存在している。

このような、トップダウン的、要素還元主義的な従来の複合語研究に対し、本研究は、認知言語学、特に構文理論の枠組みに基づき、ボトムアップ的、ゲシュタルト的なアプローチによって[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞（「殴り倒す」など）、[普通名詞＋他動詞連用形]型複合名詞（「花見」など）、[他動詞連用形＋具体名詞]（「焼き魚」など）の意味形成を共時的な観点から包括的、体系的に分析し、人間の事態認知の実態に即した複合語研究のあり方を模索していくことを目的としたものである。（なお、従来の先行研究の具体的な問題点、またそれに対して構文理論の枠組みにおいて複合語研究をすることの具体的な意義については、第3章、第4章、第5章で詳述する。）

1.2 本論文の構成

本節では、本論文の構成について述べる。

まず、第2章「理論的背景 構文としての複合語」では、本研究が依拠する構文理論（construction grammar）について概観し、現代日本語の複合語を構文理論における「構文」とであると位置づけることについて提案する。また、本研究において援用する、認知言語学における諸概念についても確認していく。

次に、第3章「[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞の意味形成」では、「殴り倒す」、「降り始める」などの複合動詞を考察対象とする。まず、個々の複合動詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に複数の構文的意思を抽出し、さらにそれらの構文的意思間の相互関係を、比喻による拡張という観点から分析する。また、複数の構文的意思（ネットワークにおける節点）によって形成される構文的多義ネットワークを図示し、このネットワークにおける主体化・主観化（subjectification）の関与について検討する。

次に、第4章「[普通名詞＋他動詞連用形]型複合名詞の意味形成」では、「花見」、「鉛

筆削り」などの複合名詞を考察対象とする。まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に複数の構文的意味を抽出する。次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻、また構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻について検討する。また、複数の構文的意味における意味的性質の相違点及びその連続性と、現代日本語の品詞構造における性質の相違点及びその連続性との相関関係について検討する。

次に、第5章「[他動詞連用形＋具体名詞]型複合名詞の意味形成」では、「焼き魚」、「打ち水」などの複合名詞を考察対象とする。まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に複数の構文的意味を抽出する。次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻、また構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻について検討する。

最後に第6章「結論」は、本研究のまとめと今後の課題を提示する。

第2章 理論的背景 構文としての複合語

2.1 はじめに

本章では、本研究の次章以降において具体的に複合語の分析を進める前提として、その分析において依拠する構文理論及び認知言語学の諸概念について確認していく。

まず2.2節では、構文理論における「構文」の位置づけを確認した上で、現代日本語の複合語を構文として規定することを提案する。

次に2.3節では、構文理論の諸々の理論的特徴について確認しつつ、構文理論の枠組みにおいて現代日本語の複合語を分析していくアプローチについて検討していく。

次に2.4節では、2.2節及び2.3節で提示した以外の、本研究において援用する認知言語学の諸概念について確認していく。なお、構文理論は、語彙的要素と統語的要素とを厳密に区分しないという点や、構文間の関係、構文内の関係をネットワーク的に捉えていく点、複数の構文的意味においてプロトタイプ的な意味とそこから拡張していく複数の意味を認めその連続性を明らかにしていく点をはじめとして、認知言語学の言語観に基づく理論的枠組みである。

最後に2.5節は、本章のまとめである。

2.2 構文としての複合語

本稿第1章でも既に述べたように、現代日本語の複合語は従来、様々な理論的枠組みのもとで、精力的に分析がなされてきている。

次章以降でも詳述するが、現代日本語の複合語（特に、[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞や[名詞＋動詞連用形]型複合名詞）に関する先行研究全般に共通する問題点（一貫して詳細に検討されていない点）として、主に次の2点が挙げられる。

1点目は、多くの先行研究では、語構成のパターンを簡略なラベル付けのもと、非連続的に分類するに留まっているという点である。例えば、[名詞＋動詞連用形]型複合

名詞を考察対象としている影山(1999)、杉岡・小林(2001)、伊藤・杉岡(2002)などでは、「花見」、「草刈り」などは「行為」を表し、「鉛筆削り」、「缶切り」などは「道具」を表す、といったように、「行為」や「道具」といった簡略的なラベル付けをした上で、非連続的にその語構成を規定しており、それらの連続性については詳細な検討がなされていない¹。

2点目は、複合語一語の意味を捉える上で、厳密には構成要素それぞれの意味のみからは導かれない意味の出所、理論的位置付けが明示されていないという点である。例えば、[名詞＋動詞連用形]型複合名詞を例に挙げれば、「花見」という語の意味は概略、＜人々が桜の木の下に集まって、桜の花を見ながら飲食をしたり語り合ったり歌を歌ったりして楽しむこと＞と記述できるが、この意味は、構成要素である「花」と「見(る)」それぞれの意味の総和としては導けない。

以上の問題点を踏まえ、本研究では、考察対象とするそれぞれの複合語について、同一形式に複数の意味が結び付いた、多義的な(複合語レベルの)構文(construction)であると位置づけ、また複合語の意味形成を構文的多義ネットワークの形成であると位置づけ、構成要素間の関係の多様性を包括的、体系的に分析するというアプローチを提案する。

なお、大堀(2001: 530)も指摘しているように、構文理論(construction grammar)は語と文の間に本質的な境界を設けないので、construction は厳密には「統合体」や「構成体」と呼ぶ方が適切であろうと思われるが、construction の訳語として「構文」が最も普及し、定着していることに鑑み、本研究でも以下、一貫して「構文」と呼ぶこととする。

さて、構文理論における「構文」の定義は研究者によって異なるが、本稿では構文を以下のように定義する。

構文：意味と形式との結び付きが慣習化したゲシュタルト的な複合体

¹ なお、派生語に関しては、斎藤(2004: 110-137)が接頭辞「反」を有する派生語に関して、その意味を複数の区分し、かつそれらの相互関係を明らかにしており、現代日本語における合成語における意味形成の包括的な分析を試みた先駆的な分析であるといえる。本稿の以下の分析は、斎藤(2004)と同様の問題意識を前提にしつつも、比喩に基づく拡張や図地反転など、(複合語以外の言語要素にも適用可能な)一般性、汎用性の高い諸概念を用いて、複数の意味の有機的な結びつきを明らかにすることを試みるものである。

そして、「構文」を、あらゆるレベルの複合表現（合成語、句、節、文など）に適用できる概念であると位置づける。

なお、「構文」という単位は、認知言語学における構文理論においてのみ扱われる単位ではないが、構文理論における「構文」の位置づけと、認知言語学以前の「構文」の位置づけとは大きく異なるものである。ここで、辻編(2002: 75)における、認知言語学以前の「構文」の捉え方に関する記述を引用²する。

伝統的に「構文」と言えば、類似文の集合を統語の型から整理したリストのように受けとめられることが多い（受動構文、there 構文、tough 構文）。多くの場合、記述的・学習的な便宜から、記憶・記録されるべき、特に説明の必要のない事実と考えられてきた。生成文法でも、初期の段階を除き、「構文」と言えば前理論的概念の対象とされ、一般的な統語原理の適用の結果、随伴的に生じてくる現象の1つとして理解されている。

これに対し、構文理論においては、言語を人間の認知活動の一部と捉える認知言語学の枠組みから、構文を、その構成要素となる語彙項目と連続的でありつつも、語彙項目から独立した独自の意味と形式を持つ理論的構築物と位置づけているのである。

さて、「構文」を「ゲシュタルト的な複合体」とであると定義したが、河上(2000: 177-178)が指摘しているように、21世紀初頭に発展したゲシュタルト心理学によると、「全体は要素の単なるモザイク的な集まりではなく、それ自体構造を持ち、ゲシュタルト(Gestalt)を形成し、部分はその全体によって規定されている」というものである。すなわち、ゲシュタルトとは、「各要素が有機的に関わり合い、1つの単位を構成して機能を果たす、まとまりを持った全体」とであると位置づけられる。さらに、河上が指摘するように、このゲシュタルトの考え方は、構文理論をはじめ、認知言語学全般において通じるものである³。

また、構文を「意味と形式との結び付きが慣習化した」とものであると定義したが、

² なお、引用する箇所は、吉村公宏氏執筆の「構文」という項目の一部である。

³ これに対し、前述のように、従来の多くの枠組みにおいては、合成性の原理に従って、部分の意味の総和が全体の意味であるという要素還元主義的な考え方が採用されている。

この背景には、Langacker(1999, 2000)などにおいて提案されている、言語を「慣習的な言語的単位の構造化された目録」(a structured inventory of conventional linguistic units)であると位置づける見方がある。Langacker は、話者の言語知識を構成する様々な単位は、現実には顕現する表現の一部として現れるものか、それらから抽象化(スキーマ化)やカテゴリー化によって現れるような意味的、音韻的、記号的な構造以外は許されない⁴と考えている。そして、こうした単位を言語資源の目録と考えることにより、言語というシステムが非生成的で、非組立式であると主張されている。

なお、Croft(2007: 471-472)は、Langacker のこの考え方を踏まえた上で、構文を「記号的言語単位」とであると位置づけている。そして、この単位は、統語的特性(syntactic properties)、形態論的特性(morphological properties)、音韻論的特性(phonological properties)によって構成される「形式」(form)と、意味論的特性(semantic properties)、語用論的特性(pragmatic properties)、談話・機能的特性(discourse-functional properties)によって構成される「(慣習的な)意味」(conventional meaning)とが「記号的な対応関係」(symbolic correspondence)によって結び付けられた(link)構造であると位置づけている。本研究も、この構文観に基づくものである。

また、「構文」という単位がどの範囲を射程とするかに関しても、早瀬(2001: 541)などが指摘しているように、研究者によって相違がみられる。Langacker(1999: 109)では、英語の *jar lid* (瓶の蓋) という表現を例に挙げ、*jar* という記号的構造と *lid* という記号的構造が統合されて *jar lid* という複合的な記号的構造体ができるというように、単一の合成からなる構造体を最小構文(minimal construction)と位置づけている⁵。本研究もこの考え方に従い、考察対象とする複合動詞、複合名詞をいずれも、現代日本語における(2つの形態素による、単一の合成によって形成される)最小構文の事例であると位置づける。

ところで、前述の通り、現代日本語の複合語を扱った先行研究においては一般的に要素還元主義的なアプローチがなされてきているが、湯本(1977)及び石井(2007b)は、複合語には要素の意味とその関係から組み立てられる「くみあわせ性」(くみあわせ的

⁴ なお、この制約を Langacker は「内容要件」(content requirement)と呼んでいる。

⁵ そして、早瀬(2001: 541)も指摘しているように、Langacker は一連の研究において、複合表現であればあらゆる表現が構文とみなせるという見方をしている。

な意味)と要素のくみあわせからは導くことのできない「ひとまとまり性」(特殊化された慣習的な、ひとまとまり的な意味)を認めることができる、という指摘をしている。本研究も、この考え方に基本的には従う。

但し、湯本(1977)ではこの2つの性質は対立していて相補的なものであると位置付けており、また石井(2007b)でもこれら2つの性質を異なるレベルとして位置づけている。例えば石井(2007b: 58)では、「春風」という複合語は、直接には「春に吹く風」というくみあわせ的な意味を表しながら、その背後には、「南や東から吹く、おだやかに吹く、暖かい、心地よいといった諸特徴をもつ風」というひとまとまり的な意味を表す複合語としてつくられる、と指摘している。

この2つの性質の関係性について、本研究においては「ひとまとまり性」が「くみあわせ性」を包含していると位置づける。すなわち、本稿で考察対象としている「焼き魚、飲み水、買い物」などのそれぞれの複合名詞が有する「意味」はあくまで「ひとまとまり的な意味」であり、それらの「ひとまとまり的な意味」を構成要素の意味が部分的に動機づけていると考える。

この意味観は、Langacker が Langacker(1999)などで提示している「部分的合成性」(partial compositionality)という考え方、すなわち、あらゆる複合表現の意味は、単に構成要素の意味を足し合わせたものでもなければ、構成要素の意味と全く無関係でもなく、構成要素の意味を基盤として(構成要素の意味に部分的に動機付けられて)さらに意味が限定されたものになる、という考え方と一致するものである。そして、個々の複合語の意味(「ひとまとまり的な意味」)を検討した上で、ボトムアップ的に抽出できる意味的共通性が、第3章以降で提示する複数の「構文の意味」である。

なお、このことに関連して、構成要素から合成語が生じる動的なプロセスについて斎藤(2004: 51-69)がより詳細に検討している。斎藤(2004)は、構成要素が結合して合成語ができる際に「単語化」という作用を経ており、これは、「直接語構成要素の意味と意味形成部門における意味との差をチェック」し、「その落差を + として連結形式の意味に付与する」作用であると位置づけている。本稿も、この考え方を支持するものである。

ところで、「部分的合成性」における「合成」(composition)とは、Langacker(1999)において、母語話者の言語知識を説明するのに必要な基本的で一般的な心理現象の1

つとして挙げられているものである。これは、2 つ以上の構成単位を統合して複合構造を作ることである。もし、[A]と[B]がそれぞれ独立したユニットで、これらが結合して新しい構造(C)を合成するとき、この構造は([A] [B])_c と表される⁶。ここで、(C)は構成要素[A]と[B]の単純な総和ではなく、[A]と[B]が新たな概念的統合を成すことによって、構成要素に還元できない意味を有する独立した要素としてみなされることになる。(なお、この新しい合成表現が確立された単位として認められると、[[A] [B]]_c と表記される。)

このような考え方を踏まえ、河上(2000: 171)も指摘しているように、「部分的合成性」は、構造の合成は認めつつ、意味の面ではゲシュタルトの原理に従う、という立場に基づいて提案された概念であると位置づけられる。

2.3 構文理論の諸側面と現代日本語の複合語研究

大堀(2001: 528)が指摘しているように、構文理論は、Fillmore, Kay and O'Connor(1988)、Goldberg(1995)、Croft(2001)をはじめ、複数の研究者によってそれぞれ異なる立場から推進され、理論的な「潮流」のひとつであると捉えられる。例えば Fillmore らは、従来十分に扱われてこなかったイディオム的な言語事実を考察対象とし、その内部構造を詳細に記述することを試みている。また、Goldberg は、英語の動詞の項構造という、文構造の中核的な部分に焦点を当て、二重目的語構文や結果構文をはじめとして、1 つの形式に結び付いた複数の意味の関係や構文間関係の解明を試みている。

このように、研究者によって、構文理論においてどのような点に着目するか、どのようなアプローチをとるかについては様々であるが、大堀(2001)、李(2004)、尾谷(2006)、Croft(2007)を踏まえ、様々な立場による構文理論から抽出できる、構文理論全般において共有されていると考えられる基本的な 3 つの理論的方向性(理論的意義)を提示

⁶ なお、Langacker は、複合的な構造を有するものが、あらかじめ 1 つにパッケージされた単一体として操作可能になり、もはやその部分や部分の配列を意識する必要がなくなった場合、その複合構造を「単位」(unit)になったと位置づけている。そして単位となった複合構造を角括弧[]で示し、単位となっていない複合構造を丸括弧()で示している。

する。本研究における次章以降の考察も、次の3点の考え方に基づくものである。

構文理論の理論的方向性

文法体系も語彙（レキシコン）と同様に、意味と形式のペアとしての記号であり、語彙的知識と文法的（統語的）知識は連続的なものである。

構成要素の意味は構文（複合表現）の意味を動機づけるものの、構文（複合表現）全体の意味は構成要素に還元して捉えられるものではない。

構文は典型事例から拡張事例までの幅を有するカテゴリーであり、構文的意味同士、及び関連する構文同士がネットワーク的に連携している。

以上の3点のうち、 に関しては、前述の通り Langacker が一連の研究において、「内容要件」(話者の言語知識を構成する様々な単位は、現実には顕現する表現の一部として現れるものか、それらから抽象化（スキーマ化）やカテゴリー化によって現れるような意味的、音韻的、記号的な構造以外は許されない) という考え方を提示することによって明確に規定している。

また、語彙的知識と文法的知識との連続性について、Croft(2007: 471)は Langacker(1987)を踏まえ、以下の表1に示すような表において詳細に提示している。なお、以下の表において、SBJ は主語、TNS はテンス、OBL は斜格、DEM は指示詞、ADJ は形容詞のそれぞれの要素を示す。

表1：語彙的知識と文法的知識との連続性⁷

<i>Construction Type</i>	<i>Traditional Name</i>	<i>Examples</i>
Complex and (mostly) schematic	syntax	[SBJ <i>be</i> -TNS VERB- <i>en</i> by OBL]
Complex and (mostly) specific	idiom	[<i>pull</i> -TNS NP'-s <i>leg</i>]
Complex but bound	morphology	[NOUN- <i>s</i>], [VERB-TNS]
Atomic and schematic	syntactic category	[DEM], [ADJ]
Atomic and specific	word / lexicon	[<i>this</i>], [<i>green</i>]

次に、 に関しては、前述の通り、Langacker が一連の研究において「部分的合成性」という考え方を提示することにより、明確に規定している。

次に、 の基盤として、Bolinger(1977)における「意味と形式の一対一対応」という原則、及び Goldberg(1995)における「動機づけ最大化の原則」という原則、及び「非同義性の原則」という原則が挙げられる。

まず、「意味と形式の一対一対応」とは、同一形式に複数の意味が結び付いている場合、形式が同じであれば基本的にそれらの意味は密接に関連しており、また、形式が異なれば意味も異なる、という作業仮説である。構文理論（及び認知言語学全般）はこの考え方を採用し、形式の異同に基づいて意味の異同を探るという分析がなされることになる。

⁷ なお、本研究においては構文を「複合表現」と規定しており、表1においては、伝統的に「形態論」(morphology)と呼ばれてきたカテゴリー、「イディオム」(idiom)と呼ばれてきたカテゴリー、「統語論」(syntax)と呼ばれてきたカテゴリー（すなわち、上記の表において Croft が complex と位置づけているタイプ）が本研究における「構文」の範囲内である。

また、「動機づけ最大化の原則」とは、Goldberg(1995)において提示されている、言語的組織化に関する心理学的原則の1つである。この原則は、Goldberg(1995: 67)によれば、構文 A が構文 B と統語的な関連性を持つ場合、構文 A のシステムは、それが構文 B と意味的な関連性を持つ程度において、動機づけられており、こうした動機づけは最大化されるという原則である⁸。例えば、Goldberg によれば、次の(1a)は移動使役構文、(1b)は結果構文であるが、いずれも[主語 + 動詞 + 目的語 + 副詞句]という統語形式を持つ点で関連しており、この際、状態変化を位置変化として捉え、結果構文をメタファー的な位置変化を表していると考えることにより、2つの構文が意味的に関連しているということが明らかになるのである。

(1) a. Joe kicked the bottle into the yard.

(ジョーは瓶を庭へ蹴り入れた。)

b. Joe kicked Bob black and blue.

(ジョーはボブを蹴ってあざだらけにした。)

さて、前述の に関連して、本研究では次章以降、それぞれの構文（としての複合語）に関して、個々の複合語（構文の具現事例）の意味からボトムアップ的に抽出した複数の構文的意味の相互関係を、構文的多義ネットワークの形成として提示していくことになる。この、構文的多義ネットワークの形成に関しては基本的に、主体の言語使用や言語習得の過程に関わるボトムアップ的なアプローチである、

⁸ この考え方に関連して、尾谷(2006: 39-40)は、2つの要素 A と B が並列した場合に、そこに複数の意味が生じるということの一例として、日本語の複合動詞においては、並列構造[AB]が次のような2つの意味構造と対応し、形式[AB]が多義を形成すると位置づけられると指摘している。

・「叩き落とす」、「溺れ死ぬ」etc. 形式：[V1 + V2] / 意味：「V1 の後に V2 する」
 ・「もがき苦しむ」、「飛び回る」etc. 形式：[V1 + V2] / 意味：「V1 と同時に V2 する」

本稿第3章では、この考え方（複合動詞の構成要素間の関係性の多様性を、同一形式における多義として分析することが可能であるという考え方）を基本的には支持しつつ、複合動詞の意味形成をより詳細かつ包括的、体系的に分析し、記述していくものである。なお、複合動詞の構文的意味は、第3章で後述するように尾谷が挙げている2つ以外にも多数認定でき、さらに尾谷が挙げている2つの意味に関してもより詳細に記述する。また、1つの意味に関しても、本研究においては、「叩き落とす」と「溺れ死ぬ」を、それぞれ異なる構文的意味の具現事例として位置づけることになる。

Langacker(2000)の「動的使用依拠モデル」(dynamic usage-based model)の考え方に従う。すなわちこのモデルは、複合語の意味形成を、実際の言語使用に基づいてボトムアップ的に形成されていくネットワークとして捉えるもので、相互に類似性を有する複数の具現事例(本研究においては、個々の複合語)から共通性(すなわち、具体性の高いスキーマ)としての構文的意味が抽出され、それが定着することで更に新たな具現事例(個々の複合語)が認可される、と考える。また、構文的意味に適合しない事例(個々の複合語)が出現した際には、構文的意味が動的な拡張のプロセスを介して新しい事例を取り込む、と考える。

また、構文的多義ネットワークにおいて、ネットワークを形成する複数の節点がすなわち構文的意味であるが、それぞれの節点を結びつけるリンクを本研究では、メタファー、メトニミー、シネクドキーという3種類の比喻に基づく拡張のリンクであると位置づける。この考え方はすなわち、柏野・本多(1998)、粕山(2001)、瀬戸(2007)を踏まえ、意味拡張の動機づけとしてのメタファー、メトニミー、シネクドキーという3種の比喻に基づく意味ネットワークが、言語表現の多義の実相を適切かつ詳細に捉えられるモデルであるという考え方を複合語レベルの構文的多義性に適用するものである。なお、3種類の比喻の定義については、以下の粕山(2002)の定義に従う。

比喻の定義

- ・メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻。
- ・シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喻。
- ・メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻。

また、メタファーによる拡張とスキーマの抽出との関連性については、粕山(2001: 36-44)における考え方に従う。すなわち、拡張関係が生じるのは話し手が基本的な意

味と拡張された意味との間に何らかの類似性を認めるからであり、類似性を認めるということは基本的な意味と拡張された意味との間に共通性があることを示しており、その共通性が2つの意味に対するスキーマを構成していることになる、という見解である。なお本研究では、ある2つの構文的意味から共通する意味特徴を抽出できる場合、その意味特徴を「構文スキーマ」と呼ぶ。

ところで、Langacker は一連の研究において、多義を扱うモデルとして（スキーマティック）ネットワーク・モデルを提案している。これは、ある意味（節点）A からある意味（節点）B へと拡張し、A と B の間から共通性としてのスキーマ(schema) が抽出される、というカテゴリー化に基づいたモデルである。なお、ネットワーク・モデルにおいては（スキーマが関与している）メタファー⁹とシネクドキー¹⁰は取り込めるけれども、それだけでは不十分であるとして、これにメトニミーを加えることによって多義の実相を適切に捉えられると考え、3種類の比喩をそれぞれ独立した意味拡張のパターンであると位置づけ、3種類の比喩に基づくネットワークにより多義を分析しようという考え方が、前述の初山(2001)、瀬戸(2007)などにおいて共通しているといえる。

さて、本研究においては、複数の構文的意味の中で、中心義を認定する。瀬戸(2007: 47)は、中心義を「共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である」と規定している。そして、中心義は「ほかの意義を理解する上での前提となり、具体性（身体性）が高く、認知されやすく、想起されやすく、用法上の制約を受けにくい」といった性質を有する意味であると規定している。さらに、松本(2009b)は、瀬戸(2007)や Tyler and Evans(2001)を踏まえ、多義語における中心義は2種類の中心性を持つと主張している。1つは「概念的中心性」であり、もう一つは「機能的中心性」である。松本によれば、言語話者の概念化の観点からすれば、心的辞書の多義語の構造において、他の個別的意味の派生の基盤となるような、概念的に最も基本的な意味を中心に据えた方が、カテゴリーの構成のためには有益であり、

⁹ 前述の通り、メタファーに関して2つの意味が類似しているということは、2つの意味の間に共通点と相違点があるということであり、この「共通点」がすなわち2つの意味から抽出できるスキーマである。

¹⁰ 前述の通り、シネクドキーは類種関係に基づく拡張であるが、類は種に対して「スキーマ」的であることになる。

これが概念的中心性である。一方、言語話者の伝達活動の観点からすれば、一番よくアクセスする意味を中心に据えた方が、伝達活動のためには有益であり、これが機能的中心性である。そして、概念的中心性は瀬戸(2007)の表現で言い換えれば「意味展開の起点となるかどうか」ということであり、さらにその特徴が、瀬戸(2007)が指摘している「文字通りの意味である」、「関連する他の意味を理解する上での前提となる」、「具体性(身体性)を持つ」、「認知されやすい」という点と対応するとしている。また、機能的中心性は、瀬戸の表現で言い換えれば「想起されやすい」ということであり、この特徴が、瀬戸が指摘している「使用頻度が高い」、「用法上の制約を受けにくい」という点と対応するとしている。

また松本は、概念的中心性は基本的には、意味分析により多義語の全体的意味構造を構築するという作業を行うことにより見出されるものであり、そのためには、個別の意味を結ぶ派生のメカニズムが何であることを確定し、その派生の方向性を明らかにしなければならないということを主張している。そして、この派生のメカニズムの一種として、メタファーやメトニミーなどの比喻を挙げている。

以上を踏まえ、本研究では、複合語における構文的意味拡張の起点としての中心義を認定する。すなわち本研究は、松本(2009b)の指摘する2つの中心性のうち、「概念的中心性」に焦点を当てて¹¹分析することとなる。

2.4 その他援用する諸概念

本節では、2.2 節及び 2.3 節で既に提示した諸概念以外の、本研究において援用する認知言語学の諸概念について確認していく。

¹¹ なお、松本は、多義語において「概念的中心性」と「機能的中心性」は常に同一の意味が担うとは限らず(両者がずれることもあり)それが「中心的意味らしさ」を決めていると考えている。すなわち、両者を兼ね備えた意味が典型的な中心的意味(中心的意味らしい中心的意味)であり、一方の中心性のみを持つなら非典型的な中心的意味である、ということである。

2.4.1 概念化

本研究では、形態素、語、句、節、文など、あらゆる言語的単位において、それらの有する「意味」を「概念化」(conceptualization)そのものであると考える。

「概念化」とは、Langacker の一連の研究において用いられる術語である。Langacker(1987)によれば、概念化は、概念主体(conceptualizer)である言語使用者による、外界のある対象や出来事に対する、五感や感情などに基づく多様なやり方での捉え方(解釈)のことである。

なお、Langacker は一連の研究において、このような外部世界を解釈する概念主体の役割は、あらゆる言語表現に関与しているものであると考えており、意味のこのような特性を「主体性」(subjectivity)と呼んでいる。

また、松本(2003: 7)も指摘しているように、意味が概念化であるとしても、それは言語のために規約化(conventionalize)されたものである。このことに関して、松本は、日本語で数量を表す際に用いられる類別詞である「本」の用法を例として挙げている。「本」は鉛筆、ひも、木など基本的には細長い(一次元的な)物体に対して使われる。しかし、実際には、歯、ウィスキーのボトルなど、あまり細長いものとはいえないものに関しても「本」が用いられており、このような場合、実際の形は多少ずれていても、言語上は<細長い>ものとして扱われていると松本は指摘している。そして、このような境界線に関する判断は、言語の規約(convention)によるとし、これは意味が言語の約束事としての概念であることを示している、と指摘している。

2.4.2 意味の動機づけ

構文理論をはじめ、認知言語学における主要な特徴の1つとして、言語表現の意味に動機づけ(motivation)を求める、ということが挙げられる。

辻編(2002: 164-165)¹²によれば、「動機づけ」とは、「言語の諸現象の背後には認知的な営みが存在し、我々はそうした認知的営みのもとで言語を構造化し運用している

¹² 以下の引用部分は、吉村公宏氏執筆項目「動機づけ」の一部である。

ということ」であり、言語の恣意性に対立する概念と位置づけられる、とのことである。すなわち、言語現象の「動機づけ」を分析するということは、端的に言えば、「人間の言語の今ある姿の理由を解明する」ということである。

2.4.3 カテゴリー化

カテゴリー化は、靱山(2006: 160-161)によれば、人間が必要に応じて主体的に行う、この世に存在する多種多様なモノやコトを何らかの形で整理・分類して、その結果として得られた各「カテゴリー」に（それぞれの言語で）名前を付ける、という営みである。

本研究では、複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークを1つのカテゴリーと位置づけ、また、個々の構文的意味自体も（下位）カテゴリーであると位置づけるが、これらのカテゴリーはプロトタイプ・カテゴリーであるといえる。靱山(2006: 160-161)によれば、プロトタイプとは、「あるカテゴリーの典型的なメンバー、あるいは典型的なメンバーが満たす条件・特性の集合」である。例えば靱山は、「論文」とは何かを考える上で、「学術的な研究に値するテーマを取り上げている」、「独自の明示的な仮説が提示されている」といった条件を満たすものを、プロトタイプの論文（論文というカテゴリーにおけるプロトタイプのメンバー）であるとしている。

そして、プロトタイプに基づき形成されたカテゴリーが、「プロトタイプ・カテゴリー」である。

なお、「論文」の例に関して、前述の典型的な論文が満たすべき条件のうち、満たすものの数や満たす程度に応じて、プロトタイプに近いところに位置づけられたり、より周辺的なものとして位置づけられたり、というように、靱山(2006: 161)は、プロトタイプ・カテゴリーは「メンバー間に優劣が存在するとともに、カテゴリーの境界が明確ではない」と指摘している。

2.4.4 百科事典的意味

本研究では、個々の複合語の意味においても、また構文的意味においても、百科事典的意味を取りこんだ記述を行う。靱山(2006: 170-171)は、百科事典的意味を「ある語が指し示す対象（の典型的なもの、代表的なもの）がもつもろもろの性質・特徴、さらには、その対象と関連をもつ（たとえば、その対象から連想される）様々な事柄のことである」と規定している。

百科事典的意味を認める必要性を示唆する例の1つとして、靱山は「男の中の男」という表現を挙げている。この表現は、「男」の意味を、成分分析によって、＜＋人間＞＜＋オス＞と記述しただけでは理解不能であり、百科事典的意味として＜勇敢である＞、＜いざというときに頼りになる＞といった意味を認めることが必要である、としている。

（構文文法をはじめ）認知言語学ではこのように、世界についての様々な知識（百科事典的知識）と言語についての知識とを連続的に捉え、言語表現の意味を背後にある、世界についての豊かな知識体系との関わりの中で理解するという言語観（意味観）に立っている。

なお、松本(2003: 9)が指摘しているように、認知言語学の意味観における百科事典的知識とは、例えばある語が指す物体に関する科学的な知識のようなレベルのものではなく、言語使用者が日常的経験から知っている知識のことである。それは、世界についての民間モデル(folk model)であり、多くの場合、理想化された、専門知識によらない、素朴で日常的な世界解釈に基づくものである、と松本は述べている。

2.4.5 フレーム

フレームとは、靱山(2006: 169)において、「日常の経験を一般化することによって身につけた、複数の要素が統合された知識の型」とであると定義付けられている。靱山は、「乗り物に乗って出発点から目的地に到達するというプロセス」、「食堂での入ったときから支払いまでのプロセス」、「飛行場での搭乗までの手順」、「図書館での本の借り

方」など、人間が様々なことについてフレーム化した知識を持っているとし、同じ言語共同体に属する人たちは、経験に基づき身に付けた様々なことに関するフレームを共有しているからこそ、効率的にコミュニケーションを行うことができるのであると指摘している。

なお、本稿第4章では、〈行為〉に関するフレームを認めることにより、構文的意味拡張（特にメトニミーに基づく拡張）を包括的に分析することができるということを主張する。有蘭(2009: 261-264)では、(「手を入れる」、「手を加える」などの)慣用的連結句の構成要素である身体部位詞の意味拡張の主軸を成すものとして、「行為のフレーム」を設定している。有蘭によれば、〈行為〉と結びついているフレーム的知識として、〈道具〉(行為に用いられる道具)、〈行為者〉(行為を行う人)、〈対象〉(行為の対象)、〈力〉(行為に要求される能力)、〈技術〉(行為に要求される技術)、〈方法〉(行為に要求される方法)、〈生産物〉(行為の結果産みだされるもの)、〈領域〉(行為に伴う能力が作用する領域)を挙げている。本稿第4章ではこれらのうち、〈道具〉、〈行為者〉、〈生産物〉、〈領域〉と〈行為〉との結び付きに焦点を当てて検討していくこととなる。

2.4.6 図地反転

最後に、「図地反転」という概念について確認する。

河上(2000: 178-180)は、人間は知覚の対象を他のものから明確に識別でき、その結果として図(figure)と地(ground)の分化という現象が生じる、としている。

河上は、図と地の分化は知覚において基本的なものであり、視野の中に異なった性質の2つの領域が存在する場合、通常はどちらかが図として知覚され、その周囲が地となる、としている。その上で、図を「境界線のある形を持ち、前面に浮き出て見え、注意の対象となりやすい。」と規定し、地を「Figureの背景となって見え、注意の対象となりにくい。」と規定している。

ところが、2つの領域のいずれが図となるか確定せず、同一の領域が図となったり地となったりするケースもあるとしている。

河上は、この図と地の分化は、認知一般について言える原則であり、言語学においても重要であるとし、客観的には同一と考えられることでも、視点の取り方や注意の置き方によって、異なった解釈をする場合があるとしている。そして、図地反転の言語への反映として、以下のような例を挙げている。

(2) a. *The glass is half empty.*

b. *The glass is half full.*

すなわち、(2)の a と b とは、真理条件的意味は同一である。しかし、(2a)においては、グラスの中身が半分空いているという解釈がなされ、＜グラスの中の、液体が入っていない領域＞が図として焦点化されている。一方、(2b)においては、グラスに半分水が入っているという解釈がなされ、(2a)において図であった＜グラスの中の、液体が入っていない領域＞が地となり、地であった＜グラスの中の、液体が入っている領域＞が図となっているのである。

そして、河上は、認知言語学では、話者が表現の対象をいかに解釈したかが重要な役割を果たすと考えており、そのため言語現象の説明においては、話者の側からの主体的な関わり方を反映する図、地の概念が特に重要であると指摘している。

なお、河上も指摘しているように、Langacker が Langacker(1987)などにおいて提案している「ベース」と「プロファイル」という概念は、図と地の分化を基にした理論的構成概念である。ベースとは、ある語の意味を記述する上で必須の背景をなすものであり、プロファイルとは、ベースの中で、その語の意味が直接指し示す部分のことである。朧山(2006: 172)は、ベースとプロファイルという概念を導入することにより一般的に意味の違いを説明できる例として、「裸眼」と「肉眼」という語を挙げている。すなわち、「裸眼」は「メガネをかけて見ることとメガネをかけないで見ること」をベースとし、このベースの中で「メガネをかけないで見ること」をプロファイルしている、と指摘している。一方、「肉眼」は、「望遠鏡や顕微鏡を使って見ることと望遠鏡や顕微鏡を使わないで見ること」をベースとし、このベースの中で「望遠鏡や顕微鏡を使わないで見ること」をプロファイルしている、と指摘している。

2.5 本章のまとめ

以上、本章では、構文理論の理論的諸特徴について概観しつつ、複合語を構文として位置づけて分析するという方向性について提案した。また、次章以降での分析において援用する、認知言語学の諸概念について確認した。

第3章 [動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞の意味形成

3.1 はじめに

本章は、現代日本語における分析可能性(analyzability)の高い¹ほぼ全てのタイプの複合動詞（語彙的複合動詞及び統語的複合動詞）を考察対象とし、その意味形成の全貌を構文理論に依拠した共時的な分析によって明らかにすることを試みるものである。

以下に、本章の概要を述べる。

まず 3.2 節では、[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞²の構成要素間の意味的・統語的關係性について扱っている主な先行研究を概観し、それらの問題点を指摘する。

次に 3.3 節では、3.2 節での指摘を踏まえ、複合動詞を構文として位置づけることについて確認する。

3.4 節では、個々の複合動詞の意味の検討を踏まえ、ボトムアップ的に複合動詞における 13 の構文的意味を認定する。

3.5 節では、3.4 節で認定した複数の構文的意味間の相互関係を、メタファー及びメトニミーという比喻に基づく構文的意味拡張であると位置づけ、分析する。

3.6 節では、複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークにおける、

¹ 「分析可能性」は Langacker(1987: 292-298)の用語であり、複合表現の構成要素の意味が複合表現全体の意味に寄与する程度のことである。本章で考察対象とする「分析可能性の高い複合動詞」とは、複合動詞全体の意味への、前項要素及び後項要素それぞれの意味の貢献が直観により認められる事例を示している。3.2.1 節で提示する石井(2007a)の用語を用いれば、「熟合構造」を有すると考えられる複合動詞、すなわち、「構成要素の意味が明確に取り出せない、いいかえれば、複合動詞の意味を構成要素に分担させることができない」タイプの複合動詞（例：「当て付ける」、「出し抜く」、「出掛ける」、「仕切る」）は考察対象外とする。（これらは、典型的な分析可能性の低い複合動詞の事例であると考えられる。）また、多義的な複合動詞においては、基本的にその拡張の出発点となる中心義が最も分析可能性が高いと考えられるので、中心義を考察対象とする。多義的な複合動詞の、中心義以外の複数の意味（例えば、「この部屋にいと落ち着く」という例において用いられる「落ち着く」の意味や、「気持ちがすれ違う」という例において用いられる「すれ違う」の意味など）は、拡張の起点となる中心義（構成要素の意味と構文的意味とが連携して形成された意味）によって表される事態を基盤として、比喻に基づく拡張によって生じた意味であり、これらの意味は、（本章で考察対象とするような）構文としての意味の形成というよりは、単一の語（動詞）の意味拡張と類するプロセスを経て生じていると考えられる。

² 以下、本章では[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞を「複合動詞」と呼ぶこととする。

subjectification (主体化・主観化)³の関与について検討する。

最後に、3.7 節は本章のまとめである。

3.2 先行研究について

従来、現代日本語の複合動詞（語彙的複合動詞及び統語的複合動詞⁴）は様々な理論的枠組みにおいて精力的に分析がなされてきた。本節ではその中でも、構成要素間の意味的・統語的關係性に基づいて複合動詞を分類している主な先行研究を概観し、そこから見える問題点について指摘する。

3.2.1 先行研究概観

本節では複合動詞の分類をめぐる先行研究を概観する。

まず、姫野(1999)を取り上げる。

姫野(1999)は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞とを峻別している。最初に、姫野(1999)における語彙的複合動詞の分類について提示する。

姫野は、語彙的複合動詞の(日本語教育への応用も視野に入れた)分類方法として、以下のような試案を提示している。

姫野(1999)における語彙的複合動詞の分類

二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる

(a)並列関係：「～して～する」・「～したり～したりする」・「～して、その結果すなわち～することになる」

³ なお、subjectification の定義については 3.6 節で提示する。

⁴ 従来、現代日本語の複合動詞に関する主な先行研究はいずれも、語彙的複合動詞と統語的複合動詞（主に後項要素が「始める」「終わる」のようなアスペクト要素であるタイプの複合動詞）とを峻別するという立場を採っているが、後述するように、本研究においては両者の連続性について詳細に分析していく。

- ・ 継起：「流れ着く」 流れて（流れてから）着く
- ・ 手段・原因：「縫いつける」 縫って（縫うことにより）つける /
「焼け死ぬ」 焼けて（焼けることにより）死ぬ
- ・ 付帯状況：「遊び暮らす」 遊んで（遊びながら）暮らす
- ・ 並起：「泣き叫ぶ」 泣いたり叫んだりする
- ・ 類似：「書き記す」 書いてその結果、すなわち記す（ことになる）

(b) 比喩的關係：「～するようにして、～する」

- 「書き殴る」 まるで殴るように乱暴に書く
- 「盗み見る」 他人の視線を盗むようにしてこっそり見る

(c) 主述、補足の關係：「～することが～する」・「～することを～する」

- ・ 主述：「あり余る」 あることが余る / 「飲み足りる」 飲むことが足りる（＝十分だ）
- ・ 補足：「出し惜しむ」 出すことを惜しむ / 「鳴き交わす」 鳴くことを交わす

後項動詞を他の言い方にしなければならない

- 「投げ込む」 投げて、中に入れる / 「投げつける」 投げて、対象物に強く当てる

- 「震え上がる」 すっかり震える

前項動詞を他の言い方にしなければならない

- 「打ち切る」 継続状況を途中で切る（＝終了する） / 「引き継ぐ」 あとを
続いて継ぐ / 「さしつける」 押してつける

二つの動詞とも他の言い方にしなければならない

- 「落ち着く」・「取りなす」・「賸ける」

次に、姫野(1999)における統語的複合動詞の分類について提示する。姫野(1999)は、影山(1993)を踏まえ、以下の30例を統語的複合動詞であると認定している。

姫野(1999)における統語的複合動詞の分類

- ・ 始動：「～かける」・「～かかる」・「～だす」・「～始める」

- ・ 継続：「～まくる」、「～続ける」
- ・ 完了：「～終える」、「～終わる」、「～尽くす」、「～きる」、「～通す」、「～抜く」、「～果てる」
- ・ 未遂：「～そこなう」、「～そこねる」、「～損じる」、「～そびれる」、「～かねる」、「～遅れる」、「～忘れる」、「～残す」、「～誤る」、「～あぐねる」
- ・ 過剰行為：「～過ぎる」
- ・ 再試行：「～直す」
- ・ 習慣：「～つける」、「～慣れる」、「～飽きる」
- ・ 相互行為：「～合う」
- ・ 可能：「～得る」

以上、姫野(1999)を概観した。

次に、語彙意味論⁵の枠組みにおける複合動詞の先駆的研究として、影山の一連の研究（影山(1993)、影山(1999)など）における複合動詞の扱いについて取り上げる。

最初に、影山(1993)における語彙的複合動詞の分類について提示する。

影山(1993)は、動詞の項構造⁶における外項の存在の有無により、語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせが説明できるとしている。この規則を影山(1993)は「他動性調和の原則」と呼んでいる。すなわち、項構造の観点から動詞は他動詞（外項と内項を取る動詞／例：読む、叩く、壊す）、非能格動詞（外項を取る自動詞／例：走る、

⁵ 米山(2001: 147)によれば、語彙意味論においては基本的に、統語構造には語（主に動詞）の意味の特性が反映されると考えられている。この背景には、生成文法において、項構造を基盤とした説明に重点がおかれるようになったという状況があり、これに伴い、動詞がどのようなタイプの項を取るか、またその項の特性はどのようなものか、ということに関心が集まることになったということである。そして、このような問題意識は、語の意味は概念的な要素の組み合わせから成る内部構造を持つという考え方と相まって、意味に対する語彙・概念的な見方を推し進め、このような考え方を具体化したものが語彙概念構造（lexical conceptual structure: 以下、LCS と呼ぶ）であり、語彙概念構造を基盤とする意味論が一般に語彙意味論（Lexical Semantics）と呼ばれる枠組みである、ということである。

⁶ 項構造は、動詞が文法的に取る項を表示するものである。なお、影山(1993)では外項と内項とを区別し、外項は山形括弧の外側に、内項は内側に表示する方法をとっている。例えば、「飲む」という動詞は次のように表示される。（なお、意味役割 Ag は agent を、Th は theme を表している。）

飲む（Ag<Th>）

飛ぶ、喋る) 非対格動詞(外項を取らない自動詞/例:落ちる、ある、壊れる)に分類され、語彙的複合動詞は外項を取る動詞(他動詞と非能格動詞)同士か、外項を取らない動詞(非対格動詞)同士によって作られる、という原則である。

但し、影山は他動性調和の原則が適用できない例外としての語彙的複合動詞の存在も認めている。例えば、「打ち上がる」「突き刺さる」などは他動性調和の原則に違反しているが、これは「打ち上げる」「突き刺す」という対応する他動詞からの派生によって生じたものであり、例外(原則の対象外)であるとしている。また、例えば「去る」という後項要素は「持ち去る」「取り去る」「逃げ去る」「消え去る」のように三種類どの動詞とも複合するという事実⁷に対して、これは項構造とは別の、意味構造のみで起こる複合であり、(項構造レベルの原則である)他動性調和の原則の適用外の事例であるとしている。

さて、影山(1993)では、他動性調和の原則に加え、この原則が適用できる複合動詞が構成要素間の意味的な関係性に基づいて5つのパターンに大別できるとしている。以下に、この5つのパターン及びそれぞれに該当する複合動詞の主な例を提示する。

影山(1993)における語彙的複合動詞の分類

- a.手段:「折り曲げる」、「叩き潰す」、「押し倒す」、「切り取る」
- b.様態:「泣き暮らす」、「駆け寄る」、「乱れ飛ぶ」、「飲み明かす」
- c.原因:「焼け死ぬ」、「崩れ落ちる」、「寝静まる」、「歩き疲れる」
- d.並列:「飛び跳ねる」、「光り輝く」、「慣れ親しむ」、「泣き叫ぶ」
- e.補文:「見逃す」、「売り急ぐ」、「乗りこなす」、「言い交す」

影山は、他動性調和の原則及び上記の分類については、影山(1993)以降の研究(cf.影山(1999))においても引き続き妥当な考え方として主張⁸している。

⁷ 影山のこの考え方には、これらの全ての「去る」が同一の意味である、という前提がある。この問題に対し、松本(2009a)は、「逃げ去る」、「消え去る」、「持ち去る」などにおける「去る」は移動動詞であり、「取り去る」、「抜き去る」などにおける「去る」は使役移動動詞であるとし、「去る」に少なくとも2つの意味があると主張している。本研究でも、松本(2009a)の考え方を採用する。(なお、松本(2009a)は、後項要素「出す」と「込む」のそれぞれの意味についても同様の見解を提示している。)

⁸ なお、以上の影山(1993)の主張を、同じく語彙意味論の枠組みにおける伊藤・杉岡(2002)

次に、影山(1993)及び影山(1999)における統語的複合動詞の扱いについて提示する。

影山は、前述の姫野が認定している統語的複合動詞 30 例から「～かかる」、「～そこねる」、「～果てる」を除く 27 例を統語的複合動詞であると認定している。そして、語彙的複合動詞は語彙部門において形成される複合動詞であり、統語的複合動詞は統語部門において形成される統語的複合動詞であるとして、両者を明確に峻別している。そして、統語的複合動詞を語彙的複合動詞から区別するテストを提示している。以下にその主なものを提示する。

まず、「照応の島の制約」である。影山(1999: 190-191)によれば、一般に複合語の内部に「それ」などの代名詞を入れることはできず、この制約は(1)のように語彙的複合動詞には正しく当てはまるが、このテストは(2)のように統語的複合動詞には適用されない、と指摘している。

(1)兄が跳んだのを見て、弟も跳び上がった。

*兄が跳んだのを見て、弟もそうし上がった。

(2)太郎がまだ走っているのを見て、次郎もそうし続けた。

また、影山は前項要素を「尊敬語」や「漢語動名詞 + する」に置き換えるというテストも提示している。すなわち、語彙的複合動詞においては(3)のようにこの置き換えができないのに対し、統語的複合動詞においては(4)のようにこの置き換えが可能である、というものである。

(3)先生は荷物を持ち帰った。 *お持ちになり帰った。 / 歩き疲れる *歩行し疲れる

(4)先生は日本酒を飲み始めた。 お飲みになり始めた。 / 歩き始める 歩行し始める

影山は、以上のような「そうする」、「尊敬語」、「動名詞 + する」といった表現は、統語的な性質を持っており、そのような表現が「走り続ける」、「飲み始める」などの

も支持している。

タイプの複合動詞の内部に入るということは、これらの複合動詞そのものも統語的な性質を持っているということになると指摘している。そして、統語的というと、普通は文や句を指すので、これらの統語的複合動詞は元々は句である（すなわち、深層構造では前項要素と後項要素が別々の語である）ということになるが、「さえ」などの副助詞が構成要素の間に介入することはできないので、表面上は（表層構造では）「語」として一体化している、と指摘している。

また、影山(1999: 192-193)は、統語的複合動詞は統語的な構造に由来しているとするれば、その性質は基本的に補文構造（complementation）という形で捉えることができるとしている。補文構造とは、影山によれば「V1 することを V2」または「V1 することが V2」のような構造であり、例えば「彼は昼食を食べ始めた。」という文は概略、(5)のような構造になる。

(5)彼は[昼食を食べ]始めた。

そして、この構造を元にして、「食べ」を「始める」に編入すると、表面上は「食べ始める」という複合動詞になる、としている。

なお、影山の一連の研究における、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の、語形成部門の相違による峻別という考え方は、伊藤・杉岡(2002)や後述する由本(2005)などにおいても支持されている。

以上、影山の一連の研究における複合動詞の扱いについて提示した。

次に、由本(2005)における語彙的複合動詞の分類について取り上げる。

由本(2005)も影山(1993)と同様、語彙意味論、特に影山(1993)の提案するモジュール形態論の枠組みで複合動詞研究を行っている。

モジュール形態論とは、由本(2005: 6)によれば、「語形成は複数の部門・レベルで起こり、それが属する部門やレベルによって異なる形態・統語・音韻的性質を示す」という点、及び「語形成が起こる部門やレベルに関わらず共通の形態論的制約によって統制されている」という点の、大きく2つの特徴を有する仮説である。

さて、影山(1993)が語彙的複合動詞の構成要素の組み合わせ規則を項構造レベルで捉えているのに対して、由本(2005)は、語彙的複合動詞における動詞の組み合わせの

制限は2つの動詞のLCS⁹の合成が適切な動詞概念を形成するための意味的制約として説明できるものがほとんどであるとしている。そして、このような制約は、項構造レベルでは説明できないものであることから、語彙的複合動詞はLCSレベルで捉えるべきであるとしている。以下、由本(2005: 130-131)における、LCSレベルでの5つの制約、及びその制約を適用できる複合動詞の例を提示する。

由本(2005)の語彙的複合動詞におけるLCSレベルの5つの制約

- a. 並列関係：変項の同定が二つのLCS内で同じ意味役割をもつものの間でのみ可能であり、また、最終的に単純な事象構造に再分析されるため、変項は全て同定されねばならず、同じ関数で表されるLCSをもつ動詞、さらにはアスペクト素性も同一である類義語の合成以外は容認されにくい。(例：「泣き叫ぶ」、「忌み嫌う」、「恋い慕う」)
- b. 付帯状況・様態：V1は継続相として解釈できるものに限られる。変項の同定は二つのLCS内で同じ意味役割をもつものの間でのみ可能だが、同定されずに残されたV1の項が複合語の項として受け継がれることもあり得る。ただし、それぞれの第一項(主語)は必ず同定される。(例：「持ち寄る」、「遊び暮らす」、「すすり泣く」)
- c. 手段：意図的行為を表す動詞(CONTROL関数で表されるLCSをもつもの)の組み合わせに限られる。それぞれの第一項(動作主)が必ず同定され、また他の項についても、異なる意味役割をもつもの同士でも、使役の連鎖が成立しやすいように、同定される必要がある。(例：「切り倒す」、「吸い取る」、「言い負かす」)

⁹ 影山(1999)によれば、LCS(語彙概念構造)とは、統語構造との対応を重視して作られた意味構造であり、一種の論理式を用いる。その論理式は、限られた数の意味述語(semantic predicate)とその項(argument)で成り立つ。意味述語は、BE(<静止した状態>)、AT(BEと一緒に用いられて、<抽象的状态ないしは物理的位置>を示す)、AT-IN(<三次元的な空間の内部>)、AT-ON(<二次元的な広がりでの接触>)、BECOME(<変化>)、MOVE(<移動>)などがある。項は[]で示される。例えば *Jack is in Chicago.* という文の意味は、LCSで、以下のように記述される。
[state[Jack] BE AT-IN-[placeChicago]]

d.因果関係：V2 は非意図的事象を表す非対格動詞に限られる。それぞれの第一項は、意味役割の違いに関わらず同定される。(例：「泣きぬれる」、「溺れ死ぬ」、「流れ着く」)

e.補文関係：V2 は事象 (Event) を項としてとる他動詞または非対格自動詞に限られる。項の同定は、V2 の項として V1 の LCS をまるごと埋め込むことで自動的に起こる。(例：「見逃す」、「書き落とす」、「使いこなす」)

なお、由本(2005)では、基本的には語彙的複合動詞の構成要素の組み合わせは上記の a~e の概念意味論的制約に基づいて行われるが、これと、「主語の義務的同定」(2つの動詞の主語に相当する第一項が義務的に同定される)や、「Burzio の一般化に従った格素性の浸透」(外項をもつものだけが対格を付与するという一般的原則)といった形態統語的制約とが連携している、とも主張している。

以上、由本(2005)について提示した。

次に、松本(1998)における語彙的複合動詞の分類について取り上げる。

松本は、影山(1993)を受けて、まず影山の提案する他動性調和の原則について、そもそも自動詞の非対格性や非能格性の規定は、いかなる点に主眼を置いたテストをするかによって判断に揺れが出てくるため、正確に二分することが難しい、としている。そして、そもそも影山が語彙的複合動詞の構成要素の組み合わせを考察する上での素材として用いている項構造の概念は、意味構造と統語構造との接点にある構造であり、項構造での一般化は意味に基礎を置く文法現象の説明には有効であるものの、語彙的複合動詞の組み合わせの問題は純粹に意味的な性格のものと思われる、としている。

そして、この点を踏まえ、松本は語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせは、意味構造において述べられる「主語(卓立項)一致の原則」と、動詞の意味構造において課せられる意味的諸条件により制約されている、と考えている。

まず、「主語一致の原則」について松本(1998: 72)は以下のような定義付けをしている。

主語（卓立項）一致の原則

二つの動詞の複合においては、二つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者¹⁰（通例、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならない。

また、主語一致の原則は直接の複合によって作られると考えられる複合動詞のみに当てはまる原則であり、例外も存在するものの、そのような例外においては必ず、主語一致の原則に合致する意味的に関連した複合動詞形がある、という点を指摘している。ここでの例外として、松本は「打ち上がる」、「持ち上がる」、「つり下がる」、「積み重なる」などを挙げている。これらの複合動詞は、前項要素の目的語にあたる項と後項要素の主語にあたる項が同一であるが、通常複合動詞においては2つの動詞の主語にあたる項同士が同一認定を受けるため、これらの複合動詞は例外であると認定している。しかし、これらの複合動詞には必ず対応する他動詞が存在し、言い換えれば主語不一致型の複合動詞は対応する複合他動詞形が存在する場合のみに許され、これらの複合動詞は対応する他動詞からの自動詞化によって作られたとする（影山(1993)などにおいて主張されている）説を支持している。加えて、これらの複合動詞は（自動詞化によって形成されたという点から）構成要素である2つの動詞の直接の複合によって生じたものではなく、主語一致の原則は直接の複合によって作られる複合動詞に当てはまるデフォルト原則として日本語に存在する、と主張している。

次に、松本(1998: 51-67)の提示している、動詞の意味構造に課せられる意味的諸条件について、その概要及び該当する複合動詞を以下に示す。

松本(1998)の語彙的複合動詞の組み合わせにおける意味的諸条件

- a. 前項が後項の手段¹¹を表すもの：前項要素がすべて動作主的動詞であり、後項要素は何らかの状態・位置変化の使役を表す動詞である。（例：「押し倒す」、「たたき落とす」、「打ち上げる」、「押し出す」、「掃き集める」）

¹⁰ 卓立性の高い参与者を認定する要因として松本(1998)は、主に行為者性、原因性、有生性、変化の主体であることなどがある、と指摘している。

¹¹ 松本(1998)は「手段」を「使役者が、その使役を達成させるための一段階として行う具体的行為である」と定義付けている。

- b.前項が後項の様態・付帯状況を表すもの：前項要素が後項要素で表された移動のプロセスに付随する様態・付帯状況を表すものである。なお、様態・付帯状況（V1）を含む動詞においては、様態・付帯状況が主要な出来事（V2）と同じ期間に継続するものでなければならない。（例：「駆け上がる」、「流れ落ちる」、「流れ出る」、「売り歩く」）
- c.前項が後項の原因を表すもの：後項要素（結果を表す非動作主的動詞）が状態変化を表し、前項要素がそれを引き起こす原因となる出来事を表すものである。（例：「降り積もる」、「溺れ死ぬ」、「焼け死ぬ」、「泣きぬれる」、「飲みつぶれる」）
- d.前項動詞を意味的主要部とするもの（比喩の様態）：後項要素が前項要素で表された事象の様態を表すものである。（例：「咲き誇る」、「咲き乱れる」、「踊り狂う」、「泣き狂う」、「思い乱れる」）
- e.前項動詞を意味的主要部とするもの：前項要素が意味的主要部であり、後項要素が特定の意味を前項要素の意味構造の中に加えていて、しばしば後項要素が副詞的であるとか接辞化しているなどとされてきたようなものである。（例：「言い差す」、「晴れ渡る」、「叱りつける」、「拾い残す」、「見上げる」、「見返す」）
- f.前項が後項の背景的情報を表すもの：後項要素を意味的主要部とし、前項要素が後項要素の背景を具体的に表していると考えられるものである。（例：「食べ残す」、「売れ残る」、「取りこぼす」、「見落とす」、「見分ける」）

以上、松本(1998)について提示した。

最後に、石井(2007a)における複合動詞の分類について提示する。

石井(2007a)は、自立する動詞同士が結び付いた複合動詞は、形態論的には複合語であるが、構成要素間の意味的な関係をみると、複合語的な関係（複合構造）、派生語的な関係（派生構造）、単純語的な関係（熟合構造）の3類に大別できるとし、さらにその3類を下位分類している。その概要を、以下に提示する。

石井(2007a)における複合動詞の分類

複合構造	過程結果構造	他動的過程結果構造（例：「押し倒す」、「洗い流す」）	
		自動的過程結果構造（例：「駆け寄る」、「溢れ出す」）	
	非過程結果構造	再帰的過程結果構造（例：「振りかざす」、「着膨れる」）	
		限定構造	様態限定構造（例：「すすり泣く」、「あさり歩く」） 状態限定構造（例：「持ち歩く」、「出迎える」）
派生構造	語彙的派生構造	並列構造	継起的並列構造（例：「生まれ育つ」、「傾き倒れる」） 非継起的並列構造（例：「忌み嫌う」、「遊び戯れる」）
		語彙接頭辞構造（例：「押し隠す」、「打ち消す」）	
	文法的派生構造	語彙接尾辞構造（例：「拝み倒す」、「鍛え上げる」）	
熟合構造	完全熟合構造	文法接尾辞構造（例：「歩き始める」、「知らせ合う」）	
	不完全熟合構造	（例：「当て付ける」、「出し抜く」） （例：「出掛ける」、「仕切る」）	

次に、石井（2007a: 108-118）に基づいて上記のそれぞれの構造についての概要を提示する。

まず、 の他動的過程結果構造は、前項要素が主体の客体に対する働きかけの動作を表し、後項要素がそれによってひきおこされる客体の変化を表すことで、前項要素が複合動詞全体の運動の過程面を、後項要素が同じくその結果面を分担して表すという構造を持つ、というものである。

次に の自動的過程結果構造は、前項要素が主体の動作を表し、後項要素がそれによって実現される同じ主体の変化を表すことで、前項要素が複合動詞全体の運動の過程面を、後項要素が同じくその結果面を分担して表すという構造を持つ、というものである。

の再帰的過程結果構造は、前項要素が主体の客体に対するはたらきかけの動作を表し、後項要素がそれによりひきおこされる主体の変化を表すことで、前項要素が複

合動詞全体の運動の過程面を、後項要素が同じくその結果面を分担して表すという構造を持つ、というものである。

の様態限定構造は、前項要素が後項要素の表す動作の様態面を限定する構造であり、前項要素は後項要素の動作がどのように行われるかを表す、というものである。

の状態限定構造は、前項要素が主体の状態を表し、後項要素がそのもとで行われる主体の動作（「持ち歩く」など）、主体の変化（「持ち帰る」など）、客体の変化（「つかみ出す」など）、再帰的な主体の変化（「出迎える」など）などを表すという構造である。

の継起的並列構造は、時間的に先行する運動を前項要素が、それに後続する運動を後項要素が表す構造である。

の非継起的並列構造は、前項要素・後項要素の表す二つの運動の間に時間的な前後関係がなく、同時的であるから、現実には一つの運動でありながら、それを前項要素の表す運動とも後項要素の表す運動とも解釈できるという関係にあるものが多く、従って前項要素と後項要素は類義的になる、というものである。

の語彙接頭辞構造は、前項要素が語彙的な接頭辞として、後項要素の表す運動の様態面を形式的に限定する（強意等の意味を添える）構造である。

の語彙接尾辞構造は、後項要素が語彙的な接尾辞として、前項要素の表す運動の様態面を形式的に限定する（強意・方向性などの形式的な意味を添える）構造である。

の文法接尾辞構造は、後項要素が文法的な接尾辞として、前項要素の表す運動の時間的局面やその起こり方を限定する構造である。

の完全熟合構造は、複合動詞の意味に照らして、前項要素・後項要素共にその意味的分担が不明確なものである。

最後に、の不完全熟合構造は、複合動詞の意味にどちらか一方の構成要素の意味がかかわっていることは認められるが、もう一方の構成要素の意味的分担が不明確なものである。

以上、石井(2007a)について概観した。

3.2.2 先行研究の問題点

3.2.1 節で概観したように、従来、現代日本語の複合動詞に関して、構成要素間の意味的・統語的關係性に基づく分類は、様々な理論的枠組みにおいて精力的に分析がなされてきた。本節では、これらの先行研究において共通する問題点（一貫して詳細に検討されていない課題）を3点提示する。

1 点目は、複合動詞の分類における非連続性についてである。

既に第2章で提示した、Bolinger(1977)における「意味と形式の一对一対応」という意味と形式との關係に関する基本原理及び Goldberg(1995)における「動機づけ最大化の原則」に基づいて考えると、現代日本語における全てのタイプの複合動詞が「動詞連用形 + 動詞基本形」という同一形式を有する以上、全てのタイプの複合動詞の間に何らかの意味的連關性を認めることが可能であると考えられる。

しかし、いずれの先行研究においても、構成要素間の關係性に基づき、例えば「手段」、「原因」、「並列」などのような、それぞれのタイプの複合動詞群を非連続的に分類するに留まっている。このような分類の方法に依ると、それぞれのタイプの間の意味の緩やかな連続性を適切かつ詳細に記述することはできない。

なお、石井(2007a)においては、例えば前述のように「押し倒す」などを「他動的過程結果構造」、「駆け寄る」などを「自動的過程結果構造」、「振りかざす」などを「再帰的過程結果構造」と認定し、これら3つのタイプを全て「過程結果構造」として1つにまとめている。すなわち、いずれのタイプも、複合動詞の表すひとまとまりの運動を二つの局面に分割すると、時間的に先行する過程の局面を前項要素が、それに後続する結果の局面を後項要素が表すものであるとしているのである。3つのタイプを厳密に区分するというわけではなく、これらのタイプの共通性として「過程結果構造」を提示している点は有益である。但し、本稿の次節で後述するように、石井(2007a)において「自動的過程結果構造」と分類されている（また、影山(1993)や由本などにおいては「原因」タイプと分類されている）語彙的複合動詞の中には、因果關係の解釈の程度に一定の差がみられ、石井(2007a)の指摘は参考にできるものではあるが、複合動詞の分類においてさらに詳細に、複合動詞の意味の連続性、段階性を記述していく

ことが可能であろうと考えられる¹²。

ところで、前述のように影山(1993)では、他動性調和の原則を提案することにより、例えば「打ち上がる」や「持ち去る」といったタイプの複合動詞をこの原則が適用できない例として位置づけている。(特に「打ち上がる」のように、前項要素と後項要素との間で主語(卓立項)が一致しないタイプを、対応する他動詞からの派生として考え、他の語彙的複合動詞のように「複合」によって生じる事例ではない、という考え方は、松本(1998)、伊藤・杉岡(2002)など多くの先行研究において同様に採られている。)すなわち、(語彙的)複合動詞において、規則に合う事例と例外的な事例とを峻別している。本研究では次節以降の分析において、考察対象とする範囲の全ての複合動詞について、規則に合う事例と例外的な事例とを峻別するという立場は取らず、包括的に扱っていく。

2点目は、構成要素間の関係性を表す術語の位置づけについてである。

特に語彙的複合動詞を扱う多くの先行研究において、既にみたように、その分類において、構成要素間の関連性を、「様態」、「原因」、「並列」といった簡略的なラベル付けによって示している。これらは、複合動詞一語の意味を捉える上で、厳密には構成要素それぞれの意味のみからは導かれない意味特徴の一部分であると考えられるが、このような意味特徴の出所、理論的位置づけが、いずれの先行研究においても明示されているとは言い難い。

3点目は、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との連続性についてである。

1点目の問題とも関連するが、語彙的複合動詞も統語的複合動詞も、共に[動詞連用形 + 動詞基本形]という同一形式を有しており、直観的にも両者の間に意味的な連続性が認められる。特に、影山(1993)、伊藤・杉岡(2002)、由本(2005)において「補文」

¹² なお、石井(2007a: 118)が指摘しているように、石井による複合動詞の分類は、純粹に意味論的な分類というわけではなく、複合動詞の語構造を、あくまでアスペクト・ヴォイスモデルの観点から、過程結果構造を中心として整理したものであり、「個々の複合動詞ないし構成要素の具体的な語彙的意味を対象とした意味論的な分析の基底にあるもの」であると位置づけている。本研究の次節以降の分析では、石井(2007a)の観点も部分的に参考にはしつつも、複合動詞の分類は、(事態認知の在り方に即した形で)徹底した意味論的な分類を行うものであり、複合動詞の分類に複数のレベルを想定はしない。(なお、石井(2007a: 93)によれば、アスペクト・ヴォイスモデルとは、現代語の複合動詞の多くはひとまとまりの運動を動作面と変化面とに分析し、それらを主体 = 客体あるいは主体 = 主体関係の中に位置づけながら、過程 結果という関係で再統一する、分析 = 統一的表現形式であることを基本としていると考える、というモデルである。)

タイプであると位置づけられている語彙的複合動詞（石井(2007)においては「語彙的派生構造」と位置づけられているタイプ）と「統語的複合動詞」と位置づけられているタイプ（石井(2007)においては「文法的派生構造」と位置づけられているタイプ）とは、意味構造上、近接しており、「補文」タイプ（「語彙的派生構造」タイプ）の複合動詞を典型的な語彙的複合動詞と典型的な統語的複合動詞との中間に位置づけ、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との連続性を探っていくことは可能であると考えられる。しかし、3.2.1 節で提示したいずれの先行研究においても、語彙的複合動詞と統語的複合動詞とは（語形成部門の相違、などとして）非連続的に区別されている。

なお、三宅(2005: 71-72)では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性を分析する可能性について示唆している。すなわち、三宅は、「複合動詞を、形成される部門の違いに対応するという静的な二分類ではなく、助動詞という機能語としての性質を獲得するに至る、文法化という動的な過程」に基づき「捉えなおしてみることの有益性もあながち否定できないと思われる」と述べている。本研究はこの三宅(2005)の指摘を基本的には支持するものであり¹³、本章の次節以降の分析では、三宅の指摘を具体的に、また詳細に考察していく。

以上、本節では、複合動詞の分類に関する先行研究に一貫してみられる問題点について指摘した。

3.3 構文としての複合動詞

前節で提示した問題点を解決すべく、本研究では考察対象とする複合動詞について、[動詞連用形 + 動詞基本形]という同一形式に複数の意味が結び付いた多義的な（複合語レベルの）構文であると位置づけ、また複合動詞の意味形成を構文的多義ネットワーク

¹³ 但し、三宅(2005)は、複合動詞の後項要素レベルの文法化という点に着目しているが、本研究は次節以降で詳述するように、あくまで「構文」レベルでの文法化（及び主体化）に主眼を置いて、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との連続性を検討していくものである。なお、本章は、構文レベルにおいて複合動詞の意味形成を体系的、包括的に扱うことを目的としているものである。したがって、例えば単独で用いられる場合の「出す」と（「雨が降り出す」などの）統語的複合動詞の後項要素としての「出す」との意味的連続性や文法化の過程の分析など、個々の複合動詞の、後項要素レベルに特化した意味拡張の具体的な検討は本章においては考察対象外とする。

クの形成であると位置づけ、構成要素間の関係の多様性を包括的、体系的に分析する。

なお、第2章でも述べた通り、Langacker(1999: 109)では、単一の合成からなる構造体を最小構文と位置づけている。本研究もこの考え方に従うものであり、考察対象とする複合動詞を、現代日本語における(2つの形態素による、単一の合成によって形成される)最小構文の1つの事例であると位置づける。

3.4 複合動詞の構文的多義性

本節では、分析可能性の高いほぼ全てのタイプの複合動詞を対象として、個々の複合動詞の意味(多義語である複合動詞の場合には、拡張の出発点であり、最も分析可能性が高いと考えられる、中心義)を分析し、そこからボトムアップ的に抽出した(現代日本語において確立していると考えられる)13の構文的意味を提示する。

なお、以下では、意味的に類すると考えられる複合動詞群(以下、グループ、グループ...と呼ぶこととする)の主な事例を提示し、それらの複合動詞群における個々の複合動詞の意味を検討した上で¹⁴ボトムアップ的に抽出した、それらの複合動詞群に共通する意味である構文的意味を提示していく。

本稿では、以下、構文的意味の一部分に、V1という下線、及びV2という下線を施す。これは、構文的意味のうち、現代日本語の母語話者が直観的に前項要素の語彙的意味が動機づけていると認識できる意味特徴をV1とし、後項要素の語彙的意味が動機づけていると認識できる意味特徴をV2とするものであるが、V1とV2はあくまでも構文的意味というゲシュタルトの中に知覚される部分であると位置づける。(すなわち、構文的意味が、非連続的に分割された意味的なプリミティブから完全に合成的に構築されるとは考えない。)

ところで、松本(1997: 128)は、「移動」を「時間の経過に伴って起こる物体の位置の

¹⁴ なお、本稿では、グループ からグループ までのそれぞれのグループに属する複合動詞の数が非常に多いため、代表例として数語のみの具体的な意味記述を提示した上で、構文的意味を提示していく。なお、認知言語学のボトムアップ的なアプローチにおいては、本研究における、個々の複合動詞の詳細な意味分析を行った上で構文的意味を抽出するという分析方法そのものも重要な点の一つであると考えている。

変化」であり、移動には「移動物、移動の経路、そして移動の継続時間が存在する」と規定している。また松本(1997: 129)は、「移動の様態」を「移動に伴う手足の動き、速度、手段(乗り物)のように、移動と直接関わる付随的要素」と規定している。以下、本研究では「移動」及び「移動の様態」について、これらの規定に従う。

3.4.1 構文的意味

最初に、(6)にグループの主な例を提示する。

- (6) 駆け上がる・這い上がる・舞い上がる・跳ね上がる・飛び上がる・
浮き上がる・起き上がる・駆け登る・駆け降りる・飛び降りる・滑り降り
る・舞い降りる・走り回る・歩き回る・駆け回る・這い回る・飛び回る・
跳ね回る・転がり回る・泳ぎ回る・駆け寄る・歩み寄る・乱れ飛ぶ

このうち、例えば「駆け上がる」は(7)のような文において用いられる。

- (7) a. 私は、リングに駆け上がり、涙を流しているメダルにとびかかって殴
り倒そうとする人物が出現するのを、なかば本気で待っていた……。
(『一瞬の夏』)
- b. 約 300 人の若者たちが水ごりで身を清めた後、2 km にわたる神社の参
道を一気に駆け上がります。
(http://www.akitafan.com/special/detail.html?special_id=61)
- c. 急な坂道を駆け上がるイノシシを目撃した。

(7)に挙げた例文を踏まえ、「駆け上がる」の中心義は、＜移動主体(人やその他の生物)が、足を勢いよく動かして高い速度で前進するという動きを伴い、起点である下

方の空間領域から上方の空間領域へ移動する >¹⁵と記述できる。

また、「走り回る」は(8)のような文において用いられる。

- (8) a. なにしろ、何人もの子供を次々に肩車したりおんぶしながら、遊園地を奇声を張り上げながら走り回ったり、時には、ぐるぐる回しを十人ほどの子供に数回ずつしてやって、拳句の果てに、自分の方が目を回し、青ざめたまま芝生に伸びていたこともあったのだから。(『若き数学者のアメリカ』)
- b. だが、窓ガラスの破片の中から飛び出してくる乗客は一人もいず、ただ悲鳴をあげて煙の中を走り回るばかりだった。(『風に吹かれて』)
- c. 昨夜、家の周りを数台のバイクが走り回っていた。

(8)に挙げた例文を踏まえ、「走り回る」の中心義は、＜移動主体(人やその他の生物、もしくは人が制御可能な乗り物)が、高い速度で前進するという動きを伴い、ある地点を中心としたその周囲やある空間領域一帯を移動する >¹⁶と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <移動主体が、ある動き_{v1}を伴い、ある移動_{v2}を実現する>

なお、構文的意味 を含め、以下の構文的意味の記述において＜実現する＞という意味特徴を用いるが、この意味特徴には、行為者の意志のもとに実現する事態と、非意志的に実現する事態とを共に含めている。また、その事態の実現を、主体や行為者が望む場合と望まない場合とを共に含めた中立的な意味で用いることとする。

さて、構文的意味 を抽出できる、グループ に属する個々の複合動詞は、いずれも一語全体として何らかの移動を表している。本研究では、移動において存在する「移

¹⁵ この意味記述において、柴田編(1976)の「アガル」の意味記述、及び、柴田編(1979)の「カケル」の意味記述を一部参考に行っている。

¹⁶ この意味記述において、柴田編(1979)の「ハシル」の意味記述を一部参考に行っている。

動物」(移動主体)及び移動の継続時間に関する情報は主に構文レベルで担っており、「物体の位置の変化」及びその際の「移動の経路」に関する情報(移動における移動主体の位置関係や方向性)は主に後項要素によって動機づけられるものである(すなわち、この情報がV2という意味特徴である)と考える。「物体の位置の変化」及びその際の「移動の経路」に関する情報について、例えば前述の「駆け上がる」という複合動詞においては、<起点である下方の空間領域から上方の空間領域へ移動する>という意味特徴は主に後項要素である「上がる」によって動機づけられるものであり、「走り回る」という複合動詞においては、<ある地点を中心としたその周囲やある空間領域一帯を移動する>という意味特徴は主に後項要素である「回る」によって動機づけられるものである、と考えられる。)

そして、グループ に属する個々の複合動詞において、前項要素(「駆ける」や「走る」など)は、「移動の様態」の一種である「位置の変化に伴う移動主体の動き」¹⁷に関する意味特徴を主に動機づけていると考えられる。

なお、グループ に属する全ての複合動詞において、前項要素が「様態」の一種である「位置の変化に伴う移動主体の動き」に関する意味特徴を動機づけているが、構成要素によっては、「様態」に関するこれ以外の側面も同時に動機づけていると考えられる。例えば「駆け上がる」の「駆け」や「走り回る」の「走り」であれば、「動き」(足を動かして身体を前進させるという動き)に加えて、「速度」の側面(<「歩く」などに比べての、)高い速度>という意味特徴)も動機づけている。(これに対し、「泳ぎ回る」の「泳ぎ」や「浮き上がる」の「浮き」などには、「速度」に関する意味特徴への強い動機づけは認められない。)

¹⁷ なお、本稿でグループ として分類している複合動詞は、影山(1993)や由本(2005)など、前節でみたように多くの先行研究において「様態」タイプ(前項要素が後項要素の様態を表すタイプ)であると規定されてきたが、前述の松本(1997)の指摘のように、「様態」には複数の側面があるので、単に「様態」という術語で括るのではなく、その一種である「移動に伴う(移動主体の)動き」に限定する必要があると考えており、この点を構文的意味の意味記述に反映させた。

3.4.2 構文的意味

次に、(9)にグループ の主な例を提示する。

- (9) 売り歩く・教え歩く・持ち歩く・連れ歩く・飲み歩く・買い回る・
探し回る・呼び回る・歌い回る・持ち帰る・連れ帰る・持ち去る・
連れ去る・持ち寄る・運び降りる・運び上がる

このうち、例えば「売り歩く」は(10)のような文において用いられる。

- (10) a. 扇子が売れなくなると、私は一つ一銭のアンパンを売り歩くようになった。(『放浪記』)
- b. 田圃仕事や炭焼きのひまをみて、洗い籠や目籠の類をつくるか、竹製の家具をつくって近村へ売り歩くのが精一杯であってみれば、町へ出かけてまで竹細工の注文をきいて精を出す者はなかったのだった。
(『雁の寺・越前竹人形』)
- c. その昔、祇園界隈を高級スーツに身を包み、高級外車でパンを売り歩く男がいた。そして今、この男性が起こしたパンの製造・販売会社は、全国 21 都道府県に 480 の販売拠点を持つまでに業容を拡大した。
(http://www.mtc.pref.kyoto.lg.jp/ce_press/no942/freshrep.htm)

(10)に挙げた例を踏まえ、「売り歩く」の中心義は、＜移動主体（人）が、他者（個人もしくは集団）に対してある品物を渡して代金を受け取るという行為を継続しながら、徒歩や乗り物で各所を移動する＞と記述できる。

なお、「売り歩く」の中心義の形成においては、後項要素である「歩く」は、その中心義でなく拡張された意味が貢献していると考えられる。「歩く」の中心義は、「彼は毎日、あぜ道を歩いて学校へ行っている。」のような文において用いられ、概略、＜移動主体（人やその他の動物）が足で地面を一步ずつ踏みしめて進行する＞と記述できる。（この意味が、「歩く」という語から最も典型的に想起しやすい意味であるといえ

る。)そして、「昨年、金沢の名所を歩いた。」「兄は今、世界の各地を歩いている。」のような文において用いられる「歩く」の意味は概略、＜移動主体（人）が徒歩や乗り物で各所を移動する＞と記述できる。「歩く」の中心義は乗り物を使わない、足で地面を踏みしめることによる進行を意味しているのに対し、後者の意味は、その手段を問わない（広範囲の）移動を意味していることから、この意味は中心義から（種から類への）シネクドキーによって拡張した意味であると位置づけることができる。そして、「売り歩く」という複合動詞の意味形成において、この「歩く」の拡張した意味が貢献していると考えられる。

次に、「持ち帰る」は(11)のような文において用いられる。

- (11) a. それに二、三日も経てば結局焼いてお骨にして、我々が持ち帰るのはその骨片だけよ。（『花埋み』）
- b. 自宅にまで彼は生きたやつめうなぎをどっさり持ち帰ってきて、桃子の住むその家の中で解剖したりするのであった。（『榆家の人びと』）
- c. ゴミはその場に放置せず、各自家に持ち帰るようにしてください。

(11)に挙げた例を踏まえ、「持ち帰る」の中心義は、＜移動主体（主に人）が、何らかの対象物を、ある時点におけるその物の形状や状態を保ったまま手に取って、もしくは身に付けて、その時点で移動主体が存在している空間領域から、本来移動主体が存在すべきである本拠地としての空間領域へ移動する＞¹⁸と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為 v_1 を、反復的もしくは（長期）継続的に伴い、ある移動 v_2 を実現する >

¹⁸ この意味記述において、柴田編(1979)の「カエル」の意味記述を一部参考になっている。

なお、構文的意味 を抽出できるグループ に属する複合動詞は、多くの先行研究¹⁹においてグループ に属する複合動詞と一括して、前項要素が後項要素の様態を表すタイプなどとして扱われている。しかし、両者は以下に提示するような、意味的に異なる点を主に3つ見出せるため、確立した（連続的ではあるけれども）異なる2つの構文的意味として区分することが可能であると考えられる。

まず、構文的意味 は、際立ちの高い参与体を通常1つ（ガ格名詞（句）によって言語化される移動主体）要求するのに対し、構文的意味 は際立ちの高い参与体を通常2つ（ガ格名詞（句）によって言語化される移動主体と、ヲ格名詞（句）によって言語化される対象）要求する、という点である。（例えば(10a)においては、「売り歩く」という複合動詞のヲ格名詞として「アンパン」が表われており、(11b)においては「持ち帰る」という複合動詞のヲ格名詞句として「生きたやつめうなぎ」が表われている。）

従って、構文的意味 においては、後項要素は本来、ガ格名詞句のみを必要とする移動動詞であるが、前項要素の影響で、構文的意味レベルでは他動性（ここでは、＜何らかの対象への働きかけ＞を伴う移動であるという性質）が高まっている。このことに関連して、本研究におけるグループ に属する複合動詞に対して、松本(1997: 145-178)では、本研究におけるグループ に属するタイプの複合動詞と共に「複合移動動詞」として分類しているものの、グループ に属するタイプの複合動詞は、「使役移動動詞ではないが、移動物が物体を持ったまま移動することを表すため、継続使役の使役移動動詞と実質的には同じ意味を表すことになる」と位置づけている。（本研究でも、松本のこの解釈を支持する。）

2つ目に、構文的意味 におけるV1は移動主体の（移動の様態としての）＜動き＞であるのに対し、構文的意味 におけるV2は移動主体による＜何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為＞である。

3つ目に、構文的意味 に比べて、構文的意味 は、ある事態が成立するのに必要とする時間が相対的に長い。（構文的意味 では、構文レベルである行為に関する＜反復的もしくは長期継続的＞であるという意味特徴が担われているが、構文的意味 においてはこのような行為に関する何らかの時間的制約は認められない。）

¹⁹ 影山(1993)、松本(1998)、何(2001)、伊藤・杉岡(2002)、由本(2005)などである。

3.4.3 構文的意味

次に、(12)にグループ の主な例を提示する。

- (12) 焼け落ちる・抜け落ちる・崩れ落ちる・溢れ落ちる・流れ着く・行き着く・
辿り着く・飛び越える・傾き倒れる・這い出る・転がり出る・飛び出る・
流れ出る・消え去る・走り去る・飛び起きる・跳ね起きる・走り過ぎる

このうち、例えば「焼け落ちる」は(13)のような文において用いられる。

- (13) a. やがて楼門は焼け落ち、百五十余人の肉を焼く異臭があたりにただよ
い、この村から半里さきの光秀の陣中にまで漂った。(『国盗り物語』)
b. ドブ川に焼け落ちた材木は、川の中でなお燃えていた。(『路傍の石』)
c. 火災で自宅の2階が焼け落ちた。

(13)に挙げた例を踏まえ、「焼け落ちる」の中心義は、＜移動主体（主に建造物等の物体）が、強い光や熱が当てられて発火し、燃えて灰へと変化するという状態変化を伴い、かつその状態変化の結果として、上方の空間領域から下方の空間領域（到達点）へ加速度的に移動する＞と記述できる。

また、「飛び越える」は(14)のような文において用いられる。

- (14) a. 彼女はフランネルの単衣を着て、素足にスリッパを突っかけて、とんとん床を蹈みながら習ってきた唄を歌ったり、私を相手に眼隠しだの鬼ごっこをして遊んだり、そんな時にはアトリエ中をぐるぐると走り廻ってテーブルの上を飛び越えたり、ソファの下にもぐり込んだり、椅子を引っ繰り覆したり、まだ足らないで梯子段を駆け上っては、例の棧敷のような屋根裏の廊下を、鼠の如くチョコチョコと往ったり来たりするのでした。(『痴人の愛』)

- b. 1歳未満の子イノシシでも、田畑を囲うのに使われているトタン板の高さ（65センチ）を飛び越えることができます。

（<http://www.city.tsuyama.lg.jp/index.cfm/24,5132,127,html>）

- c. 障害走で、太郎はいくつものハードルを軽々と飛び越えた。

(14)に挙げた例文を踏まえ、「飛び越える」の中心義は、＜移動主体（人やその他の生物）が、ある地点から勢いをつけて離れて空中へ身を投げ出すという動きを伴い、かつその動きの結果として、ある空間領域（主に物体）の上方を過ぎて行く＞と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <移動主体が、ある行為もしくは状態変化 v_1 を伴い、かつその行為もしくは状態変化 v_1 の結果として、ある移動 v_2 を実現する >

構文的意味 は、構文的意味 と同様、概念化される事態において際立ちの高い参与体が通常1つ（ガ格名詞句によって言語化される移動主体）の移動であり、この点において構文的意味 と構文的意味 とは近接的であるといえる。

但し、構文的意味 に比べ、構文的意味 は、 V_1 と V_2 の同一時間軸上の重なりがやや減少している。すなわち、構文的意味 に比べ、構文的意味 では、 V_1 が V_2 に時間的にやや先行していると捉えられる。また、構文的意味 に比べ、構文的意味 は、移動における過程よりも結果がより焦点化されている。

なお、構文的意味 を抽出できるグループ に属する複合動詞は、影山(1993)、伊藤・杉岡(2002)、由本(2005)などにおいては、後述するグループ に属する複合動詞と一括して、「原因」タイプ（前項要素が後項要素の原因を表すタイプ）であると分類されている。しかし、後述するように、グループ から抽出できる構文的意味 においては V_1 （行為もしくは状態変化）と V_2 （状態変化）との間に因果関係（ V_1 の結果 V_2 が生じる、という関係）をより強く認識できるのに対し、構文的意味 においては V_1 （行為もしくは状態変化）を（様態として）伴って V_2 （状態変化）が実現するので

もあり、かつ、V1の結果としてV2が実現するのでもある、という解釈が可能である。
 (この点に関して、松本(1997: 149-150)も、本研究におけるグループ に属する複合動詞の一部である「崩れ落ちる」と「焼け落ちる」を取り上げ、前項要素は後項要素の原因でもあり、様態でもある、という点を指摘している。)

3.4.4 構文的意味

次に、(15)にグループ の主な例を提示する。

- (15) 歩き疲れる・遊び疲れる・走り疲れる・立ち疲れる・遊びくたびれる・
 走りくたびれる・染み付く・凍り付く・焼け付く・焦げ付く・絡み付く・
 焼け死ぬ・溺れ死ぬ・折れ曲がる・泣き濡れる・降り積もる・砕け散る・
 煮えこぼれる・着膨れる・飲み潰れる

このうち、例えば「歩き疲れる」は(16)のような文において用いられる。

- (16) a. しかしもうさんざん彼女を引っ張りまわした挙句だったし、私もかなり歩き疲れていたので、この上廻り道をする気にはなれずに、私は心ならずもその別荘の前を通り抜けて行くことにした。(『風立ちぬ・美しい村』)
- b. 指揮者の命令を待っているあいだは歩き疲れた埃りまみれの行商人としか見えなかった彼らがひとたび運動をはじめると兇暴な能率が筋肉を占めた。(『パニック・裸の王様』)
- c. 1階では美しい器を展示販売。これらはオープン展示で、じかに手にとって選べます。歩き疲れたら2階のリフレッシュルームでしばしの休憩を。掘り出し物のやきものを、という方はショッピングスポット「瓷器倉(じきぐら)」へ。

(http://www.asobo-saga.jp/modules/auth/index.php/search_details.php?n=8)

(16)に挙げた例文を踏まえ、「歩き疲れる」の中心義は、＜変化主体（人）が、足で地面を一步ずつ踏みしめて進行することを継続した結果として、足をはじめとした身体力が弱ったという感覚を抱く＞²⁰と記述できる。

また、「焼け死ぬ」は(17)のような文において用いられる。

- (17) a. それでうまく行っているうちはいいが、一つふみはずすと戦争また戦争とあれくるって、ついには一瞬のうちに何十万という人間が焼け死ぬようなことになりはしないか、とご心配なさったのだ。(『ビルマの豎琴』)
- b. 車に乗っているところをうしろからトラックにぶっつけられて、ガソリンに引火して、みんな焼け死んだのよ(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- c. 約3時間後に鎮火したが、鉄骨平屋建ての豚舎3棟、計約3900平方メートルが全焼、中にいた子豚約1万700匹が焼け死んだ。
(<http://mainichi.jp/area/tochigi/news/20101104ddlk09040106000c.html>)

(17)に挙げた例文を踏まえ、「焼け死ぬ」の中心義は、＜変化主体（人やその他の生物）が、強い光や熱が当てられて発火し、燃えて灰へと変化するという状態変化の結果として、命がなくなる＞と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

²⁰ この意味記述において、柴田編(1976)の「ツカレル」の意味記述を一部参考になっている。

構文的意味 : <変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する>

構文的意味 も、構文的意味 と同様、概念化される事態において際立ちの高い参与体が通常1つ（構文的意味 においては、この参与体は、ガ格名詞（句）によって言語化される変化主体）である。

しかし、前述の通り、構文的意味 は構文的意味 に比べて、V1 が V2 に時間的に先行する程度が高まっている。そしてこの点に加え、構文的意味 では構文的意味 に比べて、明確に V1 と V2 との間の因果関係を認識することができる。

なお、本稿第2章でも述べたように、ある構文に関して、その構文における複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークはプロトタイプ・カテゴリーであり、同時に、個々の構文的意味に関してもプロトタイプ・カテゴリーであるといえる。

構文的意味 を抽出できる複合動詞（グループ ）の典型的事例は、「歩き疲れる」「焼け死ぬ」のように、前項要素が（働きかけの対象としてのヲ格名詞（句）を必要とせず、ガ格名詞（句）のみを必要とする）自動詞（「歩く」、「焼ける」など）であり、後項要素も自動詞（「疲れる」、「死ぬ」など）であるタイプである²¹。

そして、周辺的事例²²は、「着膨れる」、「飲み潰れる」、「聞き惚れる」、「抱き付く」のように、前項要素が（働きかけの対象としてのヲ格名詞（句）を必要とする）他動詞であり、後項要素が自動詞であるというタイプである。

²¹ なお、本研究においては、ある事態における際立ちの高い参与体が通常2つである動詞、すなわち、行為主体を表すガ格名詞（句）と行為主体による何らかの働きかけの対象を表すヲ格名詞（句）をとる動詞を他動詞と呼ぶ。また、ある事態における際立ちの高い参与体が通常1つである動詞、すなわち、（位置変化や状態変化など）何らかの変化の主体、あるいは何らかの経験の主体を表すガ格名詞（句）をとる動詞を自動詞と呼ぶ。但し本研究では、認知言語学において広く共有されている、最もプロトタイプの他動詞から最もプロトタイプの自動詞までを連続的に位置づけるという考え方を前提としており、他動詞と自動詞とを明確に二分するという考えは採らない。

²² 本研究において、構文的意味 という1つの下位カテゴリーにおける周辺的事例であると考えている事例に関して、石井(2007a)では「再帰的過程結果構造」に属する複合動詞であるとして、本研究において構文的意味 というカテゴリーの典型的事例であると考えている事例が属する「自動的過程結果構造」とは異なるものとして区別している。しかし、典型的事例と周辺的事例とは複合動詞全体が表す意味が極めて近接的であり、本研究では両者を、（典型性に程度差はありつつも）同一カテゴリーに属する複合動詞であると位置づける。

典型的事例に関しては、いずれも、V1 が変化主体による行為もしくは状態変化であり、V2 がそれによって実現される（変化主体の）状態変化である。これに対して、周辺の事例に関しては、V1 は変化主体による何らかの対象（無生物・有生物）への働きかけとしての行為であり、V2 がその結果として生じる（変化主体の）変化である、という点で、典型的事例の意味構造とは異なっている。但し、周辺の事例と典型的事例とは、複合動詞全体としてはあくまでもある変化主体の変化を表しており、かつ V1 と V2 との間に因果関係を認識することができる、という点で共通している。

なお、周辺の事例においても、典型的事例同様、個々の複合動詞が文内で使用される際には、基本的にヲ格名詞（句）は必要としない²³。例えば、「着膨れる」に関して、前項要素「着る」は単独で用いられる際には、「彼女は赤い服を着ている。」における「赤い服」のように）ヲ格名詞（句）を必要とするのに対し、「着膨れる」という複合動詞は、(18)のように、ヲ格名詞（句）は基本的に文内に表われない。

- (18) a. VやUネックのあき具合は、その他カジュアル・ブランドよりも、より広く、大胆です。また、生地は薄手のものが多いので、着ぶくれることなく、いか様にも重ね着を楽しめます。
(<http://abercrombie101.uijin.com/love4anf.html>)
- b. 窓の外は、さだめし一面の稲穂であろう、農家の庭にはさだめし綿入れに着ぶくれた子供が、干し柿かじっているのだろう、淀川のすすき風になびき、秋の夜空に雁がとぶ、宮君は今も御殿でそれみてはるのやろか。（『アメリカひじき・火垂るの墓』）

但し、「聞き惚れる」や「抱き付く」のように、後項要素が二格名詞（句）を必要とする自動詞である場合、これらの複合動詞が文内で用いられる際に、変化主体による働きかけの対象となる参与体が二格名詞句として表われる。例えば、「聞き惚れる」とい

²³ この点に関連して、グループ に属する複合動詞（「売り歩く」、「持ち帰る」など）も、グループ に属する複合動詞の周辺の事例（「着膨れる」「飲み潰れる」など）と同様に、[他動詞 + 自動詞]という構造を有している。しかし、グループ に属する複合動詞の周辺の事例に関しては文内に（主にヲ格名詞（句）である）主体による行為の対象となる参与体が表われないが、グループ に属する複合動詞に関しては、前述の通り、文内に、主体による行為の対象となる参与体が表われる、という違いがある。

う複合動詞は、(19)の文のように、(ヲ格名詞(句)は表われないが)「この詞」、「楽の音」のような二格名詞(句)が表われる。

- (19) a. 正道はうっとりとなって、この詞に聞き惚れた。(『山椒太夫・高瀬舟』)
 b. 心なき田舎人たちまで、酔ったように楽の音に聞き惚れた。(『新源氏物語』)

3.4.5 構文的意味

次に、(20)にグループ の主な例を提示する。

- (20) 突き刺さる・吹き飛ばす・打ち上がる・持ち上がる・吸い上がる・
 吹き上がる・釣り下がる・折り曲がる・積み重なる・覆いかぶさる・
 引きちぎれる・張り付く・焼き付く・吸い付く・巻き付く・踏み固まる・
 ちぎり取れる・擦り切れる・擦りむける・突き出る

このうち、例えば「突き刺さる」は(21)のような文において用いられる。

- (21) a. その骨はいかにも所を得て突き刺さったものらしく、みんなが背を叩いたり御飯を大量に呑みこませたり呪いをかけてみたりしても効かなかった。(『榆家の人びと』)
 b. 的に矢の突き刺さるぷすっという音。(『草の花』)
 c. 兵隊の銃剣は、目の前の村人の胸に突き刺さった。

(21)に挙げた例文を踏まえ、「突き刺さる」の中心義は、＜変化主体（主に棒状の物体）が、他者や他の事物によって意図的もしくは非意図的にまっすぐ速く動かされ、その先端がある抵抗感のある物理的領域の一点に接触し、その一点に衝撃を与える結

果として、主体の先端の一部が物理的領域の内部に位置するようになる >²⁴と記述できる。

また、「打ち上がる」は(22)のような文において用いられる。

(22) a. 観測ロケット S-310-36 号機打ち上がる

(<http://www.isas.jaxa.jp/ISASnews/No.299/isas-s-310-36.html>)

b. 打上げ方を組み合わせ、リズムとテンポを生むことが観客を惹きつける大事な要素といえます。花火はどのように打ち上がるのでしょうか？ (<http://japan-fireworks.com/basics/Uchiage.html>)

c. 中国の国営テレビによると、北京で1月30日、走行中のトラックに積まれた数千箱の花火が引火し、1時間以上にわたって花火が打ち上がった。

(<http://www.news24.jp/articles/2010/02/01/10152671.html>)

(22)に挙げた例文を踏まえ、「打ち上がる」の中心義は、<移動主体（主に無生物）が、他者のコントロールによって何らかの力を加えられ、勢いよく空中へ向かって放出される結果として、起点である下方の空間領域から上方の空間領域へ移動する>と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{v1}の結果として、ある変化²⁵_{v2}を実現する>

グループ に属する複合動詞は、3.2.2 節でも述べたように、多くの先行研究において、他動性調和の原則に違反しており（影山(1993)など）、もしくは主語一致の原則に

²⁴ この意味記述において、柴田編(1979)の「ツク」の意味記述を一部参考にしている。

²⁵ なお、<ある変化>に関しては、後項要素によって、位置変化である場合もあり、状態変化である場合もある。

違反しており（松本(1998)、由本(2005)など）、これらの原則に合う対応する他動詞形から派生して生じた（すなわち、複合によって生じた事例ではない）という位置づけがなされている。

しかし、これらの複合動詞の意味形成の動機づけを単に対応する他動詞形からの派生という過程としてのみ考えるのではなく、これらが現代日本語においてある程度慣習化している事実を考慮すると、そして V1 と V2 の意味的貢献を直観的にも認めることができるということを考慮すると、これらの複合動詞にも構文的意味を認め、他のタイプの複合動詞と共に包括的に位置づけることが可能であろうと考えられる。

但し、グループ に属する複合動詞は、語によっては、母語話者ごとにその容認度に程度差がみられることも事実であり、他の構文的意味と比べると、次節で検討する構文的多義ネットワークにおける節点としての確立度はやや低いとは考えられる。

3.4.6 構文的意味

本節では以下、個々の複合動詞の意味や構文的意味の記述において「使役」という術語を使うことになる。本研究において「使役」については西村(1998: 120-124)の考え方に従う。西村は、例えば「私はドアを開けた」、「花子は太郎を殺した」のような文において用いられている「開ける」、「殺す」といった動詞を使役動詞と呼んでいる。「私はドアを開けた」という例の場合、この事態（事態 X）が生じていれば「ドアが開いた」という文で表される事態（事態 Y）も必ず生じており、また「花子は太郎を殺した」という例の場合、この事態（事態 X）が生じていれば「太郎が死んだ」という文で表される事態（事態 Y）も必ず生じている。すなわち、事態 X と事態 Y との間に、X が原因となって Y が生じるという因果関係が成立している。これらの例を含め、広く、因果関係を表す性質を西村は「使役」と呼んでいる。

また、「ドアを押す」という行為（X）の結果、そのドアが開く（Y）ということが起これば、その行為は「ドアを開ける」という行為（Z）でもある、とし、このように、X を行うことが Z を遂行することに（も）なるという関係にある X と Z を西村はそれぞれ、低次の行為あるいは基礎行為（X）及び、高次の行為あるいは使役行為（Z）と

呼んでいる。以上の考え方を踏まえると、以下検討していくグループの個々の複合動詞においては、V1が基礎行為、V2が使役行為であると言える。

さて、(23)にグループの主な例を提示する。

- (23) 打ち上げる・蹴り上げる・引き下ろす・振り落とす・叩き落とす・
投げ返す・取り戻す・呼び戻す・運び出す・盗み出す・投げ入れる・
引き離す・殴り倒す・積み重ねる・叩き壊す・掃き集める・縫い付ける・
焼き付ける・奪い取る・押し開ける・殴り殺す・踏み潰す・踏み荒らす・
振り混ぜる・突き刺す

このうち、例えば「打ち上げる」は(24)のような文において用いられる。

- (24) a. 日本においても人工衛星打ち上げを望む声が自然発生的に湧き上が
って来た。スプートニクが打ち上げられた直後から、日本もいつかは
人工衛星を打ち上げることになるだろうとの漠然とした期待が、一般
の国民の間にあった。
(http://www.space-library.com/50Years_Of_Japanese_Aerospace_Industries_Pt.2.pdf)
- b. 「第12回戸沢氏祭花火大会」で皆さんの記念花火を打ち上げてみま
せんか？お孫さんの誕生や結婚祝い、成人祝いなどの記念に、また大
切な人へ伝えたい気持ちをメッセージと共に真夏の夜空に打ち上げ
る大輪の花に想いを託して伝えてみませんか？
(<http://www.city.semboku.akita.jp/event/event.php?id=88>)
- c. アメリカのテキサス州ヒューストンから打ち上げられた一隻の宇宙
船が、月面に着陸しようとしていた。(『ブンとフン』)

(24)に挙げた例文を踏まえ、「打ち上げる」の中心義は、＜使役行為者が、対象物に何らかの力を加え、勢いよく空中へ向かって放出する結果として、対象物を起点である下方の空間領域から上方の空間領域へ移動させる＞と記述できる。

また、「切り倒す」は(25)のような文において用いられる。

- (25) a. そう言うあいだにも、彼のあたまの中では、「あの山の面積はいくらあるかな。」「あその木を切り倒したら……」などと、ソロバンをはじくことで忙しかった。(『路傍の石』)
- b. S橋の手前で、足指の冷たさに我慢できなくなった子供たち三人が落伍して、彼等は路傍に切り倒してある杉丸太の雪を払って、その上に乗って、他の連中が帰って来るのを待つことになった。(『あすなる物語』)
- c. 立ち木を安全に切り倒すには、切り倒す技術とともに、木が立っている場所、木の傾き、枝のつき方、切り倒した後の木の動き、自分の逃げ場所などを予測・観察する力が必要です。
- (<http://www11.plala.or.jp/woodb/bassai.htm>)

(25)に挙げた例文を踏まえ、「切り倒す」の中心義は、＜使役行為者が、本来は結合している対象物（主に木）を、刃物等を用いて断面が生じるように傷つけていく結果として、本来は平面上に垂直に立っている対象物を、垂直状態を保てなくさせて横たわらせる＞と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <使役行為者が、ある行為_{V1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{V2}を実現させる>

構文的意味 においては、構文的意味 、 、 と異なり、概念化される事態において際立ちの高い参与体が通常2つ（ガ格名詞（句）などによって言語化される使役行為者と、ヲ格名詞（句）などによって言語化される行為の対象）存在している。

そして、使役行為者の行為（働きかけ）が焦点化されたV1と、それによる対象への使役行為が焦点化されたV2との間に、（V2を実現させるためにV1を行っている、と

いう)両者の強い因果関係を見出すことができる。

なお、際立ちの高い参与体が通常1つであるような構文的意味 と構文的意味 においても、前述の通り、V1 と V2 との間に因果関係を見出すことができる。しかし、これらは V1 が V2 の実現を意図して行われる行為であるとは限らないのに対し、構文的意味 においては V1 は基本的に V2 の実現を意図して行われる行為であり、次節でも検討するように構文的意味 は構文的意味 及び に比べて因果関係の認識が強化されていると考えることができる。

なお、構文的意味 という1つの下位カテゴリーに関しても、様々な観点から、そのプロトタイプ性に程度差がみられる²⁶。

まず、グループ のうち、典型的事例であるといえるのは「打ち上げる」、「切り落とす」のように後項要素が使役移動(使役的位置変化)であるタイプである。そして、やや周辺的であるのは「殴り殺す」、「踏み荒らす」のように後項要素が使役の状態変化であるタイプである。この程度差の動機づけとしては、Lakoff(1990: 63)が提示している、以下の空間化メタファーの存在が考えられる。

STATES ARE LOCATIONS (状態は位置である)

CHANGE OF STATE IS CHANGE OF LOCATION (状態変化は位置変化である)

なお、ここでの典型性の程度差は、後項要素の性質に由来するものであると言える。

また、グループ における大半の事例は、前述の通り、V1 が V2 の実現を意図して行われる行為であって、V1 を手段として V2 を実現していると言える。これに対し、「食い散らかす」、「脱ぎ散らかす」、「産み育てる」、「悔い改める」、「使い捨てる」などは、V1 と V2 との間に因果関係(及び時間的な継起関係)を認めることはできるものの、V1 は V2 の実現を意図して、そのための手段として行われる行為ではない、という点で、グループ においては周辺的な事例であるといえる。

その他、本章の注7でも既に提示した通り、「取り去る」、「抜き去る」、「除き去る」、

²⁶ なお、前述の通り、影山(1993)、伊藤・杉岡(2002)、由本(2005)など、多くの先行研究において、本研究におけるグループ に属する複合動詞は、「手段」という術語のみを用いて(前項要素が後項要素の手段を表す、として)一括されている。

「消し去る」などは、松本(2009a: 186-187)でも指摘されているように、後項要素「去る」は単独で用いられる際には(働きかけの対象を表すヲ格名詞(句)を必要としない)移動動詞であるが、複合動詞で用いられる場合にのみ後項要素「去る」が使役移動動詞として機能している。すなわち、松本が指摘しているように、(「彼は名古屋を去った。」のように)移動動詞「去る」が単独で用いられる場合には<その場を離れる>という意味を有し、「流れ去る」、「走り去る」、「持ち去る」などの複合動詞においても、後項要素「去る」は移動動詞としてその意味づけに貢献している。一方、「取り去る」、「抜き去る」、「除き去る」、「消し去る」などの複合動詞において用いられる際には、後項要素「去る」は使役移動動詞としての、<(動かしにくいものを、何かの中から)除去する>という意味特徴を動機づけている。(これに対し、グループ に属する複合動詞の大半は、後項要素が、単独での使用においても使役行為を表す動詞である。)この点から、これらの例に関してもグループ における周辺的な事例であると位置づけることができる。

3.4.7 構文的意味

次に、(26)にグループ の主な例を提示する。

- (26) 光り輝く・耐え忍ぶ・飛び跳ねる・嘆き悲しむ・慣れ親しむ・遊び戯れる・
恋い慕う・忌み嫌う・恐れおののく・好き好む・富み栄える・
曲がりくねる・待ち望む・探し求める・泣き叫ぶ・飢え乾く・疲れ傷つく・
腫れ膨らむ・すすり泣く・罵り騒ぐ・呼び叫ぶ・飲み明かす・遊び暮らす

このうち、例えば「光り輝く」は(27)のような文において用いられる。

- (27) a. 銀かと思うほどに光り輝やく鋼鉄製の甲冑が、城壁上にずらりと居並ぶ様は壮観で、これらのミラノ製とひと目でわかる見事な甲冑をつけ

ているのは、ヴェネツィアやジェノヴァの男よりも、ビザンチンの騎士たちのほうが多かった。(『コンスタンティノーブルの陥落』)

- b. 硫黄岳のいただきはバラ色の冠となって一段と光り輝き、やがてその光は大地にしみこむように消えていった。(『孤高の人』)
- c. 青緑のケンタッキー芝を敷きつめた中庭の、中央にある噴水から飛び散る水滴が高原の夏の強烈な太陽にキラキラと光り輝いていた。(『若き数学者のアメリカ』)

(27)に挙げた例文を踏まえ、「光り輝く」の中心義は、＜何らかの物体（天体、人工の発光体、宝石や金属などの反射体、液体など）が、それ自体の発光か、もしくは他の物体の発光を受けて反射することにより、周囲から目立つほど、強く美しい明るさを有する物体として人間の視界に入る＞²⁷と記述できる。

また、「慣れ親しむ」は(28)のような文において用いられる。

- (28) a. 女であるための、さまざまな苦汁を味わいながら、いつか、吟子は好寿院での生活に慣れ親しんできていた。(『花埋み』)
- b. ずいぶんと背ののびたその十歳の男の子、留学中ずっと考えていたおもかげとはかなり違って成長した峻一は、半年経った今、未だに父親に慣れ親しまないのだった。(『榆家の人びと』)
- c. ネイティブのアクセントやイントネーションに慣れ親しむことが、外国語上達の秘訣である。

(28)に挙げた例文を踏まえ、「慣れ親しむ」の中心義は、＜人間が、何らかの行為、経験、環境などが習慣化し、それらに対して親近感や愛着を抱くようになる＞と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味

²⁷ この意味記述において、柴田編(1979)の「ヒカル」及び「カガヤク」の意味記述を一部参考に行っている。

を以下のように記述できる²⁸。

構文的意味 : <主体が、ほぼ同時に、ある事態_{V1} 及び別の事態_{V2} を実現する >

さて、グループ に属する複合動詞は、影山(1993)、由本(2005)をはじめ、多くの先行研究において「並列」タイプであると分類されているが、どのような点で「並列」的なのかについて、詳細に検討がなされているとは言い難い。

グループ に属する複合動詞は、他のタイプと異なり、V1 と V2 とを（時間的な系列関係などといった観点に基づいて）意味構造上明確に区分することができない。但し、例えば石井(2007a : 113)ではこれらのタイプに対して「現実には一つの運動でありながら、前項の表す運動とも後項の表す運動とも解釈できる」と指摘されているが、V1 と V2 が並列的であっていずれにも解釈できるというよりは、ある1つの事態の概念化に際し、（時間的共起性を有するという意味で）並列的でありながらも異なる意味特徴を有する V1 と V2 とが相互に連携していると考えられる。

例えば「光り輝く」に関しては、柴田編(1979)を参考にして考えると、「光り輝く」一語の意味形成において V1 は主に<光の発生>という側面に貢献しており、V2 は主に<（強く、持続性があり、多様性を持っていて美しい、などといった）光り方>の側面に貢献していると考えられる。

また、「耐え忍ぶ」に関しては、V1 が主に<何らかの肉体的もしくは精神的苦痛を感じるものの、それに屈することのないように努める>といった、苦痛への対処に関する内的な側面に貢献しており、V2 は主に<苦痛を内面に秘め、外部に表出しない>といった、苦痛への対処に関する外的な側面に貢献していると考えられる。

また、「恋い慕う」に関しては、V1 が主に<ある人に対して強い好意を感じる>といった、感情の発生の側面に貢献しており、V2 が主に<ある人に対して、離れがたい、近付きたいと強く思う>といった、ある人への感情的な働きかけ（感情のあり方）の側面に貢献していると考えられる。

このように、V1 と V2 の具体的な意味的關係性（並列の性質）は個々の複合動詞に

²⁸ これ以降、構文的意味記述において<事態>というメタ言語は、<行為主体による（意図的もしくは非意図的）行為>と<変化主体の変化>とを共に含めた術語として用いる。

において異なるが、それら全てに共通するスキーマ的意味として、V1 と V2 とが時間的にほぼ同時に生じるという、時間的な特性を抽出できる。

なお、由本(2005)や石井(2007)において、いわゆる並列タイプの複合動詞においては、前項要素と後項要素とが類義的であると指摘しているが、確かにグループ は典型的には前項要素と後項要素とが類義的であるが、類義的とは言えない周辺的事例も一定数存在する。

例えば、「泣き叫ぶ」に関しては、怒りや悲しみなどの感情の表出行為において、前項要素である「泣き」は概略、＜声を出したり涙を出したりする＞という意味特徴(V1)を動機づけており、「叫ぶ」は概略、＜(主に他者への何らかの主張のために)大声を発する＞という意味特徴(V2)を動機づけている。

また、「飲み明かす」に関しては、前項要素である「飲み」は概略、＜酒類を口から体内に取りこむ＞という意味特徴(V1)を動機づけており、後項要素である「明かす」は概略、＜眠らずに夜を過ごし、そのまま朝を迎える＞という意味特徴(V2)を動機づけている。

これらの周辺的事例においては、前項要素と後項要素とは類義的であるとはいえないが、V1 と V2 とがひとまとまりの事態における異なる側面を表しており、かつ、V1 と V2 とが時間的共起性を有する(V1 と V2 とが同時進行する)という点において、典型的的事例と共通しているといえる。

3.4.8 構文的意味

次に、(29)にグループ の主な例を提示する。

- (29) 晴れ渡る・考え込む・震え上がる・褒め上げる・聞き流す・思い詰める・
勇み立つ・責め立てる・思い募る・怒鳴り散らす・静まり返る・踊り狂う・
咲き誇る・咲き乱れる・書き殴る・言い繕う・言い放つ・見渡す・
吹き荒れる・読み漁る・聞きかじる・話し倒す

このうち、例えば「晴れ渡る」は(30)のような文において用いられる。

- (30) a. そしてまたある時、雲一つなく晴れ渡った冬空に、アドバルーンが歳末大売り出しをつげ、風に乗ってはるかはなれた枚方の町の、チンドン屋のクラリネット、悲しげに吹きならすはラ・クンパルシータ、パパパッパッ、パーラーラー、ツァツァツァツァツァッ、ツァラーラー。 (『アメリカひじき・火垂るの墓』)
- b. その日は一月というのに、四月のような暖かさで、朝から空が晴れ渡っていた。(『塩狩峠』)
- c. このごろの季節としては奇蹟のように晴れ渡った空を見つめていると、加藤は、その青空のどこかに吹雪の唸り声を聞いたような気がした。(『孤高の人』)

(30)に挙げた例文を踏まえ、「晴れ渡る」の中心義は、＜空一面、雲や霧が全くなく、太陽が出ていて真っ青な状態である＞と記述できる。

また、「咲き乱れる」は(31)のような文において用いられる。

- (31) a. 見て行くにしたいが、下絵の方は、四季とりどりの花が咲き乱れ、歌の文句とは必ずしも一致していない。(『モーツァルト・無常という事』)
- b. 利朗の車でホテルへ帰る途中、道路の西側につつじが咲き乱れているのが眼に入った。(『一瞬の夏』)
- c. 庭先の藤の花が面白く咲き乱れ、例年より色濃く美しいと人々は賞美して、このまま見過ごすのも残念など、管絃の遊びを催すことになった。(『新源氏物語』)

(31)に挙げた例文を踏まえ、「咲き乱れる」の中心義は、＜野山や庭などにおいて、辺り一面に、蕾が開いた花が非常に多数、存在する＞と記述できる。

この他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味

を以下のように記述できる。

構文的意味 : <主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する>

ここまでみてきた構文的意味 から構文的意味 まではいずれも、V2 は具体性の高い事態であるのに対し、意味 においては、(後項要素が単独で用いられる際には具体性の高い事態であるが) V2 は具体性が相対的に低い(抽象度が相対的に高い)事態(変化)であるといえる。

例えば、「晴れ渡る」について考えてみる。後項要素「渡る」は、単独用法においては、「船が海を渡る。」「彼は橋を渡った。」のように用いられ、移動主体としての「船」や「彼」は、実際にある一定の広さを有する空間領域を移動している。しかし、(30)に挙げた例文のようなケースにおいては、移動主体は存在しない。この場合、空一面に晴れているという状態を意味しており、認知主体は「晴れている」という状態が空一面に広がっていることを視覚的に捉えている。すなわち、「晴れ渡る」という複合動詞の意味形成において、後項要素である「渡る」は、実際の移動ではなく、視点の移動という側面を動機づけていると言える。

同様に、「咲き乱れる」についても、後項要素「乱れる」は、単独用法(の中の、中心義としての用法)としては、「髪が乱れる。」「列が乱れた。」のように用いられ、この場合、ある変化主体(「髪」や「列」などの物理的物体・物理的領域)は、何らかの理由によって、本来まとまり、整っている状態であるはずなのに、その状態が崩れることとなる。そして、まとまっているべき物理的物体・物理的領域のまとまりが崩れると、その物体や領域は広がることとなり、それに合わせて視覚によってその物体を捉える範囲も広がる。複合動詞「咲き乱れる」の意味形成においては、後項要素「乱れる」は、この「視点の広がり」という側面を動機づけていると言える。(「咲き乱れる」という複合動詞によって表されるのは、開花している多数の花が辺り一面に存在しているという状況であり、辺り一面に存在しているということは、それだけ、視覚によって捉えるべき領域も広いということに繋がる。)

なお、3.6 節において、構文的意味 を起点とする主体化及び文法化の関与について

検討するが、構文的意味は、これらの変化に伴って具体的な意味内容（叙述内容）が徐々に希薄化していく（そして最終的にはアスペクト要素となる）過程における中間段階に位置づけられる。

3.4.9 構文的意味

次に、(32)にグループの主な例を提示する。なお、以下、グループからグループまでは、他のグループに比べて後項要素の統語的性質（主にアスペクト性）の程度が高く、そのために個々の後項要素に関して、その前項要素となりうる動詞連用形の多様性が増す。従って、グループからグループまでにおいては、多様な前項要素の一例を{ }で括って示すこととする。また、「 - 残す」、「 - 悩む」など、前項要素を「 - 」(スロット)で表し後項要素を具体的に示す「 - 後項要素」という形式は、個々の具体的な複合動詞と[動詞連用形 + 動詞基本形]という構文との中間段階に位置する形式として位置づける。

- (32) {食べ}残す²⁹・{枯れ}残る・{見}誤る・{見}落とす・{見}逃す・{乗り}遅れる・
 {出し}惜しむ・{決め}兼ねる・{食べ}損ねる・{書き}損じる・{聞き}漏らす・
 {読み}間違える・{取り}誤る・{置き}忘れる・{伸び}悩む

このうち、例えば後項要素「残す」を含む複合動詞は(33)のような文において用いられる。

- (33) a. 純子は、珍しくスパゲッティを食べ残したまま、その喫茶店を後にし

²⁹ 複合動詞の後項要素に関して、複数の用法を有する、すなわち、複数の構文的意味の事例として用いられているケースが一定数存在する。例えば「残す」に関して、「言い残す」という複合動詞に関して、「時間が足りずに言い残したことを、メモして彼に渡した。」という文において用いられるような場合（全て言わず、言うべき事項を残してしまうという場合）は構文的意味の事例であり、「店員に伝言を言い残して帰った。」という文において用いられるような場合（あとに残る人に対して言い置くという場合）は構文的意味の事例である。

た。(『女社長に乾杯!』)

- b. そこをゆっくりと通り抜け、出口のところまできた時、ひとこと言い残したことがあるような気がしはじめた。(『一瞬の夏』)
- c. ついに周二は頭を半分刈り残したまま本職の床屋に連れていかれたが、いざ行ってみるとそちらのほうが上手で痛くなかった。(『榆家の人びと』)

(33)に挙げた例文を踏まえ、グループ の事例としての複合動詞「 - 残す」の意味³⁰は、＜行為主体が、本来ならば完遂することが望ましいと考えられる何らかの対象への働きかけとしての行為を中断し、働きかけを完遂できなかった行為の対象(の一部)がそのまま存在している状態になる＞と記述できる。

また、後項要素「損ねる」を含む複合動詞は(34)のような文において用いられる。

- (34) a. 女の悲鳴や老人の哀訴に敗れて牛や穀物を奪いそこねた収税吏が殺された。(『パニック』)
- b. ところで、駄賃をもらいそこねた子供は、どんな表情をしていたっけ？(『砂の女』)
- c. 今日は忙しかったために、昼食を食べ損ねた。

(34)に挙げた例文を踏まえ、グループ の事例としての複合動詞「 - 損ねる」の意味は、＜行為主体が、実現できると考えていたある行為に関して、何らかの理由によってその行為を実現する機会を失う＞と記述できる。

その他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

³⁰ これ以降、「 - 後項要素」という形式が有する意味を記述していく。これは、個々の複合動詞の具体的な意味ということではなく、ある特定の後項要素を有する個々の複合動詞の意味から抽出したスキーマ的な意味である。(従って、複合動詞における後項要素のみの意味を記述するわけではない。)

構文的意味 : <主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある
事態_{V1}を、未遂・不成立に終える_{V2}>

構文的意味 における<主体>は、「- 残す」、「- 誤る」、「- 遅れる」のように行為主体である場合と、「- 残る」、「- 悩む」のように変化主体である場合がある。

また、構文的意味 におけるV2は<未遂・不成立>であることから、構文的意味に比べて、さらに事態実現に関する具体性が低下している。

なお、構文的意味 という1つの下位カテゴリーにおける大半の事例は、「- 誤る」、「- 逃す」、「- 忘れる」のように、主体が実現を望んでいたある事態を何らかの理由で未遂・不成立に終えるという状況を表す。しかし、周辺的事例として、「- 惜しむ」は、主体が何らかの理由から、あえてある事態を実現しないようにしているという状況を表す。

ところで、グループ のうち、「- 落とす」、「- 過ごす」、「- 逃す」の3つは類義的であるといえる。

この点に関連して、國廣編(1982)では「見落とす」「見過ごす」「見逃す」³¹の類義分析を行っている。

國廣編(1982)の記述を踏まえつつ、さらに発展させて考え、以下に前項要素が「見」である場合以外のケースも含めた、「- 落とす」³²、「- 過ごす」³³、「- 逃す」³⁴の意味の共通点と相違点を挙げる³⁵。

まず「- 落とす」、「- 過ごす」、「- 逃す」の共通点としては、いずれも、行為主体によるある対象への「働きかけの欠如」という点である。(ここでの働きかけとは、「見落とす」「見過ごす」「見逃す」などにおいては、見るべき対象を視覚で捉えるとい

³¹ なお、この3つの語形は國廣編(1982)ではカタカナ表記が施されているが、國廣編(1982)における例文を直接引用する場合を除いて、本稿では漢字仮名混じりの表記(「見落とす」「見過ごす」「見逃す」)を用いる。

³² 具体的な事例は、「見落とす」、「読み落とす」、「言い落とす」、「書き落とす」、「聞き落とす」などである。

³³ 具体的な事例は、「見過ごす」、「聞き過ごす」、「遣り過ごす」、「読み過ごす」などである。

³⁴ 具体的な事例は、「見逃す」、「聞き逃す」などである。

³⁵ なお、以下、「見」を前項要素とする複合動詞の例を提示する際には、國廣編(1982)で提示されている例をそのまま引用する。「見」以外を前項要素とする複合動詞の例については、筆者による作例である。

う働きかけであり、「聞き落す」、「聞き過ごす」、「聞き逃す」であれば、聞くべき対象を聴覚で捉えるという働きかけである。）

次に、相違点は複数挙げられる。

1点目は、「- 落とす」は「非意図的行為」についてしか用いられないが、「- 過ごす」と「- 逃す」は「意図的行為」についても用いることができる、という点である。

2点目は、非意図的行為であるケースに関して、「- 落とす」は、行為主体による働きかけの「対象の存在に気がつかない」という意味特徴を有するが、「- 過ごす」は、行為主体による働きかけの「対象が特別の条件に合っていることに気がつかない」という意味特徴を有する、という点である。すなわち、「打者はスクイズのサインをミオトシテいた。」という例においては、行為主体の視野の範囲内にあるものの中で、スクイズのサインの存在に気が付かなかったということを表している。また、「彼は表書きに住所を書き落とした。」という例においても、行為主体が書くべき範囲の中で、住所（を書く領域）の存在に気がつかないままだったということを表している。一方、「警察は目の前を通った手配中の車をミスゴシテしまった。」という例においては、行為主体は目の前の車には気づいているものの、その車が手配中のものであるということ（その条件に合った車であるということ）に気づかなかったということを表している。また、「彼女は、大事な個所を読み過ごしていた。」という例においても、行為主体は「大事な個所」で表現される領域そのものは視覚で捉えていたものの、それが「大事」であるという意識を持って捉えられなかった（「大事な個所」という条件に合った箇所であると気づいて読むことができなかった）ということを表している。

3点目は、「- 逃す」が非意図的行為である場合、行為主体が「積極的に対象を捉えようとしているという前提」と、「それを何らかの事情で捉えられない」という2つの意味特徴を有する点で、2点目で指摘したような「- 過ごす」及び「- 落とす」が有する意味特徴とは異なる、という点である。例えば、國廣編(1982)が指摘するように「医者は脳波のわずかな異常をミノガシテしまった。」という例においては、医者は脳波を一生懸命見ていながら、その異常を捉えそこなったという状況である。また、「ずっと聞こうと思っていたラジオ番組を、ついつい聞き逃した。」という例においても、行為主体はあるラジオ番組を、ある期間継続して、聞きたいという積極的な気持ちを有していたのにも関わらず、例えば放送日を勘違いしていたり、物忘れしてしまった

などの理由から、聞くことができなかったという状況である。

4点目は、「- 過ごす」と「- 逃す」が意図的行為である場合、両者の共通点としては、いずれも行為主体が捉えるべき対象が「とがめられるべき行為」であるという点である。(例えば、國廣編(1982)も指摘するように、「人を助けようとしているのをそのままミスゴス(ミノガス)」という表現は容認されない。)

5点目に、同じく非意図的行為である場合の「- 過ごす」と「- 逃す」の相違点として、「- 逃す」に関しては、行為主体が対象(とがめられるべき行為)を思うままに裁量し得る立場にあることが必要であるが、「- 過ごす」にはそのような制約がない、という点である。

最後に、もう1つの相違点として、「- 過ごす」が行為主体の「無関心な態度を暗示する」のに対し、「- 逃す」が行為主体の「積極的な態度」という特徴を有するという点である。従って、「- 逃す」に関しては、例えば「見逃す」が「先生、今度だけはミノガシテ下さい。」「よし、ミノガシテやろう。」と用いられように、「- 逃す」は命令・依頼の形で使用可能であり、また「- してやる」という形式を後続させることが可能であるが、このような「ミノガシテ」を「ミスゴシテ」に置き換えた表現は容認されない。

3.4.10 構文的意味

次に、(35)にグループ の主な例を提示する。

- (35) {走り}続ける・{降り}続く・{読み}進める・{食べ}まくる・{深まり}行く・
 {食べ}過ぎる・{見}飽きる・{飲み}慣れる・{書き}直す・{読み}返す・
 {言い}改める

このうち、例えば後項要素「続ける」を含む複合動詞は(36)のような文において用いられる。

- (36) a. 一時間経ち、二時間経ったが、ぎんは膝を崩さず石油灯の前で本を読み続ける。(『花埋み』)
- b. いつまでもお粥なんか食べ続けてたら、悪くない胃でもおかしくなっちゃうよ(『太郎物語』)
- c. 雨は卯の花を腐した後すぐ梅雨に続き、そのまま惰性のように降り続けて寒さがぬけないと思っていたのに、いつの間にか蒸し暑い夏がきていた。(『華岡青洲の妻』)

(36)に挙げた例文を踏まえ、「 - 続ける」という複合動詞の意味は、＜ある事態が、時間的進展に伴い、途切れたり状況が変わることなく保たれる＞と記述できる。

また、後項要素「進める」を含む複合動詞は(37)のような文において用いられる。

- (37) a. ここを我慢して読み進めていけば、もっといいことが書いてあるのかもしれない(『塩狩峠』)
- b. そんなことはさておき、この前の手紙のつづきを書き進めることにいたしましょう。(『錦繡』)
- c. また,1952年にメキシコ人考古学者アルベルト・ルス・ルイリエールは,パレンケの「碑銘の神殿」の床部に疑問を抱き掘り進め,地下階段を見つけ,ついに亡きパカル王の石棺墓を発見し世界的なニュースとして報じられたことも忘れられない。

(http://www.osaka-ue.ac.jp/gakkai/pdf/ronshu/2003/5405_note_sakurai_m.pdf)

(37)に挙げた例文を踏まえ、「 - 進める」という複合動詞の意味は、＜行為主体が、到達点や終点が分かりやすいある行為の実現を、途切れさせることなく保つ＞と記述できる。

その他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <主体が、ある事態 _{v1} を、ある期間もしくは習慣的に継続する _{v2}>

構文的意味 という1つのカテゴリーにおいて、<継続>というアスペクト性に程度差がみられる。すなわち、アスペクト性が高い、つまり最も統語的で、カテゴリーにおけるプロトタイプの事例としては、「- 続ける」、「- 続く」などが挙げられる。また、周辺的事例としては、例えば<継続>というアスペクトの意味に<過剰>という意味特徴が付加される「- 過ぎる」が挙げられる。また、マイナスの評価の意味が付加される「- 飽きる」が挙げられる。さらに、「- 直す」、「- 返す」、「- 改める」は、一旦はある行為が完了、もしくは進行したものの、行為主体が何らかの不備に気付いたり不満を感じたことで、再度その行為を行う、という、典型的事例に比べると特殊な<継続>をV2がプロファイルしていると位置づけられる。

3.4.11 構文的意味

次に、(38)にグループの主な例を提示する。

(38) {話し}合う・{乗り}合わせる・{言い}交わす

このうち、「- 合う」については、姫野(1982)が詳細に検討している。姫野の分析を踏まえると、グループの事例としての「- 合う」は、少なくとも3つの意味を有すると考えられる³⁶。

その1つは、「兄が弟と向かいあう」、「兄が弟と追いかけあう」、「兄が弟と殴りあう」、「兄弟が励ましあう」のような文において用いられる場合の意味であり、<2人以上の行為主体が、何らかの相互行為を実現する>と記述できる。

³⁶ 以下、「- 合う」の検討に関して、提示する用例は全て姫野(1982)において示されているものである。また、「- 合う」の3つの意味の記述において、一部、姫野(1982)の記述を参考にしている。

2つ目は、「兄弟が苦しみを分かちあう」、「兄弟が車を運転しあう」、「兄弟が子をあやしあう」のような文において用いられる場合の意味であり、＜2人以上の行為主体が、同一の対象（無生物・有生物）への働きかけとしての共同行為を実現する＞と記述できる。

3つ目は、「兄弟が沈黙しあう」、「兄弟が首を傾げあう」、「車の音が軋みあう」のような文において用いられる場合の意味であり、＜2人（2つ）以上の行為主体が、並行的³⁷な行為・変化を実現する＞と記述できる。

また、「- 合わせる」に関しては、「彼は電車で先輩と乗り合わせた。」、「私は昨夜、事故現場に居合わせた。」などの文³⁸において用いられ、姫野(1982)の記述に基づき、＜主体（人間）が、偶然、他者や何らかの事態に遭遇する＞と記述できる。

以上の検討を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述できる。

構文的意味 : <複数の主体が、ある事態 v_1 を、同時もしくは交互に（ある期間）
継続する v_2 >

なお、構文的意味 は、複数の主体によって同時もしくは交互に行われる事態を表しており、結果的に継続というアスペクト的性質が生じる。（例えば、「兄が弟を殴った。」のように「殴る」という動詞が単独で用いられる場合の意味としては、「殴る」は基本的に一回的な行為であるが、「兄弟が殴り合った。」のように複合動詞として用いられる場合には、「殴る」という行為は一回的なものではなく、同時もしくは交互に2人の人間が複数回実行する行為であるので、必然的に継続性という意味特徴が生じることになる。）この点を考慮すると、構文的意味 を抽出できるグループ は、＜ある事態の継続＞を表す構文的意味 を抽出できるグループ の周辺的な事例として位置づけることができる。

³⁷ なお、この「並行」性について姫野(1982: 36)は、このタイプは「複数の主体が場を同じくするだけで、各々が単独に動くわけだから、共起的でも交互的でもかまわない」と指摘している。

³⁸ なお、姫野(1982: 45)は、偶然遭遇するのが「ことがら」であれば格助詞「に」をとり、「人」であれば「と」をとる、と指摘している。

3.4.12 構文的意味

次に、(39)にグループ の主な例を提示する。

- (39) {食べ}始める・{怒り}出す・{溺れ}かける・{暮れ}かかる

このうち、例えば後項要素「始める」を含む複合動詞は(40)のような文において用いられる。

- (40) a. 病兵はめいめいの食糧を出して食べ始めた。(『野火』)
 b. 加藤は二階の部屋に上って新聞に眼を通してから、外山三郎から借りて来た山の本を読み始めた。(『孤高の人』)
 c. 間もなく雨が降り始めるだろう。

(40)に挙げた例文を踏まえ、「- 始める」という複合動詞の意味は、＜ある事態に関して、実現していない状態から実現している状態への変化が実現する＞と記述できる。また、後項要素「出す」を含む複合動詞は、(41)のような文において用いられる。

- (41) a. その林を閉ざして、硝子絵に水が伝うように、静かに雨が降り出した。(『野火』)
 b. 十一月の舞鶴の海は冷たく、だんだん体が冷えてきて、私が小刻みに震えだしたので、彼女は兄の服があるからそれに着換えたらいいとすすめてくれました。(『錦繡』)
 c. 「そうじゃないんだ」と私はやっと彼女の方へ目をやりながら、それから話の続きでもなんでもなしに、出し抜けにこう言い出した。(『風立ちぬ・美しい村』)

これらの「- 出す」の意味として、國廣編(1982)及び今井(1993)の記述を踏まえると、

<話者にとって結果が知覚可能な事態の（主に、突発的もしくは急な）生起が実現する>と記述できる。

なお、「- 始める」と「- 出す」は類義的であるが、その相違点として國廣編(1982)は、「昨日の午後降りハジメテまだ降っている。」という文は容認されるが「昨日の午後降りダシテまだ降っている。」という文はやや容認度が下がり、また「5時から読みハジメタ。」という文は容認されるが「5時から読みダシタ。」という文はやや容認度が下がるという事実を提示し、「- 始める」は「最初の段階」と「それ以後の継続」とが焦点化されているのに対し、「- 出す」は「最初の時点」だけが焦点化されているという点を指摘している。また、「急に（突然・いきなり）走りダシタ。」という文は容認されるが「ゆっくりと（のろのろと）走りダシタ。」という文はやや容認度が下がるという事実を提示し、「- 始める」に比べて「- 出す」は「開始が急である」という点を指摘している。

また今井(1993: 6)は「～始める」が単なる事態の開始という意味を持つものに対して、「～出す A」³⁹が話者の視点から見て知覚可能な形での事態の生起という意味を持つと考えることができるのである」と指摘している。そして、両者の違いとして3点挙げている。1つ目は、「- 始める」は「すぐにその本を読み始めなさい。」のように命令形にすることが可能であるが、「- 出す」は（「すぐにその本を読み出さなさい。」のように）命令形にするとやや不自然になる、という点である。2つ目は、「勧誘や文の主体の意志をあらわす文脈」においても、「- 始める」は用いることができる（「すぐにその本を読み始めよう。」や「すぐにその本を読み始めたい。」など）が、「- 出す」はそのような文脈においては（「すぐにその本を読み出そう。」や「すぐにその本を読み出したい。」などのように）不自然になる、という点である。3つ目は、「- 始める」は（「先生が生徒に本を読み始めさせた。」のように）使役構文での使用が可能であるのに対し、「- 出す」は（「先生が生徒に本を読み出させた。」のように）使用が不自然である、という点である。（なお、今井は、日本語の「らしい」、「ようだ」、「そうだ」などの話者の判断や推論を表すモダリティ形式は、命令、意志、使役の文脈では表われないが、これは、モダリティ形式を含む文の話者が、命題が表現する事態に対して制御力を持

³⁹ 今井（1993）における「～出す A」とは、「出す」を後項要素として有する複合動詞のうち、この後項要素が起動のアスペクト的用法として用いられるケースを表している。

っていないことに由来するとし、この生起不可能性と、「- 出す」が命令形、勧誘、主体の意志を表す文脈において生起不可能であることが並行的である、としている。すなわち、「- 出す」についても、話者は命題が表現する事態を知覚するだけであり、事態に対する制御力を持っていないため、命令、意志、使役の文脈で表われにくい、ということである。）

以上の検討を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述できる。

構文的意味 : <主体が、ある事態 _{v1} を 始動する _{v2} >

なお、構文的意味 という1つの下位カテゴリーにおける周辺的事例（周辺のなく開始>）としては、「- かける」と「- かかる」がある。

「- かける」は、「ご飯を食べかけたが、客が来たので中断した。」や「彼は事故にあって死にかけた。」のように用いられ、「- かかる」は「彼は溺れかかった。」や「山が崩れかかっている。」のように用いられる。これらの例のうち、「食べかける」は、ある事態が開始したものの、継続されることなく中断する状況（中断や中止を前提とした事態の実現の開始、という状況）を表し、「死にかける」、「溺れかかる」、「崩れかかる」は、ある事態が今にも実現しそうなもの実際には完全には実現しないような状況（ある事態が実現するに至る過程の冒頭であり、ある事態が実現する直前という状況）を表している。（この2つの状況に共通するスキーマ的意味に対応する形式として、本稿では構文的意味 の記述において<始動>というメタ言語を使用したのである。）

なお、現代日本語において「- かける」と「- かかる」とは極めて意味が近接している。両者の違いに関して、姫野(1979)は主に形式的な側面に対して、金田一(1950)及びこれを踏まえた國廣編(1982)は意味的な側面に対して、言及している。

姫野(1979: 54)は、「かかる」はそれ自体が自動詞形なので自動詞の多い瞬間動詞と結合しやすく、他動詞の多い継続動詞とは結合しにくい、と指摘している。また、継続動詞でも、受身形になると、「殺されかかる」、「ぶたれかかる」のように、継続動詞は無意志的になり、かつ結果動詞に転ずるので「かかる」とも結合するようになる、と指摘している。さらに、「かかる」と「かける」が共に結合可能な場合でも「かける」

との結合の方が安定する、など、「かかる」の方が「かける」よりも使用範囲（結合範囲）が極めて狭いという点も指摘している。（「かける」はそれ自体が他動詞形であって、複合動詞の一般的な結合パターンを考えれば他動詞との結合がなされやすいと考えられるものの、実際には他動詞のみならず自動詞とも結合している例が多数みられるということである。）

また、金田一(1950)は、「ろうそくが消えかけた。」という文においては、ろうそくが消えなかったことを示唆するが、「ろうそくが消えかかった。」という文においては、ろうそくが消える寸前にあったことを示しているとし、「- かける」は「主に寸前に達して又もとの状態に復した場合に用いるが」、「- かかる」は「あとでもとの状態に復する意を持たない。」と指摘している。

そして、金田一(1950)のこの指摘を踏まえて、國廣編(1982)では、「- かける」は「初期の段階」という幅のある段階に入るのに対し、「- かかる」は「瞬間的事態が成立する直前の一点に達する」のであると指摘している。

なお、本研究も、「- かける」と「- かかる」の相違点について、以上の指摘を支持するものである。

3.4.13 構文的意味

次に、(42)にグループ の主な例を提示する。

- (42) {歌い}終わる・{読み}終える・{逃げ}切る・{書き}上げる・{茹で}上がる・
 {飲み}尽くす・{燃え}尽きる・{歩き}通す・{やり}遂げる・{使い}抜く・
 {困り}果てる・{使い}果たす・{降り}やむ

これらのうち、例えば後項要素「終わる」を含む複合動詞は(43)のような文において用いられる。

- (43) a. 三百ページ余りのこの小説を信夫は一気に読み終わった。(『塩狩峠』)
- b. じつは、わたくし自身にしても、先月号の原稿を書き終わった直後、これからさきの部分に必要な、参考書を集めていたくらいで、中途でうち切ろうなどという考えは、みじんも持っておりませんでした。
(『路傍の石』)
- c. 次に思いついたのは、「ここからここまでは数え終わったよ」と数え終わった区域をサインペンで、かきこみ、かこってしまう方法だった。
(『ブンとフン』)

(43)に挙げた例文を踏まえ、「 - 終わる」という複合動詞の意味は、＜ある継続していた事態が、その時点で完了する＞と記述できる。

また、後項要素「上げる」を含む複合動詞は(44)のような文において用いられる。

- (44) a. 泣きながら書き上げたその手紙を、エミヤは出すことができなかった。(『塩狩峠』)
- b. すると、残された問題は、進水日の十一月一日までに、船体を作り上げられるかどうかだけです。(『戦艦武蔵』)
- c. 少納言はおろおろするばかりであったが、しかたなく、とりあえず昨夜縫い上げたばかりの姫君の衣裳を持ち、自身もいそいで着更えをして、車に乗った。(『新源氏物語』)

(44)に挙げた例を踏まえ、「 - 上げる」という複合動詞の意味は、＜行為主体が、継続していたある対象への働きかけを、その対象の完成によって完了する＞⁴⁰と記述できる。(なお、國廣編(1982)も指摘しているように、「 - 上げる」における前項要素は「書く」、「作る」、「縫う」、「刷る」、「育てる」、「こねる」、「磨く」など、ある行為の結果、何らかのものの完成が予想される動詞であり、「食べる」、「飲む」、「走る」、「渡る」のように、何らかのものの完成が予想されない動詞は前項要素となり得ない。)

⁴⁰ この意味記述において、國廣編(1982)の「アゲル」の意味記述を一部参考になっている。

その他、グループ に挙げた個々の例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述できる。

構文的意味 : <主体が、ある事態 v_1 を完了・完遂する v_2 >

さて、「- 終わる」及び「- 終える」と類義的である複合動詞として「- 切る」が挙げられる。國廣編(1982)を踏まえると、「- 切る」は、<主体によるある行為が、あらかじめ与えられた限界まで達する>という意味を有すると考えられる。つまり、<あらかじめ与えられた限界>及び<限界まで達する>という意味特徴を有しており、これらの意味特徴は「- 終わる」及び「- 終える」が有するものではない。(これに対し、「- 終わる」及び「- 終える」は<予定の行為>という意味特徴を有すると國廣編(1982)では指摘されている。)なお、以上の点が反映されている言語事実として國廣編(1982)は、「本を一冊読みオエタ(オワッタ)。」「本を一冊読みキッタ。」はいずれも容認可能であるのに対し、「その本は30ページまで読みオエタ(オワッタ)。」は容認可能であるがこれを「読みキッタ」には置き換えられず、また「がんばって予定の距離を走りオエタ。」は容認可能であるが「レースの途中で走りオエタ。」は容認されない、という点を指摘している。

また、「- 終わる」と「- 終える」はいずれも、構文的意味 という1つの下位カテゴリーの中で最もプロトタイプ的な事例であると位置づけることができ、両者は非常に近接した意味を有する⁴¹。両者の相違点として、國廣編(1982)では、「- 終わる」は「- 終える」と異なり、主体が人間以外の物の場合にも容認されるが、「- 終える」は容認されないと指摘している。(例えば、「ベルが鳴りオワルと列車は静かに動き始めた。」という文は容認されるが、この場合の「鳴りオワル」を「鳴りオエル」に置き換えることはできない。)このことから國廣編(1982)が指摘しているように、「- 終える」は、「- 終わる」と異なり、人間(またはその他の動物)の意志的行為であるという意味特徴を有していると考えられる。但し、この点はプロトタイプ的な条件であって、「- 終える」に関して、人間(またはその他の動物)の意志的行為以外の前項要素が「終

⁴¹ 例えば國廣編(1982)が指摘するように、両者はいずれも他動詞を前項要素としてとることができる。

える」と複合する形も、周辺事例ではあるが、一定数存在している。(例えば、「ヘビイチゴの花は大体6月までに咲き終えるのですが、中には実が今頃なっているのもありました。」(<http://www5a.biglobe.ne.jp/~Waag/sub1mandoro3.htm>)のように、「咲き終える」という事例は相当数存在する。)

3.5 複合動詞の構文的意味拡張

本節では、前節で認定した13の構文的意味の相互関係を比喻に基づく拡張という観点から分析し、この分析を踏まえて、13の構文的意味(13の節点)によって形成される構文的多義ネットワークを提示する。

なお、本研究では、既に第2章でも指摘したように、複合語レベルの構文の意味拡張をメタファー・メトニミー・シネクドキーという3種の比喻によって分析するという立場を取っているが、結論を先取りすると、本章で考察対象としている範囲においては、メタファーとメトニミーの関与は認められたが、シネクドキーの関与は認められなかった。

さて、以下に、前節で検討した13の構文的意味を再掲する。

構文的意味 : <移動主体が、ある動き_{v1}を伴い、ある移動_{v2}を実現する>(例:
「駆け上がる」)

構文的意味 : <移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{v1}を、反復的もしくは(長期)継続的に伴い、ある移動_{v2}を実現する>(例:「売り歩く」)

構文的意味 : <移動主体が、ある行為もしくは状態変化_{v1}を伴い、かつその行為もしくは状態変化_{v1}の結果として、ある移動_{v2}を実現する>
(例:「焼け落ちる」)

- 構文的意味 : < 変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する > (例:「歩き疲れる」)
- 構文的意味 : < 変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{V1}の結果として、ある変化_{V2}を実現する > (例:「突き刺さる」)
- 構文的意味 : < 使役行為者が、ある行為_{V1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{V2}を実現させる > (例:「打ち上げる」)
- 構文的意味 : < 主体が、ほぼ同時に、ある事態_{V1}及び別の事態_{V2}を実現する > (例:「光り輝く」)
- 構文的意味 : < 主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する > (例:「晴れ渡る」)
- 構文的意味 : < 主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある事態_{V1}を、未遂・不成立に終える_{V2} > (例:「{食べ}残す」)
- 構文的意味 : < 主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2} > (例:「{走り}続ける」)
- 構文的意味 : < 複数の主体が、ある事態_{V1}を、同時もしくは交互に(ある期間)継続する_{V2} > (例:「{話し}合う」)
- 構文的意味 : < 主体が、ある事態_{V1}を始動する_{V2} > (例:「{食べ}始める」)
- 構文的意味 : < 主体が、ある事態_{V1}を完了・完遂する_{V2} > (例:「{歌い}終わる」)

以下、これらの構文的意味間の相互関係について具体的に検討していく。(なお、これ以降において、構文的意味、構文的意味、構文的意味...を、意味、意味、意味という略称で呼ぶこととする。)

まず、「駆け上がる」などから抽出できる意味 (<移動主体が、ある動き_{V1}を伴い、ある移動_{V2}を実現する>)を、構文的多義ネットワークにおける拡張の起点となる中心義であると位置づける。意味を中心義であると位置づける根拠の1つ目としては、意味が全ての構文的意味の中でも最も、V2が意味的な主要部(ある構文的意味のプロファイルを決定づける要素)であり、V1がそれを補うという、現代日本語におけるほとんどのタイプの複合語が典型的に有する(従来、「右側主要部の原則」「主要部後置の原則」などと呼ばれてきた)意味構造を明確に認識することができる、という点である⁴²。

2つ目は、次節で検討するように、2種類の subjectification という変化を考える上でも、意味は主体化(文法化)及び主観化が最も進んでいないと考えられる意味であり、このことから意味をその変化の起点として位置づけることが最も妥当であると考えられる、という点が挙げられる。

さて、「駆け上がる」などから抽出できる意味 (<移動主体が、ある動き_{V1}を伴い、ある移動_{V2}を実現する>)と、「売り歩く」などから抽出できる意味 (<移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{V1}を、反復的もしくは(長期)継続的に伴い、ある移動_{V2}を実現する>)からは、<移動主体が、V2と時間的共起性を有するV1を伴い、V2という移動を実現する>という構文スキーマを抽出することができる。つまり、この2つの意味が、V2が<移動>であり、V1がその移動に伴う行為を表し、V1とV2とが時間的共起性を有する、という意味的共通性を有するのである。

⁴² 意味においては、前述の通り、V1はあくまでV2に付随的に伴う様態である。これに対し、後に提示する図1に基づいて考えると、意味を起点として下方向へと拡張するにつれて、V1とV2との間の因果関係が高まり、構文的意味におけるV1の貢献度が高まる。(すなわち、徐々にV1が付随的な意味特徴ではなくなっていく。)また後述するように、意味を起点として右方向へと拡張するにつれて、徐々に、V1が主に客体的意味内容を担い、V2が主に認知プロセスを担うという一定の区別がなされるようになる。つまり、右方向へと拡張することで、主要部がプロファイルを決定づける要素であると考えればV2が主要部であるとは言えるものの、厳密には、V1とV2の意味的貢献度を同一レベルで比較することが難しくなる、といえる。以上の点を踏まえると、ある構文における主要部後置の度合いにも、プロトタイプ性が存在すると考えることができる。

但し、意味 Ⅰ では V1 の事態の実現に際しての時間幅に特に制限はないのに対し、意味 Ⅱ は V1 が <反復的もしくは(長期)継続的> に V2 に伴うという時間幅の制限がある。また、意味 Ⅲ は(意味的主要部を構成する)後項要素が「上がる」、「降りる」のように、事態の実現における際立ちの高い参与体が通常 1 つであり、複合動詞全体としても際立ちの高い参与体は通常 1 つである。これに対して、意味 Ⅳ は後項要素自体は「歩く」、「去る」のように事態の実現における際立ちの高い参与体は通常 1 つであるが、複合動詞全体としては際立ちの高い参与体が通常 2 つ(通常ガ格名詞(句)で表される移動主体と、ヲ格名詞(句)で表される行為の対象)となる。このように、意味 Ⅱ と意味 Ⅲ は、V2 が移動を表し、V1 がその様態を表すという同一の意味カテゴリーに属しながら、意味 Ⅲ は意味 Ⅱ に比べて意味的な限定がみられ、意味 Ⅳ は意味 Ⅲ からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「駆け上がる」などから抽出できる意味 (<移動主体が、ある動き_{V1}を伴い、ある移動_{V2}を実現する>) と、「焼け落ちる」などから抽出できる意味 (<移動主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}を伴い、かつその行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある移動_{V2}を実現する>) からは、<移動主体が V1 を伴い V2 という移動を実現する> という構文スキーマを抽出することができる。すなわち、意味 Ⅱ と意味 Ⅲ とは意味的な共通性が認められるのである。但し、意味 Ⅲ に比べ、意味 Ⅳ では、V1 が V2 に時間的にやや先行していると捉えられる。また、意味 Ⅲ に比べ、意味 Ⅳ は、移動における過程よりも結果がより焦点化されている。(なお、経験的に、V1 と V2 とが時間的共起関係にある程度が高ければ高いほど、知覚的に 2 つの事態を単一の事態として捉えやすいと考えられ、逆に V1 と V2 とが時間的に異なるにつれて、2 つの事態を知覚的に単一の事態として捉えにくくなると考えられる。) 以上の、意味的な共通点と相違点を踏まえ、意味 Ⅳ は意味 Ⅲ からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「焼け落ちる」などから抽出できる意味 (<移動主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}を伴い、かつその行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある移動_{V2}を実現する>) と、「歩き疲れる」などから抽出できる意味 (<変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する>) からは、<主体が、V1 という行為もしくは状態変化の結果として V2 を実現する> という構文スキーマを

抽出することができる。なお、意味 意味 に比べて、V1 と V2 との間の因果関係の読み込みが前景化していると考えられる。そして、これは次節で検討するように、主観化の方向に一致する変化であると位置づけることができる。また、意味 意味 は全体として<移動>を表すのに対し、意味 意味 は全体として<状態変化>を表しているが、<移動>と<状態変化>の間には一般的に、前節で既に提示したように、(<状態変化>を<移動>によって捉えるという)空間化メタファーの関与が認められる。以上の点を踏まえ、意味 意味 は意味 意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「歩き疲れる」などから抽出できる意味 (<変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する>)と、「突き刺さる」などから抽出できる意味 (<変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{V1}の結果として、ある変化_{V2}を実現する>)からは、<変化主体が、V1の結果としてV2という変化を実現する>という構文スキーマを抽出することができる。すなわち、意味 意味 と意味 意味 とは、V1 と V2 との間に因果関係を認めることができる<変化>である、という点で共通しているのである。但し、前節でも述べたように、意味 意味 を抽出できる事例は、母語話者によっても容認度に程度差がみられ、構文的意味としての確立、定着の度合いが、意味 意味 は他の意味に比べて相対的に低いと考えられる。以上を踏まえ、意味 意味 は意味 意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

また、「突き刺さる」などから抽出できる意味 (<変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{V1}の結果として、ある変化_{V2}を実現する>)は、「打ち上げる」などから抽出できる意味 (<使役行為者が、ある行為_{V1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{V2}を実現させる>)からメトニミーによって拡張しているとも考えることもできる。すなわち、ここでは、「行為者が、何らかの行為により対象に働きかけ、その結果として対象に何らかの変化を実現させる」という一連のプロセスのうち、意味 意味 はそのプロセス全体を行為者の立場からプロファイルしているのに対し、このプロセスの一部である「対象の変化」へとプロファイルがシフトしたのが意味 意味 であるといえる。

なお、意味 意味 を抽出できるグループ は、既に言及したように多くの先行研究にお

いて、対応する他動詞からの派生によって生じた（すなわち、直接の複合によって生じてはいない）などとして複合動詞としての例外的な位置づけがなされてきたが、以上のように、意味 意味 からメタファー、及び意味 意味 からメトニミーによる拡張として関連づけることにより、このような事例も他の複合動詞の事例と共に包括的に扱うことが可能になる。

次に、「歩き疲れる」などから抽出できる意味 （＜変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する＞）と、「打ち上げる」などから抽出できる意味 （＜使役行為者が、ある行為_{V1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{V2}を実現させる＞）からは、＜V1の結果としてV2が実現する＞という構文スキーマを抽出することができる。すなわち、意味 意味 と意味 意味 とは、V1とV2との間の因果関係を認めることができるという点で共通しているのである。さらに、前述の通り、意味 意味 に比べて意味 意味 は、V1とV2との間の因果関係の認識が強化している。これは、次節で詳述するように、Traugottの提案する主観化の方向性に一致すると考えることができる。以上を踏まえ、意味 意味 は意味 意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「売り歩く」などから抽出できる意味 （＜移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{V1}を、反復的もしくは（長期）継続的に伴い、ある移動_{V2}を実現する＞）と、「光り輝く」などから抽出できる意味 （＜主体が、ほぼ同時に、ある事態_{V1}及び別の事態_{V2}を実現する＞）からは、＜V1とV2がほぼ同時に生じる事態である＞という構文スキーマを抽出できる。なお、意味 意味 に比較して意味 意味 は、V1とV2との時間的共起性が高まることと相関して、V2が意味的主要部でありV1がその補部であるという（現代日本語の複合語全般において典型的に想起される）意味的關係性が弱まる。以上の点を踏まえ、意味 意味 は意味 意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「売り歩く」などから抽出できる意味 （＜移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{V1}を、反復的もしくは長期継続的に伴い、ある移動_{V2}を実現する＞）と、「晴れ渡る」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する＞）からは、＜継続的な事態として実現されるV1と、V2とが、ほぼ同時である＞という構文スキーマを抽出で

きる。なお、意味 における V2 は客体性の高い事態（変化）であるのに対して、意味 においては前節で指摘したように V2 は相対的に客体性の低い変化である。以上の点を踏まえ、意味 は意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「晴れ渡る」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する＞）と、「{食べ}残す」などから抽出できる意味 （＜主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある事態_{V1}を、未遂・不成立に終える_{V2}＞）からは、＜主体にとっての V1 という事態のあり方が V2 である＞という構文スキームを抽出できる。なお、意味 における V2 は＜未遂・不成立＞であることから、意味 に比べ、事態実現の具体性がさらに低下している。さらに、意味 を抽出できるグループ においては、意味 を抽出できるグループ に比べ、個々の後項要素に関して、複合できる前項要素が多様である。これは、後述する文法化という観点に基づくと、意味 に比べて意味 が、文法化が進んでいることの反映であると考えられる。以上の点を踏まえ、意味 は意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「晴れ渡る」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する＞）と、「{走り}続ける」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2}＞）からは、＜主体が、V1 という事態を継続的(V2)に実現する＞という構文スキームを抽出できる。なお、意味 における V2 は＜継続的であり程度性・徹底性が高い事態＞という意味特徴であるのに対して、意味 における V2 は＜ある期間もしくは習慣的に継続する＞という意味特徴であり、意味 は意味 に比較してよりアスペクト性の高い意味であると位置づけられる。これは、次節で検討するように、構文レベルの文法化の度合いが、意味 に比べて意味 の方が高い、と考えることが可能である。以上の点を踏まえ、意味 は意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「{走り}続ける」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2}＞）と、「{話し}合う」などから抽出できる意味 （＜複数の主体が、ある事態_{V1}を、同時もしくは交互に（ある期間）継続する_{V2}＞）から

は、＜主体が V1 という事態を継続する＞という構文スキーマを抽出できる。なお、意味 における V2 は、＜継続＞というアスペクト性に＜同時もしくは交互に＞という意味特徴が付加されており、すなわち意味 は周延的な＜継続＞を表していると位置づけることができる。以上の点を踏まえて、意味 は意味 からメタファーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

次に、「{走り}続ける」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2}>）がある事態の＜継続＞を概念化しているのに対し、「{食べ}始める」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を始動する_{V2}>）は、継続的な一連のプロセスの一部である、＜始動＞部分をプロファイルしている。すなわち、意味 と意味 との間には、概念上の関連性（時間的隣接関係）を見出すことができ、意味 は意味 からメトニミーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

最後に、「{走り}続ける」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2}>）がある事態の＜継続＞を概念化しているのに対し、「{歌い}終わる」などから抽出できる意味 （＜主体が、ある事態_{V1}を完了・完遂する_{V2}>）は、継続的な一連のプロセスの一部である、＜完了・完遂＞部分をプロファイルしている。すなわち、意味 と意味 との間には、概念上の関連性（時間的隣接関係）を見出すことができ、意味 は意味 からメトニミーによって拡張した意味であると位置づけることができる。

以上の検討を踏まえ、以下図 1 に、13 の構文的意味によって形成される、構文的多義ネットワークの略図を提示する。

以下の略図において、mは構文的意味（ネットワークにおける節点）を表し、破線の矢印（ネットワークにおけるリンク）はメタファーリンク（スキーマの抽出に基づく拡張関係）を表し、二重線の矢印はメトニミー（時間的隣接関係に基づくプロファイルシフト）を表している。

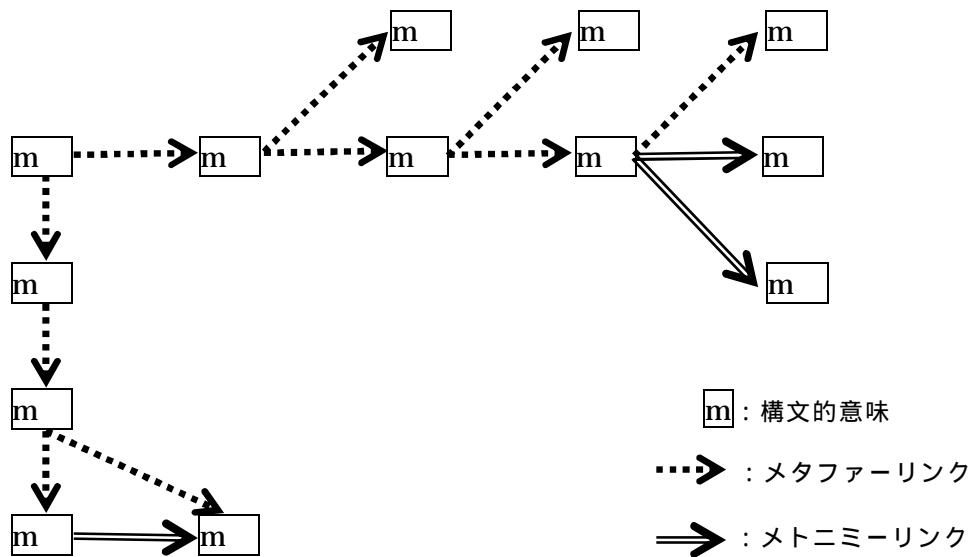


図1：複合動詞における構文的多義ネットワーク

3.6 構文的多義ネットワークにおける主体化・主観化の関与

最後に本節では、前節図1において提示した構文的多義ネットワークにおける subjectification (主体化・主観化) の関与⁴³について検討する。

その前提として、本研究では、「主観」及び「客観」について、深田(2001)における定義に従う。深田(2001: 72)は、発達心理学や神経心理学の知見を踏まえつつ、「主体」を「自己」、「客体」を「他者」とであると位置づけた上で、「主観」を「主体が知覚し、判断、認識、推論した内容」と規定し、「客観」を「主体の知覚、判断、推論の対象となるもの。主体の認識作用の対象（概念化の対象）となるもの」と規定している。

次に、subjectification について確認する。

subjectification という概念は、Langacker によっても、Traugott によっても提案さ

⁴³ なお、Langacker の提案している subjectification は共時的な意味拡張にも通時的な意味変化にも適用できる概念であるが、本研究では共時的なレベルでの関与について検討していく。また、Traugott の提案している subjectification は通時的な意味変化の説明において用いられている概念であるが、本研究は、この概念の共時的な意味拡張への適用可能性を模索する上での1つのケーススタディである。

れている。それぞれの subjectification は、全く無関係で明確に異なる、というわけではないものの、主体性・主観性がどのように高まるか、という観点において一定の区別ができると思われる。以下、深田(2001)をはじめ一定数の先行研究での訳し分けに従い、Langacker による subjectification を「主体化」、Traugott による subjectification を「主観化」、と呼ぶこととする。

まず、Langacker が Langacker(1999)をはじめとする一連の研究において提案している主体化は、客体的に把握されていたものが、客体性を徐々に失い、元々内在していた主体的な把握しか残らなくなるような意味拡張である。

これに対し、Traugott が Traugott(1995)などの一連の研究において提案している主観化は、語用論的推論の慣習化によって意味が命題内容に対する話者の信念、態度に基づくようになる意味拡張である。

さて、主体化、主観化に関して、中村(2004)⁴⁴はその相違点を次のように指摘している。中村(2004: 25-26)ではまず、元の用法になかった読みへ展開・拡張する場合は、Traugott の主観化が適合するとしている。

中村(2004: 24)は、英語の *since* において、以下の(45)のような例を提示している。

(45)a. <以後> : *I have done quite a lot writing since we last met.* (この前会ってから、たくさん書いた。)

b. <以後 + 理由> : *Since Susan left him, John has been very miserable.* (スーザンと別れてから / 別れたので、ジョンはずっと惨めだ。)

c. <理由> : *Since you are not coming with me, I will have to go alone.* (君と一緒に来ないので、ボクは一人で行かなければならない。)

そして、英語の *since* においては、元々(45a)のように<以後>という意味であったものが、語用論的富化によって<理由>という読みが推論され、さらに元の<以後>

⁴⁴ なお、中村(2004)では、Langacker の subjectification も Traugott の subjectification も共に「主体化」と呼んでいるが、本稿では「主体化」、「主観化」と呼び分けることとする。

という読みが漂白化して<理由>という読みが残り、意味として確立される、としている。

このように、元の意味内容が基本的に「増えては減り」のサイクルを辿り、意味内容がゼロになることはないような Traugott の主観化に対し、文法化をはじめとして、もとの具体的な意味内容が徐々に希薄化して、究極的にはその意味内容がゼロになるような場合は、Langacker の主体化が適合する、としている。

中村(2004: 22)は英語の *have* について以下の(46)のような例を提示している。

- (46) a. *John had the baton.* (ジョンはバトンを受け取った)
 b. *Watch out - he has a gun!* (気をつけろ、やつは銃を持っている)
 c. *I have an electric drill, though I never use it.* (私は電気ドリルを持っているが、なかなか使わない)
 d. *They have a good income from judicious investments.* (彼らは賢く投資していい収入を得ている)
 e. *She often has migraine headaches.* (彼女はよく偏頭痛がする)
 f. *We have a lot of skunks around here.* (このあたりにはスカンクが多い)

これらの例で、a から b、c...f へと進むに従い、直接手に取る行為や物理的な所有から抽象的な所有へ、あるいはコントロールの効く所有から効かない所有へ、そして存在の位置関係のみを表すという具合に、具体的な意味内容(叙述内容)が徐々に希薄化している、としている。

また、(47b)の完了形(*have* + 過去分詞)の文法要素としての *have* は、(47a)のように所有の *have* からの拡張とされる、としている。

- (47) a. *John has a letter written.* (ジョンは、書かれた手紙を持っている)
 b. *John has written a letter.* (ジョンは手紙を書いたところだ / すでに書いている)

(47a)では、ジョンと手紙との間の参照点関係の他に、ジョンがエネルギーを行使して所持していること、あるいは手紙がジョンのコントロールの範囲内にあるというような具体的な意味内容（叙述内容）を持つが、(47b)の場合ではそのような具体的内容はなく、ただジョンが手紙を現在持っているという事態を参照点として、ジョンが手紙を書いたという事態を認知の標的(target)とするという参照点・標的關係のみを強く表しているといえることができる、としている。そして、(46a)から(46f)の用法へ、さらに(47b)の完了形の用法に向かうに従い、動詞 *have* は具体的な叙述内容を希薄化させ、参照点能力のみと対応するようになっている、としている。

以上の考え方を踏まえて、複合動詞の構文的意味拡張における主体性・主観性の変化について、主体化・主観化という概念に照らし合わせて検討してみる。

まず、先に示した図1において、「駆け上がる」などから抽出できる意味（＜移動主体が、ある動き_{V1}を伴い、ある移動_{V2}を実現する＞）を起点としての下方向への拡張に伴い、V1とV2のそれぞれの事態の具体性は保持されつつ、V1とV2とを結び付ける認知主体による因果関係の認識が前景化（強化）される。例えば、意味 ① では、V1がV2に（様態的に）伴う動きに過ぎなかったのが、「焼け落ちる」などから抽出できる意味（＜移動主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}を伴い、かつその行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある移動_{V2}を実現する＞）においてはV1を伴ってV2が実現するともV1の結果としてV2が実現するとも解釈できるようになる。意味 ② から、「歩き疲れる」などから抽出できる意味（＜変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{V1}の結果として、ある状態変化_{V2}を実現する＞）へと拡張するに従い、V1がV2の様態であるという解釈はなくなり、V1とV2との間の因果関係の解釈のみが残る。さらに意味 ③ から、「突き刺さる」などから抽出できる意味（＜変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{V1}の結果として、ある変化_{V2}を実現する＞）へ、及び意味 ④ から、「打ち上げる」などから抽出できる意味（＜使役行為者が、ある行為_{V1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{V2}を実現させる＞）への拡張に従って、前述の通り、さらに強い因果関係⁴⁵が認められるようになる。この一方向的な拡張は、中村(2004)の考え方に従えば、Traugottにおける主観化の考え方がより適合するような拡張であると考えられる。

⁴⁵ この点について、詳細は本章の3.4.6節を参照されたい。

なお、先に示したように、深田(2001: 72)は「主観」を「主体が知覚し、判断、認識、推論した内容」、「客観」を「主体の知覚、判断、推論の対象となるもの。主体の認識作用の対象（概念化の対象）となるもの」と規定している。この規定に従うと、V1 と V2 との間の因果関係の認識（読み込み）は、相対的に「主観」性が高いものであると位置づけることができる。そして、少なくとも意味 から意味 までに関して、V1 と V2 というそれぞれの意味特徴は相対的に「客観」性が高いものであると位置づけることができる。意味 から意味 までは、いずれも主観と客観に基づく意味形成がなされていると考えられるが、ネットワークにおいて意味 から下方向へと拡張するに従って、V1 と V2 との間の因果関係の認識が強化されるということは、より主観的な意味形成が行われるようになることと等しいと考えることができる。

一方、図1において、「駆け上がる」などから抽出できる意味（＜移動主体が、ある動き_{V1}を伴い、ある移動_{V2}を実現する＞）を起点として右方向への拡張（より語彙的な複合動詞からより統語的な複合動詞への一方向的な拡張）に伴い、V1の事態の具体性は保持されつつ、V2は（意味、意味⁴⁶、意味⁴⁷のように）具体性の高い事態から、（意味⁴⁸、意味⁴⁹のように）より抽象的な事態へ、さらには（意味⁵⁰、意味⁵¹、意味⁵²、意味⁵³のように）アスペクト的要素をはじめとする文法要素へと性質が変化する。すなわち、この一方向の拡張においては、V2の叙述内容（客体的意味内容）が希薄化すると同時に、認知プロセスが前景化し、主体性が高まる。これは、中村(2004)の考え方に従えば、Langackerにおける主体化の考え方がより適合するような拡張であると考えられる。

ところで、Langacker(1999)、中村(2004)などにおいて、主体化が文法化のプロセス

⁴⁶ <移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{V1}を、反復的もしくは長期継続的に伴い、ある移動_{V2}を実現する>（例：「売り歩く」）

⁴⁷ <主体が、ほぼ同時に、ある事態_{V1}及び別の事態_{V2}を実現する>（例：「光り輝く」）

⁴⁸ <主体が、ある事態_{V1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{V2}として実現する>（例：「晴れ渡る」）

⁴⁹ <主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある事態_{V1}を、未遂・不成立に終える_{V2}>（例：「{食べ}残す」）

⁵⁰ <主体が、ある事態_{V1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{V2}>（例：「{走り}続ける」）

⁵¹ <複数の主体が、ある事態_{V1}を、同時もしくは交互に（ある期間）継続する_{V2}>（例：「{話し}合う」）

⁵² <主体が、ある事態_{V1}を始動する_{V2}>（例：「{食べ}始める」）

⁵³ <主体が、ある事態_{V1}を完了・完遂する_{V2}>（例：「{歌い}終わる」）

においてしばしば中心的な役割を果たすということが指摘されている。図1における意味 を起点とした右方向の拡張に伴い、より語彙的な要素がより統語的な要素へと変化しているが、これは、文法化のプロセスであると位置づけることができる。

三宅(2005: 62-64)は、文法化を「内容語⁵⁴だったものが、機能語⁵⁵としての性格を持つものに変化する現象」と規定している。そして、文法化には2つの異なった側面が存在するとし、その1つは「実質的な意味が抽象化、希薄化、あるいは消失する、という意味的な側面」とであるとし、もう1つは「自立性を失い、専ら文法機能を担う要素になる、という形態・統語的な側面」であり、この形態・統語的な変化は、名詞や動詞などの本来的なカテゴリーへの帰属度が希薄になるという点で「脱範疇化」と呼ばれることがあるとも指摘している。

さて、図1における意味 を起点とした右方向への一方向的な拡張を文法化であると位置づける際、意味的な変化の側面に関しては、ここまでに述べた通り、Langackerの主体化を適用させることによって妥当な説明が可能であると考えられる。一方、形態・統語的な変化は、本稿3.2節で既に提示したように、影山(1999)における指摘が該当すると考えられる。すなわち、意味 ~ 意味 を抽出できる複合動詞(グループ ~ グループ)においては、「兄が跳んだのを見て、弟も跳び上がった。 *兄が跳んだのを見て、弟もそうし上がった。」のように、前項要素を代名詞に置き換えることができず、また、「先生は荷物を持ち帰った。 *お持ちになり帰った。 / 歩き疲れる * 歩行し疲れる。」のように前項要素を尊敬語や「動名詞 + する」という形式に置き換えることができない。一方、意味 ~ を抽出できる複合動詞においては、「そうし続けた / お持ちになり続けた / 歩行し続けた」のように、これらの置き換えが可能である。なお、この置換テストは、複合動詞の性質を明確に2分するものではない。その根拠として、中間段階に位置するグループ においては、これらの置換が可能なものと可能でないものとが混在している。(例えば、「 - 悩む」や「 - 漏らす」や「 - 落とす」に関してはこれらの置換が極めてしにくい、「 - 忘れる」や「 - 兼ねる」や「 - 間違える」などにおいては容認度が上がる。)

⁵⁴ なお、三宅(2005: 62)は「内容語」を「実質的な意味を持ち、自立した要素になり得る語」と規定している。

⁵⁵ なお、三宅(2005: 62)は「機能語」を「実質的な意味、および自立性が希薄で、専ら文法機能を担う要素になる語」と規定している。

なお、影山(1999)など多くの先行研究においては、このような置換テストの可否が、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との語形成部門の相違の根拠であると位置づけているが、本研究では、意味的な側面（主体化のプロセス）と相関して考え、文法化という変化の、形態・統語的側面への反映であると位置づける。また、そう考えることによって、従来なされてきた語彙的複合動詞と統語的複合動詞との峻別という見方ではなく、両者をゆるやかに連続したものとして、包括的、体系的に捉えることが可能になるのである。

3.7 本章のまとめ

以上、本章では、[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合名詞を考察対象とし、先行研究を批判的に検討した上で、個々の複合動詞の意味分析を踏まえてボトムアップ的に13の構文的意味を認定した。そして、それらの複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークの形成のプロセスと、その動機づけについて検討した。最後に、構文的多義ネットワークにおける主体化及び主観化の関与について検討した。

第4章 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成

4.1 はじめに

本章は、前項要素が普通名詞¹で、後項要素が他動詞（通常、行為主体を表すガ格名詞（句）と、行為主体による何らかの働きかけの対象を表すヲ格名詞（句）をとる動詞²）の連用形であるほぼ全てのタイプの複合名詞を考察対象とし、それらの複合名詞の意味形成について構文理論の枠組みにおいて共時的に分析し、記述するものである。

以下に、本章の概要を述べる。

まず 4.2 節では、考察対象とするタイプの複合名詞をめぐる主な先行研究の問題点を指摘する。

4.3 節では、4.2 節での指摘を踏まえ、構文としての[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の位置づけについて確認する。

4.4 節では、個々の[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味の検討を踏まえ、ボトムアップ的に複数の構文的意味を認定する。

4.5 節では、考察対象とするタイプの複合名詞の意味形成に関与する2つのレベルの比喻について検討する。その1つ目は、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻である。2つ目は、構文的多義ネットワーク³形成の動機づけとしての比喻である。

4.6 節では、構文的多義ネットワークにおけるカテゴリーの連続性が、現代日本語の品詞構造の連続性と並行的であるということについて論じる。

¹ なお、前項要素が普通名詞である複合名詞の中には、少数ではあるが「短冊切り」や「数珠繋ぎ」など、複合名詞によって表される〈行為〉の何らかの様態を表すケース（「短冊切り」であれば、「短冊のように切る」ことを表し、「目玉焼き」であれば「目玉のような形で卵を焼く」ことを表す、といったケース）がみられるが、本研究では考察対象外とする。すなわち、本研究では、前項要素の普通名詞が、複合名詞によって表される事物に関する何らかの参与体を表すケースを、網羅的に扱うこととする。

² なお、本研究ではこのような動詞を広く「他動詞」と位置づけるが、認知言語学において広く共有されている、最もプロトタイプの他動詞から最もプロトタイプの自動詞までを連続的に位置づけるという考え方を前提とし、他動詞と自動詞とを明確に二分するという考えは採らない。

³ [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の構文的多義ネットワークは、4.5.2 節に図示する。

最後に 4.7 節は本章のまとめである。

ところで、本章の考察対象とする複合名詞の前項要素である「普通名詞」は、加藤(2006: 15)の規定に従い、具体的な事物や抽象的な観念を表す名詞とする。なお、加藤(2006)は普通名詞を一般名詞の一種であると位置づけている。一般名詞の中の、普通名詞以外の名詞として、加藤(2006)は動作名詞(「理解」や「参加」など、「する」を後接させてサ変複合動詞を形成できる名詞)、状態名詞(「静か」「きれい」など、形容動詞の語幹部分にあたる名詞)、両用名詞(「満足」や「感心」など、動作名詞でも状態名詞でもある少数の名詞)を挙げている。また、一般名詞以外の名詞として、加藤(2006)は固有名詞(人名や地名などを表す名詞)、代名詞(他の名詞などを指して代行的に用いる名詞)、数詞(「一」や「百」など数を表す名詞)、形式名詞(「こと」や「ため」など、名詞としての実質的な意味を失って、他の要素と結びついて文法的な機能を持つ用法に特化した名詞)を挙げている。

4.2 先行研究の問題点

本研究において考察対象とするタイプを含む、[名詞 + 動詞連用形]型の複合名詞は従来、影山(1982)及び影山(1993)、杉岡・小林(2001)、伊藤・杉岡(2002)をはじめ、主に語彙意味論の枠組みにおいて精力的に研究がなされてきている。これらの先行研究における主な問題点(一貫して詳細に検討されていない点)として、大きく次の3点が挙げられる。

1 点目は、構成要素間の関係性の非連続性に関する問題である。

前述の先行研究ではいずれも、例えば「花見、草刈り」などの複合名詞は「行為」を表し、「鉛筆削り、缶切り」などの複合名詞は「道具」を表す、というように、[名詞 + 動詞連用形]型の複合名詞は、「行為」や「道具」などの簡略的なラベル付けのもと、非連続的に分類されるに留まっている。しかし、4.5.2 節で検討するように、構成要素間の関係性に一定の相違はあっても、[名詞 + 動詞連用形]という同一形式を有している以上、その複数のパターン間には何らかの意味的な関連性(連続性)を認めることができるであろう。したがって、それぞれのパターンを詳細に記述し、さらにそ

これらの相互関係を明らかにすることが必要であると考えられる。

なお、影山(1993: 191-193)や伊藤・杉岡(2002: 114)では、「行為」や「道具」などの様々なパターンが「意味拡張」によって生じていると言及されているものの、両者共に、それがどのようなレベルにおけるどのような拡張であるのか⁴、という詳細かつ包括的な提案はなされておらず、この点についても明らかにする必要があると考えられる。

2点目は、複合名詞一語の意味を捉える上で、厳密には構成要素(である形態素)それぞれの意味のみからは導かれない意味(例えば、「鉛筆削り、缶切り」などにおける「道具」の意味)の出所、理論的位置づけが明示されていないという点である。このことは、そもそも前述の、語彙意味論的な枠組みにおいては、要素還元主義的な手法を採っていることとも関連する問題⁵である。本章4.4節では、第2章の2.3節で既にみたような構文理論の意味観に基づき、個々の複合名詞の意味についても、またそれらから共通性として抽出される構文的意味についても、構成要素の意味の総和からは導かれないゲシュタルト的な構成体であると位置づけ、それらの意味を記述していく。

なお、このことに関連して、「悩み、救い、遊び」のように、動詞連用形が単独で転成名詞として定着している事例も一定数存在する一方で、本章で考察対象とする相当数の複合名詞の後項要素(例えば「花見」における「見」、「嘘つき」における「つき」、「霧吹き」における「吹き」など)は単独で転成名詞として定着しておらず、あくまで後項要素として定着している。この点も、複合名詞一語の意味を厳密には要素還元的には捉えられないということの一つの根拠であると位置づけられる。

3点目は、いわゆる内項複合語と付加詞複合語の非連続性に関する問題である。

⁴ 本研究では、4.5.2で詳述するように、この「意味拡張」を構文レベルにおいて生じるものであると位置づけ、また、その拡張を、メタファー・シネクドキー・メトニミーの3種の比喩に基づく拡張であると位置づけて分析する。

⁵ 語彙意味論の枠組みでは、複合語の意味を、語彙概念構造を用いて記述している。影山(1999: 63-64)が指摘するように、この手法は、動詞の概念的意味を明確に表示し統語構造と意味構造との関係を明確化しようというものであり、動詞などの意味を「移動」「状態変化」「活動」などの限られた意味的なプリミティブと項によって表示している。しかし、影山(1999: 64)が「語彙概念構造は、個々の動詞が持つ概念的・含蓄の意味をすべて網羅的に示す必要はない。さしあたっては、当該言語で統語的に意義のある意味特性を示せばよい。」と述べていることから分かるように、語彙意味論の手法においては、個々の複合名詞の意味や構文的意味におけるゲシュタルト的な特性を詳細かつ適切に記述することは極めて難しいと考えられる。

前述の先行研究ではいずれも、[名詞 + 他動詞連用形]型の複合名詞を、「花見、鉛筆削り、車寄せ」のように他動詞の目的語（内項）が前項要素となるもの（以下、内項複合名詞と呼ぶ）と、「糊づけ、手書き、鉄板焼」のように付加詞（内項以外の要素⁶）が前項要素となるもの（以下、付加詞複合名詞と呼ぶ）とを明確に区分している。そして、内項複合名詞を語彙的統語表示である項構造のレベルにおける複合語形成によるものとし、付加詞複合名詞を語彙的意味表示である語彙概念構造レベルにおける複合語形成によるものとし、両者の語形成のレベルを明確に区分⁷している。しかし、本節の1点目の指摘と同様に、いずれのタイプも[名詞 + 他動詞連用形]という同一形式を有する以上、それらの間に意味的な連続性を認めることが可能であると思われる。

以上、本節では[名詞 + 動詞連用形]型複合名詞の先行研究における3つの問題点を指摘した。

4.3 構文としての[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞

前節で提示した問題点を解決すべく、本研究では考察対象とする複合名詞について、[普通名詞 + 他動詞連用形]という同一形式に複数の意味が結び付いた多義的な（複合語レベルの）構文であると位置づけ、また複合名詞の意味形成を構文的多義ネットワークの形成であると位置づけ、構成要素間の関係の多様性を包括的、体系的に分析する。

なお、第2章でも述べた通り、Langacker(1999: 109)では、単一の合成からなる構造体を最小構文と位置づけている。本研究もこの考え方に従うものであり、考察対象とする複合名詞を、現代日本語における(2つの形態素による、単一の合成によって形成される)最小構文の1つの事例であると位置づける。

さて、筆者は、web上で公開されている国語辞典のデータベースであるYahoo!辞書

⁶ なお、伊藤・杉岡(2002: 115)では、「内項以外の要素」を「付加詞」とであると位置づけているが、内項以外の要素の1つである外項については「動詞由来複合語の第一要素にならない」と指摘し、複合名詞の二分に際して考察対象外の要素と位置づけている。

⁷ なお、語彙意味論の枠組みにおいては、内項複合名詞の語形成を文法レベルの語形成、付加詞複合名詞の語形成を語彙（レキシコン）レベルの語形成であると位置づけ両者を区分しているが、本稿第2章の2.3節で既に述べたように、本研究が依拠する構文理論は、文法体系（文法知識）と語彙体系（語彙知識）とは同様に、意味と形式のペアとしての記号であって、連続的なものであると位置づけている。

⁸、web 検索（検索エンジン google での検索）及び『新潮文庫の 100 冊』（CD-ROM 版）から、現代日本語において十分に定着している合計 400 例の複合名詞の事例を採集した。

事例の採集にあたっては、まず小泉他編(1989)に収録されている全ての和語の他動詞を選び出し、それらの連用形を後項要素とし普通名詞を前項要素とする（現代日本語において定着している）複合名詞を、Yahoo!辞書と google と『新潮文庫の 100 冊』（CD-ROM 版）のそれぞれの文字列検索によって網羅的に抽出した。また、小泉他編(1989)に収録されていない他動詞（「釣る、儲ける」など）数例に関しても、その連用形を対象として同様の文字列検索を行った。

次節では、400 例の個々の複合名詞の意味を検討した上で⁹ボトムアップ的に抽出した、現代日本語において確立していると考えられる 11 の構文的意味とその構文的意味を抽出できる主な事例を提示していく。

なお、以下の構文的意味の記述において、前述の加藤(2006)における普通名詞の位置づけを踏まえ、前項要素である普通名詞によって表される、諸々の具体的な事物や抽象的な観念の総称として「存在」という語を用いることとする。

4.4 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の構文的多義性

本節では、[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞に関して、現代日本語において確立していると考えられる 11 の構文的意味を認定する。なお、以下では、意味的に類すると考えられる複合名詞群（以下、グループ 、グループ ...と呼ぶこととする）の主な事例を提示し、それらの複合名詞群における個々の意味を検討した上で抽出した、それらの複合名詞群に共通する意味である構文的意味を提示し、その構文的意味の特徴について記述していく。

⁸ Yahoo!辞書(<http://dic.yahoo.co.jp>)の国語辞典は、『大辞泉 増補・新装版』（23 万余語）と『大辞林 第二版』（23 万 3000 語）に基づいた web 上の検索システムである。

⁹ なお、次節では、400 例の事例のうちの一部について、それらの意味記述を提示する。

4.4.1 構文的意味

まず、(1)にグループ（計175例）のうちの主な事例を提示する。（なお、175例のうち、構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは11例¹⁰あった。また構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは2例¹¹あった。また構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは11例¹²あった。最後に、構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは1例¹³あった。）

- (1) 胴上げ・音合わせ・玉入れ・物思い・模様替え・目隠し・草刈り・
金魚掬い・子育て・塩出し・人助け・肩たたき・酒断ち・魚釣り・
ボタン付け・化粧直し・ハンマー投げ・肩慣らし・しわ伸ばし・
綱引き・足踏み・人減らし・歯磨き・花見・金儲け・客寄・色分け

以上の事例のうち、例えば「草刈り」という複合名詞の意味は、＜ある人が、畜産物の飼料や農作物の肥料とする目的で、もしくは住環境などを管理する目的で、必要な草もしくは雑草を根元から切り取ること＞と記述できる。

また、「花見」という複合名詞の意味は、＜人々が桜の木の下に集まって、桜の花を見ながら飲食をしたり語り合ったり歌を歌ったりして楽しむこと＞と記述できる。

その他、(1)に挙げた例を含む175例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述することができる。

¹⁰ この11例とは、「物書き、金貸し、車貸し、火付け、舵取り、漆塗り、球拾い、旗振り、独楽回し、皿回し、靴磨き」である。

¹¹ この2例とは、「縁飾り、石積み」である。

¹² この11例とは、「鳥追い、熱冷まし、髭剃り、艶出し、錆止め、棘抜き、霧吹き、爪磨き、日よけ、雪よけ、石割り」である。

¹³ この1例とは、「(お)手洗い」である。なお、「手洗い」に関しては、同音異義として、後述する構文的意味 の事例としての意味もある。すなわち「セーターを手洗した。」という文において使用されるような、＜ある人が、洗濯機を使わずに自身の手を使って洗濯物の汚れを落とすこと＞という意味も存在する。

構文的意味 : <行為主体が、主に¹⁴何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけ¹⁵としての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと>

構文的意味 は、4.5.2 節でもみるように、<行為>の意味特徴を有する程度が最も高く、このことから他の構文的意味を理解する上での前提として機能しており、かつ最も一般性が高い¹⁶ことを考慮し、本研究で考察対象としている[普通名詞＋他動詞連用形]型複合名詞において形成される構文的多義ネットワークにおける中心義¹⁷（共時的な多義ネットワークの中心に位置し、ネットワークにおける拡張の出発点である意味）であると位置づける。

構文的意味 を抽出できる個々の事例において、「草刈り」の「草」や「花見」の「花」といった前項要素によって表される存在は、それぞれの後項要素によって表される<行為>の対象を表すラ格としての役割を担っている。

ところで、構文的意味 において、対象である<ある存在>への行為主体による働きかけは、一回的もしくは瞬間的な行為ではなく、一定時間の経過を必要とする、継続的もしくは連続的な行為である。

このことに関連して、例えば、「肩たたき」の後項要素である「たたく」という他動詞が「彼は机をたたいた。」のように単独で使用される場合、「たたく」の意味は概略、<行為主体が、手で直接、もしくは道具を用いて、ある無生物もしくは有生物を打つ>と記述できる。この場合、「たたく」というのは一回的な行為である。しかし、「肩

¹⁴ <主に>という意味特徴を含めていることについて、今回収集した 175 例は基本的に行为主体による対象（としてのある存在）への意図的な働きかけの意味を有しているが、「物忘れ」という 1 語のみ、非意図的なプロセスの意味を有する事例であった。

¹⁵ 4.6 節でもみるように、本章で提示する全ての構文的意味のベースに主体から他の参与者への<働きかけ（としての行為）>という意味特徴（すなわち、行為主体から対象への動作の受け渡し）が存在するため、以下の全ての構文的意味に<働きかけ>という意味特徴を含めた記述をしている。但し、<働きかけ>の程度が相対的に高い事例から低い事例まで、それぞれの構文的意味（という一つのカテゴリー）の中でもその程度差がみられる。

¹⁶ なお、ここでの「一般性が高い」という性質は、Langacker(2000)及び(2008)における考え方に基いている。すなわち、ここでの一般性とは、ある構文的意味が、[普通名詞＋他動詞連用形]型複合名詞におけるどれだけの成員（個々の複合名詞）に当てはまるか、という程度のことである。（ある任意のパターンの一般性の度合いは、それがどのくらい幅広く潜在的に適用可能かによって決まるものである。）

¹⁷ 中心義の定義、位置づけについては、本稿第 2 章 2.3 節を参照されたい。

たたき」という複合名詞の意味は概略、＜人間が、ある人の肩の筋肉の凝りをほぐすために、一定時間連続してその人の肩を握りこぶしや道具で打つこと＞と記述でき、「肩たたき」という語においては、肩をたたくという行為は一回のみではなく、一定時間の経過を伴う、＜連続＞的に繰り返される行為である。

また、「花見」という語に関しても、＜桜を見る＞という行為は一回的もしくは瞬間的なものではなく、「花見」という1つの催しが行われている間に、人々は＜継続＞して桜を目にすることとなる。

なお、構文的意味 において、行為主体による対象への＜働きかけ＞には、程度差¹⁸がみられる。

構文的意味 という1つのカテゴリーにおける典型事例は、「草刈り、歯磨き」のように、行為主体が意図的に対象に働きかけ、その結果として対象に何らかの状態変化が生じるケースである。

また、「花見」のように、＜働きかけ＞の程度がやや下がった事例、すなわち、行為主体による対象（である桜）への働きかけは、意図的ではあるが、物理的な働きかけではなく視覚で捉えているのみであり、「草刈り」の「草」や「歯磨き」の「歯」とは異なり、対象（桜）そのものは何らかの物理的な影響は受けず、したがって状態変化は生じない。

さらに＜働きかけ＞の程度が低い事例（構文的意味 というカテゴリーにおける周辺事例）としては、「人待ち」が挙げられる。この語の意味は概略、＜ある人が、その人の元に来るはずである別の人がある場に来るのを迎えるべく、その場で時を過ごすこと＞と記述できる。この例において、行為主体（ある人）から対象（別の人）への

¹⁸ なお、＜働きかけ＞の程度差については、Hopper and Thompson(1980)が様々な言語のデータに基づいて、その認定基準を示している。Hopper and Thompson は、「高い他動性」の要因となる意味的性質として、「参加者が2～3つであること」、「行為であること」、「アスペクトが限界的であること」、「瞬間的变化であること」、「行為主体が意志を有すること」、「目的語によって表される存在が全面的に影響を受けること」などの10の性質を提示している。また、これらに対応する形で、「低い他動性」の要因となる意味的性質として、「参加者が1つであること」、「非行為であること」、「アスペクトが非限界的であること」、「非瞬間的变化であること」、「行為主体が意志を有さないこと」、「目的語によって表される存在が影響を受けないこと」などの10の性質を提示している。そして、他動詞文の典型性は前者の10の性質をどれだけ多く持つかに基づいて決定されるものであり、他動詞文というカテゴリーは典型的なメンバーと非典型的なメンバーが存在し、他動詞文と自動詞文の意味的境界はファジーなものであると位置づけている。

働きかけ（「待つ」こと）は、心的な働きかけ（すなわち、ある人が別の人に対して、自身の元に来てほしいと願うという心情）であって、物理的、知覚的な（直接的な）働きかけではない。（なお、「草刈り」や「花見」と異なり、行為の遂行において、行為の対象（「人待ち」における「人」）はその場に存在していない。）

なお、構文的意味 においては、何らかのプロセス¹⁹の時間的な展開を想起しつつ、その一回的な過程を総括的に、モノ²⁰的に捉えている。すなわち、モノ化されたプロセスであると位置づけられる。そして、背景化した時間的な展開を前景化させる用法の代表例として、影山(1993)や伊藤・杉岡(2002)も指摘しているように、「花見をする」や「草刈りをする」のように構文的意味 を抽出できる事例に「をする」を後接させた用法がある。（なお、この用法は、本稿で後述する他の構文的意味の事例においてはみられない用法である。）

最後に、構文的意味 を抽出できる事例はいずれも典型的に何らかの＜行為＞を表すが、「（豊富な）品揃え」、「人使い（が荒い）」、「物持ち（が良い）」のように、形容詞などによって表される何らかの評価の対象となる性質・程度を表す用法として典型的に用いられるケースもみられる。

4.4.2 構文的意味

次に、(2)にグループ （計 35 例）のうちの主な事例を提示する。（なお、35 例のうち、構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは、13 例²¹あった。）

¹⁹ Langacker(1999)では、「プロセス (process)」は、動詞カテゴリーに属する語が共通して備えている抽象的性質であり、時間プロファイルを有し、時間の流れに沿って進展する事態が個別的に走査（順次的走査）される関係であると位置づけられている。

²⁰ Langacker(1999)では、「モノ (thing)」は、名詞カテゴリーに属する語が共通して備えている抽象的性質であり、時間プロファイルを有さず、それだけで独自に想起できる、ある認知領域内のある区域（相互に関連づけられた存在からなるまとまり）であると位置づけられている。（ここでの「区域」とは、ある存在の集合体を概念的に具現化する過程に基づいて、より高次の認知操作のために形成された心理的な統一的存在である。）

²¹ この 13 例とは、「仮名書き、手書き、串刺し、石造り、海苔巻き、網焼き、石焼、串焼き、塩焼き、炭焼き、手焼き、味噌焼き、水割り」である。

- (2) 手洗い・水洗い・手植え・口移し・手押し・手書き・指さし・水攻め・
糊付け・手縫い・カード払い・日干し・手掘り・手巻き・湯剥き・網焼き・
塩焼き・塩茹で・釜茹で

以上の事例のうち、例えば「洋服を手洗いした」という場合の「手洗い」の意味は、本節の注13でも提示したように、＜ある人が、洗濯機を使わずに自身の手を使って洗濯物の汚れを落とすこと＞と記述できる。

また、「カード払い」の意味は、＜ある人が、購入した品物などの代金を、紙幣や硬貨を直接渡すのではなく、クレジットカードを用いて支払うこと＞と記述できる。

その他、(2)に挙げた例を含む35例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : ＜行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞

構文的意味を抽出できる事例においては、ある行為の遂行において何らかの無生物が用いられることになり、その無生物を前項要素の名詞が表している。そして、前項要素によって表される無生物が、後項要素によって表される行為の道具を表すデ格としての役割²²を担っている。

なお、「稲を手植えした。」という場合の「手植え」における「手」や、「網焼きの魚はおいしい。」という場合の「網焼き」における「網」など、前項要素がある行為の遂行を補助する道具を表しているケースが典型事例である。また周辺事例としては、「昨日、塩焼きした鮭を食べた。」という場合の「塩焼き」における「塩」のように、ある行為において用いる無生物が、結果的に、その行為による完成物の一部になる場合も

²² なお、「親鳥が雛に、餌を口移しした。」という例において用いられる「口移し」という語は、「口」を道具として用いているが、親鳥の口から雛の口へと餌が移動しており、この際、「口」は起点的領域としての役割と着点的領域としての役割も担っている。

ある。

さて、構文的意味 を抽出できる事例において、行為主体による働きかけの対象(前述の例でいえば、「手植え」における「稲」や「網焼き」における「魚」)は複合名詞としては言語化されない。この、対象に関する情報は、百科事典的知識²³によって補われるものである。

構文的意味 は、構文的意味 と同様、何らかの行為(プロセス)の時間的な展開を想起しつつ、その一回的な過程を総括的に、モノ的に捉えている。そして、その際に背景化した時間的な展開を前景化させる用法の代表例として、影山(1993)や伊藤・杉岡(2002)も指摘しているように、「塩焼きする」や「手植えする」のように構文的意味 を抽出できる事例に「する」を後接させる用法がある。なお、構文的意味 を抽出できる事例に関しては、「をする」を後接し、複合名詞が「する」という動詞のヲ格としての役割を担っているが、構文的意味 を抽出できる事例に関しては、「を」という助詞を介在させず、複合名詞がサ変動詞の一部として用いられる。(そして、その場合、「稲を手植えする。」「鮭を塩焼きする。」のように、基本的に、行為主体による働きかけの対象となる存在がヲ格として表われる。)なお、この用法は、構文的意味 を抽出できる事例と、後述する構文的意味 を抽出できる事例のみにみられる用法である。

4.4.3 構文的意味

次に、(3)にグループ (計23例)のうちの主な事例を提示する。(なお、23例のうち、構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケースは、6例²⁴みられた。)

- (3) 陸揚げ・水揚げ・田植え・野飼い・蔵出し・船積み・箱詰め・瓶詰め・
油通し・湯通し・島流し・宅飲み・野放し・湯引き・陰干し・沖待ち・

²³ 百科事典的知識の定義については、本稿第2章の2.4節を参照されたい。

²⁴ なお、この6例とは、「裏書き、表書き、壁書き、箱詰め、瓶詰め、地焼き」である。

浜焼き

以上の事例のうち、例えば「田植え」の意味は、＜ある人が、稲を生長させ米を作るために、苗代で育てた稲の苗の根を、手や機械を用いて水田の土の中に埋めること＞と記述できる。

また、特に若い世代における使用頻度の高い複合名詞である「宅飲み²⁵」の意味は、＜ある人が、友人や同僚と共に、バーや居酒屋などの飲食店ではなく自宅で、自分たちが持ち寄った酒を飲み、食べ物を食べて、楽しむこと＞と記述できる。

その他、(3)に挙げた例を含む 23 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述することができる。

構文的意味 : ＜行為主体である人間が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞

構文的意味 を抽出できる事例のうち、「野飼い」における「野」や、「陰干し」における「陰」などは、前項要素によって表される場所が、ある行為を行う際の（行為の対象や行為主体が存在する）場所である。これらの事例においては、前項要素によって表される場所が、後項要素によって表される行為のデ格としての役割を担っている。

その他、「蔵出し」のように、前項要素によって表される場所が、後項要素によって表される行為の起点的領域を表すカラ格としての役割を担っているケースもみられる。

また、「陸揚げ」のように、前項要素によって表される場所が、後項要素によって表される行為の着点的領域を表すニ格としての役割を担っているケースもみられる。

さて、構文的意味 を抽出できる事例においても構文的意味 の場合と同様、行為主体による働きかけの対象（「田植え」における「稲の苗」や、「蔵出し」における「蔵から引き出す貨物や酒など」）は複合名詞としては言語化されない。この、対象に関する

²⁵ 「家飲み」という複合名詞が用いられることもある。

る情報は、百科事典的知識 によって補われるものである。

また構文的意味 は、構文的意味 や と同様、何らかの行為（プロセス）の時間的な展開を想起しつつ、その一回的な過程をモノ的に捉えており、そのモノとしての意味がプロファイルであり行為の意味が背景化されベースにある。そして、背景化した時間的な展開を前景化させる用法の代表例として、影山(1993)や伊藤・杉岡(2002)も指摘しているように、「水揚げする」や「湯引きする」のように構文的意味 を抽出できる事例に「する」を後接させる用法がある。なお、前述したように、この用法は、構文的意味 を抽出できる事例と構文的意味 を抽出できる事例のみにみられる用法である。

4.4.4 構文的意味

次に、(4)にグループ （計 24 例）のうちの主な事例を提示する。

- (4) 親思い・汗かき・男嫌い・女嫌い・外嫌い・薬嫌い・人間嫌い・男殺し・
女殺し・物知り・男好き・女好き・子供好き・酒好き・風呂好き・
子供だまし・嘘つき・親泣かせ・（大）酒飲み・金持ち・癩癩持ち

以上の事例のうち、例えば「男嫌い²⁶」の意味は、＜ある女性の、男性に接することを快く思わないという性質＞と記述できる。

また、「嘘つき」の意味は、＜ある人の、いつも真実ではないことばかり言うという性質＞と記述できる。

その他、(4)に挙げた例を含む 24 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を

²⁶ なお、後項要素「嫌い」及び「好き」に関して、本節ではそれぞれ「嫌う」及び「好く」という動詞の連用形として位置づけている。但し、これらは、それぞれ名詞（「嫌いだ」及び「好きだ」という形容動詞の語幹となる形容名詞）として位置づけることも可能である。したがって、「嫌い」及び「好き」を後項要素とする一連の複合名詞は、[名詞+他動詞連用形]型複合名詞と[名詞+名詞]型複合名詞との中間的な事例であると位置づけることができる。[名詞+他動詞連用形]型複合名詞と[名詞+名詞]型複合名詞は異なる構文であり、（両者によって構成される）構文間ネットワークの検討については今後の課題とする。

以下のように記述することができる。

構文的意味 : <前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人間的特徴・性質>

構文的意味 から においては、表される行為が一定時間の経過を伴うものであるのに対し、構文的意味 を抽出できる事例は、<永続的>という意味特徴を有していて、対象への<働きかけ>に伴う時間幅が拡大している。

また、構文的意味 を抽出できる事例の後項要素は基本的には、「好く」、「嫌う」、「(癩癪を)持つ」のようにいわゆる状態動詞である。そして、それらの状態動詞によって表されるような、ある人間の何らかの状態が永続的に続く場合に認められるその人間の特徴や性質が概念化され、言語化されているのが構文的意味 を抽出できる複合名詞群であるといえる。

なお、構文的意味 も構文的意味 と同様、前項要素によって表される存在は、後項要素によって表される行為主体による働きかけの対象を表すヲ格としての役割を担っている。

ところで、構文的意味 を抽出できる事例は、「親思いの息子」、「薬嫌いな人」、「父は大酒飲みだ」のように、助詞の「の」、「な」²⁷、「だ」を後接し、ある人の特徴・性質を描写する修飾機能²⁸としての用法が典型的である。

²⁷ 但し、助詞「の」や「だ」が後接するケースはほぼ全ての事例において極めて容認度が高いが、「な」が後接するケースは、現代日本語において若い世代を中心にその使用が比較的多くみられるようになってきているものの、「の」に比べると容認度がやや下がる。

²⁸ なお、本研究では文内機能である「指示機能」と「述定機能」と「修飾機能」の定義は、Croft(1991: 51-53)に従う。すなわち、指示機能は伝達の主題に聞き手の注意を向ける機能であり、名詞は指示機能において最も無標である。述定機能は伝達の主題について語るべき内容を示す機能であり、動詞は述定機能において最も無標である。修飾機能は補助的に指示と叙述を明確にする機能であり、形容詞において最も無標である。

4.4.5 構文的意味

次に、(5)にグループ（計40例）のうちの主な事例を提示する。

- (5) 歌うたい・薬売り・風船売り・羊飼ひ・絵描き・物書き・ビラ配り・
ティッシュ配り・火消し・人殺し・魔法使い・蛇つかい・借金取り・
相撲取り・漆塗り・客引き・笛吹き・チェロ弾き・靴磨き

以上の事例のうち、例えば「絵描き」の意味は、＜絵を描くという、行為主体の職業＞と記述できる。

また、「借金取り」は＜借金の返済を求め、借金をしている人のところに催促に行き強制的に徴収しようとする、行為主体の役割＞と記述できる。

その他、(5)に挙げた例を含む40例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味：＜前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ＞

構文的意味を抽出できる事例において、「絵描き」においての「絵を描くこと」や「相撲取り」においての「相撲を取ること」など、ある活動や役割が日常的に行われるケースが典型的である。但し、「人殺し」のように、たった1度だけ人を殺しただけで「人殺し」と呼ばれるようになる、といった周辺事例も僅かに存在する。

ところで、構文的意味を抽出できる事例には、現代日本語において、その使用頻度が低下してきているものが一定数存在する。例えば、「靴磨き」は、現代の日本においては職業とする人がほぼいなくなったということが使用頻度の低下の原因であると考えられる。また、「火消し」や「歌うたい」などは、極めて類する意味を有する「消防士」や「歌手」（もしくは「シンガー」）などの語の使用頻度が極めて高いということが使用頻度の低下の原因であると考えられる。

構文的意味 を抽出できる事例は、構文的意味 ・ と同様、前項要素によって表される存在は、後項要素によって表される行為主体による働きかけの対象を表すヲ格としての役割を担っている。

また、構文的意味 を抽出できる事例のほとんどは、＜行為主体＞としての人間の職業・社会的立場・社会的位置づけを表しているが、周辺事例として、「ヤドカリ、フンコロガシ」のような人間以外の生物の名づけに用いられている場合も少数ではあるがみられる。

なお、構文的意味 を抽出できる事例は大きく 2 つの用法において用いられる。1 つ目は、「彼の職業は絵描きだ。」「私は、歌うたいを目指している。」のように、＜職業・社会的立場・社会的位置づけ＞という、いわば行為主体の＜属性＞（肩書）を表す用法である。

2 つ目は、「あの家には、絵描きが住んでいる。」「人殺しが近づいてきた。」のように、ある＜職業・社会的立場・社会的位置づけ＞を有する＜行為主体＞そのものを指示する、拡張²⁹用法である。

4.4.6 構文的意味

次に、(6)にグループ （計 29 例）のうちの主な事例を提示する。

- (6) 野菜炒め・大根おろし・宛書き・効能書き・品書き・餡かけ・石組み・
湯冷まし・畳敷き・板張り・梅干し・烏賊焼き・姿焼き・卵焼き・
ホルモン焼き

以上の事例のうち、例えば「野菜炒め」の意味は、＜キャベツやニンジンやピーマ

²⁹ なお、ここでの「拡張」とは、＜ある属性＞から＜ある属性を有する人＞へのメトニミーによる拡張であると位置づけられる。次節で検討するように、構文的意味 は構文的意味 （「男嫌い」「金持ち」のように＜人間の特徴・性質＞を表す意味）からメタファーによって拡張していると考えられる。したがって、＜ある属性＞を表す 1 つ目の用法における意味は構文的意味 により近く、＜ある属性を有する人＞を表す拡張用法における意味は構文的意味 ～ により近い（すなわち、よりモノ的である）と位置づけられる。

ンなどの野菜やキノコを、少量の食用油を敷いたフライパンで加熱し、塩や胡椒などで味を付けた料理>と記述できる。

また、「品書き」の意味は概略、<紙に、(料理などの)品物の名前を書き並べた目録>と記述できる。

その他、(6)に挙げた例を含む 29 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>

構文的意味 を抽出できる事例は、その多くが料理を表すものである。また、料理を表すものも含め、伊藤・杉岡(2002)が指摘するように、これらの事例はいずれも、何らかの作成を表す動詞の連用形が後項要素となっており、この点が構文的意味 の 1 つの特徴であると言える。

なお、構文的意味 を抽出できる事例は、構文的意味 ・ ・ と同様、前項要素によってあらわされる存在は、後項要素によって表される行為主体による働きかけの対象を表すヲ格としての役割を担っている。

4.4.7 構文的意味

次に、(7)にグループ (計 25 例)のうちの主な事例を提示する。

- (7) 油揚げ・味噌炒め・串刺し・紙包み・卵とじ・クリーム煮・水煮・味噌煮・
昆布巻き・卵巻き・海苔巻き・塩焼き・鉄板焼き・鍋焼き・味噌焼き・
水割り

以上の事例のうち、例えば「油揚げ」の意味は、<薄く切った豆腐を、熱した食用油の中に入れるという調理を施した食べ物>と記述できる。

また、「鉄板焼き」の意味は、＜鉄の板の上で、肉や魚介類や野菜を高温で熱して調理した料理＞と記述できる。

その他、(7)に挙げた例を含む 25 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : ＜行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞

構文的意味を抽出できる事例も、構文的意味を抽出できる事例と同様、その多くが料理を表すものである。

また、前項要素によって表される無生物は、後項要素によって表される行為の道具を表すデ格としての役割を担っている。(なお、「卵とじ」における「卵」や「味噌焼き」における「味噌」のように、前項要素によって表される無生物が、行為の結果として完成する産物の一部となる事例も存在する。)

構文的意味を抽出できる事例においては、行為主体である人間による、働きかけの対象である存在(例えば、「油揚げ」における「薄く切った豆腐」や、「鉄板焼き」における「肉や魚介類や野菜」)は複合名詞の構成要素としては言語化されず、これらの情報は百科事典的知識によって補われるものである。

4.4.8 構文的意味

次に、(8)にグループ (計 9 例)を提示する。

(8) 鉢植え・裏書き・表書き・壁書き・缶詰め・腸詰め・箱詰め・瓶詰め・
地焼き

以上の事例のうち、例えば「鉢植え」の意味は、＜鑑賞や栽培を目的として、草木

の根を、植木用の器である鉢の中の土に埋めたもの>と記述できる。

また、「缶詰め」の意味は、<加工した果物や魚介類などの食品を、(長く貯蔵できるように)アルミなどでできた容器に入れたもの>と記述できる。

その他、(8)に挙げた9例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>

構文的意味を抽出できる事例において、前項要素によって表される存在は、後項要素によって表される行為において必要な場所を表す二格としての役割を担っている。

また、構文的意味を抽出できる事例においては、行為主体による働きかけの対象(例えば、「鉢植え」における「草木」や、「缶詰め」における「加工した果物や魚介類などの食品」)は複合名詞の構成要素としては言語化されず、これらの情報は百科事典的知識によって補われるものである。

なお、本研究においては、収集した構文的意味の事例は少数であったが、同様の構文的意味を抽出できる事例として、本研究において考察対象としなかった固有名詞(地名)を前項要素に持つケース、すなわち「萩焼」や「常滑焼」のように、概略<前項要素によって表されるある土地において算出される陶器>を表すような事例は数多くみられる。

4.4.9 構文的意味

次に、(9)にグループ(計67例)のうちの主な事例を提示する。

- (9) 屑入れ・名刺入れ・郵便受け・腰掛・首飾り・髪飾り・爪切り・鉛筆削り・
水差し・蠅たたき・傘立て・鍋掴み・毛抜き・栓抜き・湯呑み・洗濯挟み・

(お)手拭き・姿見・ねじ回し・泥除け

以上の事例のうち、例えば「郵便受け」の意味は、＜郵便物や新聞などを受け取るために用いる、主に家の入口（付近）に設置してある箱＞と記述できる。

また、「髪飾り」の意味は、＜女性が、髪形を美しく整えるために用いる、櫛やかんざしなどの装飾品＞と記述できる。

その他、(9)に挙げた例を含む 67 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具>

構文的意味を抽出できる事例は、構文的意味・・・と同様、前項要素によってあらわされる存在は、後項要素によって表される行為主体による働きかけの対象を表すヲ格としての役割を担っている。

4.4.10 構文的意味

次に、(10)にグループ（計 10 例）を提示する。

(10) 襟当て・肩当て・腰当て・すね当て・耳当て・胸当て・ひざ掛け・
靴敷き・鍋敷き・襟巻き

以上の事例のうち、例えば「耳当て」の意味は、＜耳を、露出する部分がないように覆うことによって寒さを防ぐための、布なのでできた製品＞と記述することができる。

また、「鍋敷き」の意味は、＜熱した鍋をテーブルなどの上に置く際に、そのテーブルなどが熱によって損傷しないようにするための、鍋の下に置く、木などで作られた

製品>と記述することができる。

その他、(10)に挙げた10例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のよう
に記述することができる。

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す位置に接するよう
にする過程を含む、ある存在(道具)への働きかけとしてのある
行為のために用いる、その存在(道具)>

構文的意味を抽出できる事例において、前項要素によって表される存在は、後項
要素によって表される行為の遂行に必要な位置を表す二格としての役割を担っている。
(なお、その位置のほとんどは、身体部位である。)

また、構文的意味を抽出できる複合名詞においては、行為主体の働きかけの対象
となる存在がすなわち、それらの複合名詞が全体として表す<道具>である。

4.4.11 構文的意味

最後に、(11)にグループ(計8例)を提示する。

(11) (お)手洗い・物置き・馬繋ぎ・ごみ溜め・肥溜め・水溜め・物干し・
車寄せ

以上の事例のうち、例えば「物置き」の意味は、<人間が、諸々の道具や品物を入
れ、その場に留めて保管するために用いる小屋や部屋>と記述できる。

また、「車寄せ」の意味は、<ホテルや庁舎などの建物の玄関前において、自動車を
近づけ、その建物を利用する乗客がその自動車に乗降するという目的で設置してある、
屋根付きの場所>と記述できる。

その他、(11)に挙げた8例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のよう
に記述することができる。

構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す存在への働きかけとしてのある行為が日常的に行われる場所 >

構文的意味 を抽出できる事例は、構文的意味 ・ ・ ・ ・ と同様、前項要素によってあらわされる存在は、後項要素によって表される行為主体による働きかけの対象を表すヲ格としての役割を担っている。

なお、4.5.2 節で詳述するように、構文的意味 を抽出できる事例は 8 例と少なく、< 道具 > を表す構文的意味 を抽出できる事例の周辺事例であるとも考えることもできる。(但し、構文的意味 を抽出できる事例はいずれも、「(お)手洗いに行った。」や「車寄せに車を止めた。」のように、場所を表す二格としての役割を担う要素として文内で用いられる用法がみられるが、構文的意味 を抽出できる事例に関してはこのような用法はみられない。)

4.5 [普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成に関与する比喻

[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成において、比喻が関与していると考えられ、またその関与には少なくとも 2 つの異なるレベルが存在すると考えられる。

本節ではこの 2 つのレベルの比喻の関与について、具体的に検討する。なお、本研究において 3 種の比喻、すなわちメタファー (隠喩) ・ シネクドキー (提喩) ・ メトニミー (換喩) の定義は、本稿第 2 章で既に提示した、初山(2002)に従う。

また、メタファーによる拡張とスキーマの抽出との関連性についても、本稿第 2 章で既に提示した初山(2001: 36-44)における考え方に従う。

4.5.1 個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻

[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成に関与している 2 つのレベルの比喻のうち、まず 1 つ目のレベルとして、本節では個々の複合名詞の意味形成の動機づ

けとしての比喩について検討する。

影山(1982: 四節)では、語形成ないし語彙化に全般的にみられる特性として、言語の伝達の経済性に基つき豊かな意味内容を簡潔かつ的確に表現するという点を挙げている。

本研究では、この特性が比喩に基づくものである、と位置づける。すなわち、前節で提示した構文的意味の違いを問わず、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとして比喩が関与していると考えられる。

この比喩の関与には、さらに少なくとも2つの下位のケースが存在していると考えられる。

1つ目に、＜対象＞という意味特徴に、シネクドキーとメトニミーが関与しているケースが相当数存在する。

一例として、「花見」という語の「花」については、「花」という類で「桜」という種を表す、というシネクドキーが関与していると考えられる。

また、「黑板消し」という語の「黑板」については、「黑板」で「黑板の上に書かれた字」を表すという、空間上の隣接性に基づくメトニミーが関与していると考えられる。

なお、これらは、構成要素レベルにおける比喩の関与であると位置づけられる。

2つ目に、＜行為＞という意味特徴に、メトニミーが関与しているケースが相当数存在する。

一例として、「花見」という語において、＜桜(花)を見ること＞という行為は、＜人々が、桜の木の下に集まって、桜の花を見ながら飲食をしたり語り合ったり歌を歌ったりして楽しむこと＞という一連の行為の中の一部である。

また、「(お)手洗いを済ませる」という場合の「(お)手洗い」という語において、＜手を洗うこと＞は＜用便＞という行為の後に行われる行為である。

いずれの例においても、時間的な隣接性に基づくメトニミーが関与していると考えられる。

なお、これらは、複合語レベルにおける比喩の関与であると位置づけられる。

以上、本節では2つのレベルの比喩の関与のうちの1つ目として、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての(2つのケースの)比喩について検討した。

4.5.2 構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻

次に本節では、4.5.1 節で提示した比喻とは異なるレベルの比喻の関与についてみていく。すなわち、4.4 節で提示した 11 の構文的意味、すなわち 11 の節点を含む構文的多義ネットワークにおいて、それらの複数の節点を結び付けている、構文的意味拡張のリンクとしての比喻の関与である。

なお本研究では、既に第2章の 2.3 節でも述べたように、柏野・本多(1998)、初山(2001)及び瀬戸(2007)を踏まえ、意味拡張の動機づけとしてのメタファー・シネクドキー・メトニミーという3種の比喻に基づく意味ネットワークが、言語表現の多義の実相を適切かつ詳細に捉えられるモデルであるという考え方を複合語レベルの構文的な多義性に適用し、以下の分析を進める。なお、以下で検討するメトニミーに基づく拡張に関しては、いずれも、〈行為〉に関するフレーム³⁰内での概念的関連性に基づく拡張であると包括的に位置づけることができる。

ここで、構文的多義ネットワークにおける拡張のリンクを提示する前に、4.4 節で認定した 11 の構文的意味を再掲しておく。

構文的意味 : 〈行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと〉

(例: 草刈り、花見)

構文的意味 : 〈行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと〉

(例: 水洗い、網焼き)

³⁰ フレームの定義に関しては、本稿第2章を参照されたい。

構文的意味 : <行為主体である人間が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと>

（例：田植え、蔵出し）

構文的意味 : <前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人間的特徴・性質>

（例：男嫌い、嘘つき）

構文的意味 : <前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ>

（例：絵描き、借金取り）

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>

（例：野菜炒め、品書き）

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>

（例：油揚げ、鉄板焼き）

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>

(例:鉢植え、缶詰め)

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具>

(例:郵便受け、髪飾り)

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す位置に接するようにする過程を含む、ある存在(道具)への働きかけとしてのある行為のために用いる、その存在(道具)>

(例:耳当て、鍋敷き)

構文的意味 : <行為主体である人間による、前項要素が表す存在への働きかけとしてのある行為が日常的に行われる場所>

(例:物置き、車寄せ)

さて、以下、構文的多義ネットワークの形成について検討していくが、その前提として、既に4.4.1節でも述べたように、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと>)がネットワークにおける拡張の起点となる、中心義であると位置づけることができる。

構文的意味 を中心義であると位置づける根拠として、既に4.4.1節でも述べた一般性の高さ(すなわち、11の構文的意味の中で、構文的意味 を抽出できる事例の数が多いということ)がその1つとして挙げられる。

また、名詞化の程度という観点からも、構文的意味 を中心義であると位置づける

ことができる。

上原(2010: 24)は、「名詞化」を「本来名詞でないものが名詞(のようなもの)に変わる」と規定している³¹。また、名詞化において、本来そうでないものが名詞的な性質、名詞らしさを帯びることになり、この名詞的な性質、名詞らしさを「名詞性」と呼んでいる。

そして、上原(2010: 30-31)では、Langacker(1987,1990)を踏まえつつ、名詞化の下位分類として、「捉え名詞化」と「焦点名詞化」を提示している。

「捉え名詞化」とは、英語における employ (雇用する) から employment (雇用) という名詞への名詞化のように、「プロセス概念」を基準としてそれを「もの概念」として捉え直す名詞化であるとしている。そして、この場合、employ のようにある出来事が動詞として捉えられている場合は、プロセス概念として関係性と時間性³²がそのプロフィールとなり、employment のように名詞として捉えられている場合は、もの概念として、関係性とその時間的展開そのものはベースに回り、その全体としてのひとまとまりがプロフィールとなる、ということである。

一方、「焦点名詞化」とは、英語における employ (雇用する) から employee (雇用者) への名詞化をはじめ、動作主や被動作主など、元々の概念である動作が背景化する中でその部分である参加者が焦点化してプロフィールとなるような名詞化であるとしている。

この2つの名詞化について、上原(2010: 31)は、焦点名詞化に関しては、元のプロセス概念からの意味変化の度合いが大きく、関係性と時間性の背景化および全体から部分やその関与物への焦点化などの認知作用を必要とする、としている。これに対して、捉え名詞化に関しては、全体は全体そのままで背景化するだけである、すなわち、プロセス概念をモノであるかのように捉えるだけという最小限の意味変化をもたらすも

³¹ その例として、上原は、日本語に関しては「優しい」に対する「優しさ」を、英語に関しては kind に対する kindness を挙げている。

³² 上原(2010)に基づく、「関係性(概念的依存性)」は他の概念に依存する性質である。すなわち、「食べる」「叩く」「飛ぶ」など、動詞において、それらの概念を想起するには、その動作主体や動作の対象をはじめとする、動詞の指示する行為や出来事における広義の参加者が前提として想起されなければならない、その点で動詞はその概念成立をその参加者の概念に依存(概念的依存)しており、動詞が「関係概念」であるというのは、それらの参加者間の関係性をその概念内容として指示するからであるということである。また、「時間性」はあるプロセスにおける時間軸上の展開である。

のである、としている。

さて、本章で考察対象としている複合名詞は、他動詞連用形を後項要素として有していることから、名詞化の1つの事例であると位置づけることができる。そして、構文的意味を抽出できる事例は、上原の分類に従えば、「捉え名詞化」が関与している事例であると位置づけられる。すなわち、名詞化という方向性に基けば、構文的意味は最も意味変化の度合いが低く、構文的意味を起点とした、本節で以下検討していく構文的意味拡張によって名詞化の程度が高まると考えられる。このことも、構文的意味を中心義であると位置づける上での1つの根拠であると言える。

以上を踏まえ、構文的意味を中心義であると認定した上で、以下、他の構文的意味への拡張について検討していく。

まず、「水洗い」などから抽出できる構文的意味（＜行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞）は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味（＜行為主体が、何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞）からシネクドキーによって拡張していると考えられる。

すなわち、構文的意味が＜行為＞一般という類（上位カテゴリー）を表すのに対して、構文的意味は＜前項要素が表す無生物を用いて行う行為＞という種（下位カテゴリー）を表している。

なお、構文的意味に関しては、行為の対象が複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この情報が百科事典的知識によって補われなければならない、という意味的な制約があり、このことも構文的意味が構文的意味の拡張先の意味であると位置づける上での1つの根拠であると言える。

次に、「田植え」などから抽出できる構文的意味（＜行為主体である人間が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞）は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味（＜行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞）からシネクドキーによって拡張していると考え

えられる。

すなわち、構文的意味 は<行為>一般という類（上位カテゴリー）を表すのに対し、構文的意味 は<前項要素が表す場所を必要とする行為>という種（下位カテゴリー）を表している。

なお、構文的意味 に関しては、行為の対象が複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この情報が百科事典的知識によって補われなければならない、という意味的な制約があり、このことも構文的意味 が構文的意味 の拡張先の意味であると位置づける上での1つの根拠であると言える。

次に、「男嫌い」などから抽出できる構文的意味 （<前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人間的特徴・性質>）は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 （<行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと>）からメトニミーによって拡張していると考えられる。

すなわち、ここで関与しているのは、<行為>と<行為主体の特徴・性質>との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

次に、「絵描き」などから抽出できる構文的意味 （<前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ>）は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 （<行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと>）からメトニミーによって拡張していると考えられる。

すなわち、ここで関与しているのは、<行為>と<行為主体の職業・社会的立場>との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

また、「絵描き」などから抽出できる構文的意味 （<前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ>）の意味形成の動機づけとして、構文的意味 からのメトニミーのみならず、「男嫌い」などから抽出できる構文的意味 （<前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人

間の特徴・性質>)からのメタファーによる拡張も考えられる。

すなわち、この2つの意味からは、共通性として、<対象への働きかけとしてのある事態の継続によって判断される、行為主体の属性>というスキーマを抽出することができる。

なお、構文的意味は前述の通り、基本的には助詞の「の」あるいは「な」を後接して主体の人間の特徴・性質を表す用法において典型的に用いられるが、「金持ち」、「物知り」、「(大)酒飲み」など一部の事例のみに、行為主体を指示する拡張用法がみられる。(例えば、「私は金持ちと友達です。」や「物知りがやってきた。」のような用法である。)これに対して、構文的意味においては前述の通り、全ての事例において、行為主体を指示する用法がみられる。すなわち、構文的意味における「金持ち」、「物知り」などの拡張用法は、構文的意味から構文的意味への拡張の中間段階の用法であると位置づけることが可能であろう³³。

次に、「野菜炒め」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>)は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと>)からメトニミーによって拡張していると考えられる。

すなわち、ここで関与しているのは、<行為>と<行為の結果、完成する産物>との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

次に、「油揚げ」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>)は、「野菜炒め」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物>)からシネクドキーによって拡張していると考えられる。

すなわち、構文的意味は<行為の結果、完成する産物>一般という類を表すのに対し、構文的意味は<何らかの無生物を用いて行う行為の結果、完成する産物>と

³³ なお、前述の名詞化の観点でいえば、構文的意味を抽出できる事例は構文的意味を抽出できる事例に比べて、より焦点名詞化が進んでいると位置づけることができる。

いう種を表している。(なお、構文的意味 に関しては、行為の対象が複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この情報が百科事典的知識によって補われなければならない、という意味的な制約があり、このことも構文的意味 が構文的意味 の拡張先の意味であると位置づける上での1つの根拠であると言える。)

また、「油揚げ」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞)の意味形成の動機づけとして、構文的意味 からのシネクドキーによる拡張のみならず、「水洗い」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと＞)からのメトニミーによる拡張も考えられる。

すなわち、ここで関与しているのは、＜ある無生物(道具)を用いて行う行為＞と＜ある無生物(道具)を用いて行う行為の結果、完成する産物＞との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

次に、「鉢植え」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞)は、「野菜炒め」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞)からシネクドキーによって拡張していると考えることができる。

すなわち、構文的意味 は＜行為の結果、完成する産物＞一般という類を表すのに対し、構文的意味 は＜何らかの場所を必要とする行為の結果、完成する産物＞という種を表している。(なお、構文的意味 に関しては、行為の対象が複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この情報が百科事典的知識によって補われなければならない、という意味的な制約があり、このことも構文的意味 が構文的意味 の拡張先の意味であると位置づける上での1つの根拠であると言える。)

また、「鉢植え」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞)の意味形成の動機づけとして、構文的意味 からのシネクドキーによる拡張のみならず、「田植え」などから抽出できる構文的意味 (＜行為主体である

人間が、何らかの目的を実現するためにある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、継続もしくは連続して行うこと>)からのメトニミーによる拡張も考えることができる。

すなわち、ここで関与しているのは、<ある場所を必要とする行為>と<ある場所を必要とする行為の結果、完成する産物>との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

次に、「髪飾り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具>)は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと>)から、メトニミーによって拡張していると考えられる。

すなわち、ここで関与しているのは、<行為>と<行為において必要な道具>との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

次に、「耳当て」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表す位置に接するようにする過程を含む、ある存在(道具)への働きかけとしてのある行為のために用いる、その存在(道具)>)は、「髪飾り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具>)から、シネクドキーによって拡張していると考えることができる。

すなわち、構文的意味 は<道具>一般という類を表すのに対し、構文的意味 は<ある物理的領域に接して用いられる道具>という種を表している。(なお、構文的意味 に関しては、行為の対象が複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この情報が百科事典的知識によって補われなければならない、という意味的な制約があり、このことも構文的意味 が構文的意味 の拡張先の意味であると位置づける上で1つの根拠であると言える。)

次に、「車寄せ」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体である人間による、前項要素が表す存在への働きかけとしてのある行為が日常的に行われる場所>)は、「草刈り」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、主に何らかの目的を

現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞）から、メトニミーによって拡張していると考えることができる。

すなわち、ここで関与しているのは、＜行為＞と＜行為の行われる場所＞との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えることができる。

但し、前述のように、構文的意味 を抽出できる事例の数も極めて少ない。また、Kövecses and Radden(1998)及び瀬戸(2007)ではそれぞれ、英語と日本語を主な考察対象として、＜行為＞を拡張の起点とする汎用性の高いメトニミーの拡張パターンが網羅的に示されているが、この中にも、＜行為＞から＜場所＞へのメトニミーによる拡張のケースは存在しない。

以上の点を踏まえ、構文的意味 の意味形成の動機づけとして、構文的意味 からメトニミーによる拡張だけではなく、「髪飾り」などから抽出できる構文的意味 （＜行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為を使用目的とする、道具＞）からのシネクドキーによる拡張も認めることが妥当ではないかと考えられる。

すなわち、構文的意味 を抽出できる事例は、「鉛筆削り」、「爪切り」など全て＜道具＞であるが、構文的意味 を抽出できる「車寄せ」、「（お）手洗い」なども、＜道具＞の一種、もしくは、＜道具＞カテゴリーの周辺的事例として位置づけることも可能である。つまり、行為主体による何らかの行為の遂行を補助する上で必要な＜道具＞が、（その内部に人間が存在できる程の面積か、人間よりも大きい容積、などといった）一定以上の顕著な空間的広がりを持つ場合に、＜場所＞として解釈されるのが、構文的意味 を抽出できる事例であると考えることができる。

以上、本節では[普通名詞+他動詞連用形]型複合名詞における、構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻について検討した。

最後に、以下、図1に構文的多義ネットワークを図示する。なお、図1において、四角で囲んだ m は構文的意味（ネットワークにおける節点）、二重線の矢印はメトニミーリンク、実線の矢印はシネクドキーリンク、破線の矢印はメタファーリンクを示している。また、3つの楕円は、次節で検討するカテゴリー 、カテゴリー 、カテゴリー を示している。

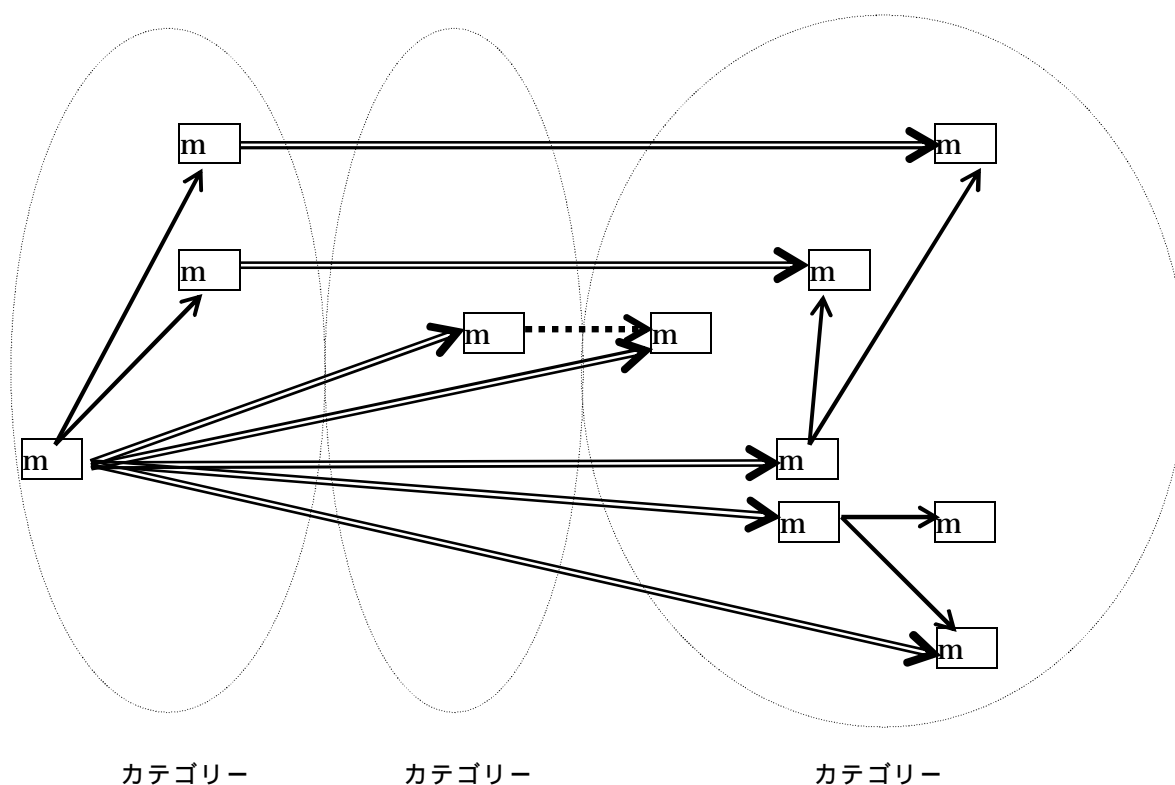


図1：構文的多義ネットワーク

4.6 構文的多義ネットワークにおけるカテゴリーの連続性

本節では、前節で提示した構文的多義ネットワークにおける、3つの下位カテゴリーの意味的性質の連続性について考察する。

その前提として、Croft(1991)の品詞分類に対する認知的アプローチ、及びそれを踏まえた上原(2007)における現代日本語の品詞カテゴリーに対する認知的アプローチについて確認しておく。

Croft(1991: 51-53)は、汎言語的な品詞分類の基準と動機づけを提案する上で、言語における3つの文内機能を提示している。1つ目は指示機能(reference)であり、これは伝達の主題に聞き手の注意を向ける機能である。2つ目は述定機能(predication)であり、これは主題について語るべき内容を示す機能である。3つ目は、修飾機能

(modification)であり、これは補助的に、指示と叙述をより明確にする機能である。

Croft はどのような言語にも主要品詞の名詞と動詞と形容詞を認定できる方法があるとしている。それは、以下のような方法である。

まず、ある言語において語根³⁴が存在論的カテゴリーである「物体」(objects)を意味するものが、指示機能にあるときに最も無標となり、その形式をその言語の「名詞」のプロトタイプとして認定する。

次に、語根が存在論的カテゴリーである「行為」(actions)を意味するものが、文内機能の述定機能にあるときに最も無標となり、その形式を「動詞」のプロトタイプとして認定する。

最後に、語根が存在論的カテゴリーである「属性」(properties)を意味するものが、文内機能の修飾機能にあるときに最も無標となり、その形式を「形容詞」のプロトタイプとして認定する。

さて、このような方法を踏まえ、上原(2007: 110-118)では、日本語における品詞分類(すなわち、語彙の形態的特徴に基づくカテゴリー化の様相)について認知言語学の観点から考察している。上原は、まず語根の拘束性という基準に基づき、日本語の主要品詞である名詞・サ変名詞³⁵・形容名詞³⁶・形容詞・動詞に関して、以下の図2に示すような形態上の特徴³⁷を提示している。

³⁴ なお、上原(2007)は「語根」を「語彙をその構成形態素に分割した場合の、その語彙意味の中核をなす形態素」と規定している。

³⁵ 上原(2007)は「サ変名詞」を「『研究』『発表』など(サ変動詞の)『する』を伴って動詞化する語彙カテゴリー」と規定している。

³⁶ 上原(2007)は「形容名詞」を「『きれい』『静か』など名詞を修飾するのに『な』を伴う語彙カテゴリー」と規定している。

³⁷ なお、形態素がローマ字表記されているが、上原(2007: 110)によれば、これは五段動詞の活用語尾(-u)のようなカナでは表記できないものを表すため、そして活用語尾(形容詞の-i)と別語(形容名詞につくコピュラ da)というような語根の拘束性の差に基づく区別をハイフン(-)によって表すためである。

	指示機能	修飾機能	述定機能
名詞	[...]	[...]no	[...]da
サ変名詞	[...]	[...]no/suru	[...]da/suru
形容名詞	[...]-sa	[...]na	[...]da
形容詞	[...]-sa	[...]-i	[...]-i
動詞	[...]-(<i>r</i>)u koto	[...]-(<i>r</i>)u	[...]-(<i>r</i>)u

図2：上原(2007: 111)における日本語主要品詞の形態上の特徴

図2で提示した形態上の特徴を踏まえ、上原(2007: 112-114)では日本語の形態上の特徴について大きく3つの主張をしている。

1点目は、日本語においてはどの語彙形態のタイプも、修飾機能にある場合と述定機能にある場合とでは形態上の有標性の点からは差がない(形は違うが形態素の数は同じ)という点である。

2点目は、日本語では、名詞・動詞に形容詞を加えた3主要品詞の構造を持つ英語などの言語とは異なり、形容詞類(形容詞・形容名詞)は形態的に1つの独立した主要品詞としての位置づけはなく、むしろ他の主要品詞の下位分類に位置づけられるという点である。すなわち、本節の図2で提示した特徴に示されるように、下2つの形態のタイプ(上原は活用詞と呼んでいる)が形態的有標性の点で近似しており、上3つのタイプ(上原は非活用詞と呼んでいる)が同様に近似していることから、日本語の語彙は形態的に2大品詞に分類されると特徴づけることができる、としている。そして、形容詞は動詞とともに、また形容名詞はサ変名詞とともに、形態上それぞれ2大品詞「活用詞」と「非活用詞」の下位カテゴリーであると考えることができる、としている。

3点目は、日本語の品詞構造は述定機能と指示機能の2つの文内機能によって動機づけられている、という点である。この点に関して、述定機能においては活用詞の方が非活用詞よりも形態的に無標であり、逆に指示機能においてはより有標となっている、としている。また、指示機能について、名詞とサ変名詞が最も無標であり、続いて形容名詞と形容詞、そして動詞が最も有標となっている、としている。また、活用

詞の2つの語彙カテゴリーについてもさらに詳しく述定機能に関して活用の形（仮定形など）を検討し、動詞 *tabe-reba* に対して形容詞 *huru-kereba* になるなど、動詞が形容詞に比べてさらに無標である、としている。すなわち、日本語では2大品詞（活用詞・非活用詞）がそれぞれ2つの主要文内機能において無標となりながらも、その5つの下位カテゴリーが2つの主要文内機能に対して最も無標、より無標、最も有標というように、有標性の度合いによって順番に並ぶことになる、としている。

以上の分析を踏まえ、上原は日本語の品詞構造における、主要品詞の連続的な配置（順番）提案している。その提案の概要を以下、図3に提示する。

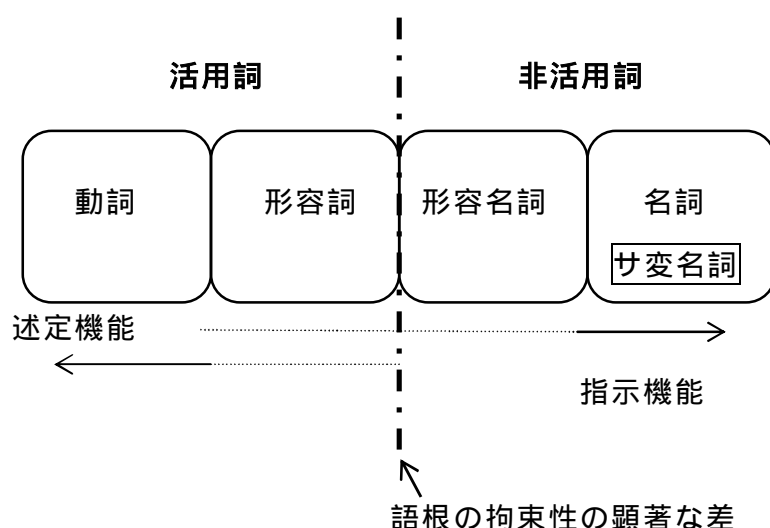


図3：上原(2007: 114)における有標性から見た日本語の主要品詞構造

さて、本章で考察対象としてきた[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞は、図3に提示したような品詞構造において区分すれば、「名詞」という品詞カテゴリーに属することになる。

「名詞」という品詞カテゴリーに属する[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞は、本章の図1において提示したように、その構文的多義ネットワークは1つの放射状カテゴリーであるが、その中に、意味的性質に基づく、少なくとも3つの下位カテゴリーが存在していると考えられる。そして、この意味的性質の違いが、図3に示したような品詞構造の違いと並行的であると考えられる。

既に図1において楕円で示した、構文的多義ネットワークにおける3つの下位カテ

ゴリーを、カテゴリー（構文的意味 ～ によって構成されるカテゴリー）、カテゴリー（構文的意味 ～ によって構成されるカテゴリー）、カテゴリー（構文的意味 ～ によって構成されるカテゴリー）と呼ぶこととする。以下、表1にそれぞれのカテゴリーに属する構文的意味を再掲する。

カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・構文的意味：＜行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞（例：草刈り） ・構文的意味：＜行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞（例：水洗い） ・構文的意味：＜行為主体である人間が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、一定時間（一定期間）継続もしくは連続して行うこと＞（例：田植え）
カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・構文的意味：＜前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人間的特徴・性質＞（例：金持ち）
カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・構文的意味：＜前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ＞（例：絵描き） ・構文的意味：＜行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞（例：野菜炒め） ・構文的意味：＜行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞（例：油揚げ） ・構文的意味：＜行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物＞（例：鉢植え） ・構文的意味：＜行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具＞（例：郵便受け） ・構文的意味：＜行為主体である人間による、前項要素が表す位置に接するようにする過程を含む、ある存在（道具）への働きかけとしてのある行為のために用いる、その存在（道具）

	<p>> (例：耳当て)</p> <p>・構文的意味：<行為主体である人間による、前項要素が表す存在への働きかけとしてのある行為が日常的に行われる場所> (例：車寄せ)</p>
--	---

表1：意味的性質に基づく3つのカテゴリー

さて、カテゴリー は、前節でみたように、ある行為の時間的な展開を想起しつつ、その1回過程を総括的にモノ³⁸的に捉えており、そのモノとしてのひとまとまりの意味がプロファイルであり、プロセスが背景化されベースにあると考えられる。

そして、カテゴリー からカテゴリー へ、さらにはカテゴリー へと進むに従って、モノ概念がより前景化し、プロセス概念がより背景化する³⁹。

さて、カテゴリー から は、いずれも Croft(1991)における objects の意味クラスに該当するが、その中でも、意味的性質の違いがみられる。

まずカテゴリー は、前述の Croft(1991)における actions の意味クラスに最も近いカテゴリーである。すなわち、このカテゴリーに属する構文的意味はいずれも、プロセス概念における時間的展開を背景化している。つまり、典型的なモノを表す構文的意味ではなく、コトを表す構文的意味によって構成されるカテゴリーである。

そして、前節でみたように、上原(2010)における「捉え名詞化」が関与しているケースであり、名詞化の程度が最も低い。すなわち、カテゴリー に属する複合名詞はいずれも、カテゴリー とカテゴリー に属する複合名詞に比べて、意味的に最も動詞に近い複合名詞であると言える。

次に、カテゴリー は、前述の Croft(1991)における properties の意味クラスに最も近いカテゴリーである。すなわち、このカテゴリーに属する構文的意味はいずれも、持続的に安定し、段階性がある。

また、4.4節でみたように、カテゴリー に属する複合名詞はいずれも、助詞の「の」もしくは(形容名詞において典型的に後接する)「な」を後接し、ある人の人間的性質・

³⁸ モノとプロセスの位置づけは注19及び20を参照されたい。

³⁹ なお、このことに関連して、伊藤・杉岡(2002)では、前項要素が目的語としての名詞であり後項要素が他動詞連用形である複合名詞全てを[-V]という品詞素性を持つと位置づけているが、この位置づけでは、<行為>の意味特徴の関与の段階性を適切に記述することはできない。

特徴を描写する修飾機能において用いられる。(特に、「な」を後接する用法は、カテゴリー とカテゴリー にはみられない。)

従って、カテゴリー に属する個々の複合名詞は、意味的に最も形容名詞に近い複合名詞であると言える。

次に、カテゴリー は、前述の Croft(1991)における objects の意味クラスに最も近いカテゴリーである。すなわち、このカテゴリーに属する構文的意味はいずれも、持続的に安定し、段階性がない。

また、前節で検討したように、カテゴリー に属する構文的意味はそのほとんどが、カテゴリー に属する<行為>を表す構文的意味を起点として、<行為>に関するフレーム内での概念的関連性に基づき、メトニミーによって<行為>の何らかの参与者へと拡張している。すなわち、カテゴリー に属する構文的意味はいずれも、上原(2010)における「焦点名詞化」が関与しているケースであり、名詞化の程度が最も高い。つまり、カテゴリー に属する複合名詞はいずれも、カテゴリー とカテゴリー に属する複合名詞に比べて、最も名詞性が高いと言える。

従って、カテゴリー に属する個々の複合名詞は、(3つのカテゴリーの中で)意味的に最も名詞らしい複合名詞であると言える。

以上の検討を踏まえると、本章における考察対象である複合名詞における構文的多義ネットワークは、動詞的な複合名詞としてのカテゴリー、形容名詞的な複合名詞としてのカテゴリー、最も名詞らしい複合名詞としてのカテゴリー という、カテゴリー間の連続性を有する構造として位置づけられる。そして、このような、複合名詞における動詞的、形容名詞的、(最も)名詞的、という連続的な位置づけ(ネットワーク上の配置)は、図3で示したような、日本語の品詞構造における動詞、形容詞、形容名詞、名詞という連続的位置づけと、(複合語レベルと品詞構造レベルというレベルの違いはありつつも)並行的であると言える。

但し、品詞構造においては、述定機能に関しては動詞がプロトタイプの的であり、指示機能に関しては名詞がプロトタイプの的であって、いわば両方向的な構造であるのに対して、複合名詞においてはあくまでも、動詞的性質を有する意味を中心義として形容(名)詞的性質、名詞的性質へと連続していく、拡張の一方向性が存在する、という違いはある。

以上、本節では構文的多義ネットワークにおけるカテゴリーの連続性について検討した。

4.7 本章のまとめ

以上、本章では[普通名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の意味形成について、先行研究を批判的に検討した上で、構文理論に依拠し、個々の複合名詞の意味からボトムアップ的に11の構文的意味を認定した。そして、意味形成に關与する2つのレベルの比喩として、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩、及び構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩について明らかにした。最後に、構文的多義ネットワークにおける意味的性質の連続性と、日本語の品詞構造における連続性との並行性について検討した。

第5章 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の意味形成

5.1 はじめに

本章では、「焼き魚、飲み水、買い物」等のように、前項要素が和語の他動詞（通常、行為主体を表すガ格名詞（句）と、行為主体による何らかの働きかけの対象を表すヲ格名詞（句）をとる動詞¹）の連用形であり後項要素が具体名詞である²複合名詞を考察対象とし、その意味形成の全体像を構文理論に依拠して共時的に分析し、記述する。

なお本研究では、「具体名詞」を「外界に存在し、視覚あるいは触覚による知覚が可能な、有形の存在（無生物及び有生物）を表す名詞」と規定する。

以下に、本章の概要を述べる。

まず 5.2 節では、考察対象とするタイプの複合名詞をめぐる先行研究の問題点を指摘する。

5.3 節では、5.2 節での指摘を踏まえ、[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞を構文として位置づけるということについて確認する。

5.4 節では、考察対象とするタイプの複合名詞を複合語レベルの構文であると位置づけ、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえて、ボトムアップ的に 7 つの構文的意味を認定する。

5.5 節では、考察対象とするタイプの複合名詞の意味形成に関与する 2 つのレベルの比喻について検討する。その 1 つ目は、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻である。2 つ目は、構文的多義ネットワーク³形成の動機づけとしての比喻である。

最後に 5.6 節は本章のまとめである。

¹ なお、前述の通り、本研究ではこのような動詞を広く「他動詞」と位置づけるが、認知言語学において広く共有されている、最もプロトタイプの他動詞から最もプロトタイプの自動詞までを連続的に位置づけるという考え方を前提とし、他動詞と自動詞とを明確に二分するという考えは採らない。

² 本研究では、後項要素が自由形態素である事例を考察対象とし、拘束形態素である事例は考察対象外とする。

³ なお、[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の構文的多義ネットワークは、5.5.2 節の最後に図示する。

5.2 先行研究の問題点

現代日本語における[動詞連用形 + 名詞]型の複合名詞は、その事例の数が極めて多い複合語の一種である。しかし、それらの複合名詞の構成要素間の意味的関係性について詳細に検討した先行研究は、管見の限りでは見当たらない。

例えば、沖(1983)、森田(2008)などにおいては、現代日本語における様々なタイプの複合名詞の中の1つの事例として、[動詞連用形 + 名詞]型の複合名詞の僅かな例が列挙されるに留まっており、その構成要素間の関係の多様性については言及されていない。

また、佐々・堀江(1998)、澤田(1999)、影山(2009)では、「買い物、編み物」などのように後項要素が「もの」であるタイプの複合名詞に限定して言及している。しかし、佐々・堀江(1998)⁴、影山(2009)においてはこれらの複合名詞を、5.4節でも指摘するように、いわゆる形式と意味とのミスマッチという言語現象の1例として提示しているに留まっている。

また、澤田(1998: 159-162)では、本稿で考察対象としているタイプの複合名詞の一部である[他動詞連用形 + もの]型の複合名詞に関して、「具体的、時間的な動作」を想起するための要因を挙げている。その主なものは「～されるべきモノ」「～するためのモノ」などモノの属性を表す複合名詞は動作としての解釈はしにくいという点である。しかし、次節でも指摘するように、実際には「洗い物、張り紙、吹き矢」などそのような解釈が可能なタイプの複合名詞が一定数存在している。

なお、現代日本語の複合語（特に、[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞や[名詞 + 動詞連用形]型複合名詞）の語形成に関する先行研究全般に共通する問題点（一貫して詳細に検討されていない点）として、大きく次の2点が挙げられる。

1点目は、多くの先行研究では、語構成のパターンを簡略的なラベル付けのもと、非連続的に分類するに留まっているという点である⁵。

⁴ 佐々・堀江(1998: 138)では、「買い物、調べ物、編み物、縫い物」などを例に挙げ、具体物が動作を連想させ、動作過程へと意味が拡張する場合があると指摘している。

⁵ 既に第4章の4.3節でも指摘したように、[名詞 + 動詞連用形]型複合名詞を考察対象としている影山(1999)、杉岡・小林(2001)、伊藤・杉岡(2002)などでは、例えば「花見、草刈り」などは「行為」を表し、「鉛筆削り、缶切り」などは「道具」を表す、といったように、「行為」や「道具」といった簡略的なラベル付けをした上で、非連続的にその語構成を規定しており、それらの連続性については詳細な検討がなされていない。

2点目は、複合語一語の意味を捉える上で、厳密には構成要素それぞれの意味のみからは導かれない意味の出所、理論的位置付けが明示されていないという点である⁶。本章における分析は、本研究の第3章の分析及び第4章の分析と同様に、これらの複合語研究全般における2つの問題点の解決を視野に入れたものである。

5.3 構文としての[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞

前節での指摘を踏まえ、本研究では考察対象とする複合名詞について、[他動詞連用形 + 具体名詞]という同一形式に複数の意味が結び付いた、多義的な(複合語レベルの)構文であると位置づけ、また複合名詞の意味形成を構文的多義ネットワークの形成であると位置づけ、構成要素間の関係の多様性を包括的、体系的に分析する。

なお、第2章でも述べた通り、Langacker(1999: 109)では、単一の合成からなる構造体を最小構文と位置づけている。本研究もこの考え方に従うものであり、考察対象とする複合名詞も、第3章で考察した[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞や第4章で考察した[名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞と同様、現代日本語における(2つの形態素による、単一の合成によって形成される)最小構文の1つの事例であると位置づける。

さて、筆者は、web上で公開されている国語辞典のデータベースであるYahoo!辞書、web検索(検索エンジン google での検索)、及び『新潮文庫の100冊』(CD-ROM版)から、現代日本語において十分に定着している合計371の複合名詞の事例を採集した。

事例の採集にあたっては、まず小泉他編(1989)に収録されている全ての和語の他動詞を選び出し、それらの連用形を前項要素とし具体名詞を後項要素とする(現代日本語において定着している)複合名詞を、Yahoo!辞書と google と『新潮文庫の100冊』(CD-ROM版)のそれぞれの文字列検索によって網羅的に抽出した。(なお、小泉他編(1989)に収録されている他動詞の中には、「傾ける」や「始める」のように、その連用形を前項要素とする複合名詞が文字列検索によって抽出できないものも複数存在し

⁶ 既に第4章の4.2節でも指摘したように、[名詞 + 動詞連用形]型複合名詞を例に挙げれば、「花見」という語の意味は概略、＜人々が桜の木の下に集まって、桜の花を見ながら飲食をしたり語り合ったり歌を歌ったりして楽しむこと＞と記述できるが、この意味は、構成要素である「花」と「見(る)」それぞれの意味の総和としては導けない。

た。)

次節では、371 の個々の複合名詞の意味を検討した上で⁷ボトムアップ的に抽出した、現代日本語において確立していると考えられる 7 つの構文的意味とその構文的意味を抽出できる主な事例を提示していく。なお、以下では、意味的に類すると考えられる複合名詞群（以下、グループ、グループ…と呼ぶこととする）の主な事例を提示し、それらの複合名詞群における個々の意味を検討した上で抽出した、それらの複合名詞群に共通する意味である構文的意味を提示し、その構文的意味の特徴について記述していく。

以下の構文的意味の記述における「無生物」という語は、「外界に存在し、視覚あるいは触覚による知覚が可能な、有形の無生物」という位置づけとして用いている。また、そのような「無生物」と「有生物」の総称として、「存在物」という語を構文的意味の記述において用いることとする。

5.4 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の構文的多義性

本節では、[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞に関して、現代日本語において確立していると考えられる 7 つの構文的意味を認定する。

5.4.1 構文的意味

まず、(1)にグループ（計 125 例）のうちの主な事例を提示する。（なお、125 例のうち、構文的意味の事例でもあり、後述する構文的意味の事例でもあるケース、すなわち＜存在物＞としての意味と＜行為＞としての意味を共に有する事例⁸は、8 例⁹

⁷ なお、次節では 371 例の事例のうちの一部について、それらの意味記述を提示する。

⁸ 例えば「書き物」という語においては、「書き物を配る。」といった場合の、概略＜何らかの文書＞という意味（モノとしての意味）と、「彼は一日中書き物をした。」といった場合の、概略＜行為主体が文章などを書くこと＞という意味（行為としての意味）がほぼ同程度に定着している。この場合、「書き物」は、現代日本語において確立した少なくとも 2 つの意味を有する多義語であると位置づけられる。

⁹ なお、この 8 例とは、「編み物、書き物、染め物、煮物、拾い物、彫り物、巻き髪、焼き

みられた。)

- (1) 和え物・揚げパン・織物・植木・書き物・切り身・刺身・染め物・建物・
 ともし火・握り飯・煮物・冷やし麺・干しブドウ・巻き髪・貰い物・
 焼き魚・ゆで卵・忘れ物

以上の事例のうち、例えば「和え物」という複合名詞の意味は、＜野菜や魚介類や肉などを、味噌や酢や胡麻や辛子などと混ぜ合わせることによって調理（調味）した料理＞と記述できる。

また、「焼き魚」という複合名詞の意味は、＜塩を振ったり味噌に漬け込んだりするなどした上で、直火で炙るという調理を施した魚肉＞と記述できる。

その他、(1)に挙げた例を含む125例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する(もしくは生じる)存在物>

さて、構文的意味 という1つのカテゴリーにおける典型事例は、「織物」における「織る」という行為や「握り飯」における「握る」という行為など、行為主体が意図的に対象に働きかける何らかの行為の結果として完成する物を意味している。しかし、「忘れ物、落し物、無くし物」のように、対象物への行為が非意図的である周辺事例も僅かに存在する。

なお、構文的意味 を抽出できる個々の事例において、「和え物」の「物」や「揚げパン」の「パン」といった後項要素によって表される存在物は、それぞれの前項要素によって表される<行為>の対象を表すヲ格としての役割を担っている。

肉」である。

5.4.2 構文的意味

次に、(2)にグループ（計38例）のうちの主な事例を提示する。

- (2) 揚げかす・揚げ玉・押し絵・押し寿司・搔き傷・かけうどん・切り屑・
絞るかす・絞り汁・吸い殻・食べかす・ちぎり絵・ちらし寿司・煮殻・
煮汁・練り菓子・延べ板・掘り炬燵・蒸しパン・寄せ鍋¹⁰

以上の事例のうち、例えば「揚げかす」の意味は、＜野菜や魚介類や肉などを、衣をつけて熱した油の中へ入れて調理した結果、その油の中に残った不用物としての衣の一部＞と記述できる。

また、「押し寿司」の意味は、＜型に寿司飯と鯖や鱒などの具材を重ね合わせ、それらに一定時間、手（や道具）で圧力を加えて固めることで完成した寿司＞と記述できる。

その他、(2)に挙げた例を含む38例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味： ＜行為主体による、ある存在物に対する何らかの行為が実現した結果として生じる、後項要素が表す無生物＞

構文的意味を抽出できる事例のうち、「押し絵、ちらし寿司、掘り炬燵」のように、行為主体による行為の結果として生じる物が、行為主体が意図的に完成させた物である場合もある一方で、「揚げかす、切り屑、煮殻」のように、不要物である場合もある。

また、「揚げかす」における「揚げる」という行為の対象物である食材や、「切り屑」における「切る」という行為の対象物である紙など、構文的意味における＜行為＞の＜対象（無生物・有生物）＞は複合名詞の構成要素としては言語化されず、この対象

¹⁰ なお、「寄せ鍋」に関しては、後項要素に関して、容器である「鍋」という形式を用いて、その中身である鍋物を表すという、容器と中身の隣接関係に基づくメトニミーが関与しており、この点でグループにおいては周辺的事例であると位置づけられる。

物に関する情報は百科事典的知識¹¹によって補われるものである。

なお、構文的意味 を抽出できる事例においては、構文的意味 を抽出できる事例や、後述する構文的意味 ～ を抽出できる事例のように、後項要素と前項要素との間に行為の対象を表すヲ格や行為の道具を表すデ格といった関係性は存在しない。

5.4.3 構文的意味

次に、(3)にグループ (計 58 例)のうちの主な事例を提示する。(なお、58 例のうち、構文的意味 の事例でもあり、後述する構文的意味 の事例でもあるケース、すなわち<物>としての意味と<行為>としての意味を共に有する「洗い物、折り紙」のような事例は 6 例¹²みられた。)

- (3) 洗い物・売り物・折り紙・替え芯・替え刃・着物・捨て金・抱き枕・
食べ物・付け毛・鳴らし物・握り鋏・飲み水・飲み物・引き金・踏み台・
待ち人・持ち物・読み物・割り箸

以上の事例のうち、例えば「折り紙」の意味は、<主に子供が、曲げたりたたんだりすることで鶴や風船などの形を作る遊びを行うために用いる色紙>と記述できる。

また、「飲み物」の意味は、<人間が日常生活において、口に入れ嚙まずに喉から食道へ流し込むという行為を行うための、(水や茶やジュースや酒などの)諸々の液体>と記述できる。

その他、(3)に挙げた例を含む 58 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物>

¹¹ なお、百科事典的知識の定義については本稿第2章の2.5節を参照されたい。

¹² なお、この6例とは、「洗い物、折り紙、探し物、積み木、縫い物、吹き矢」である。

構文的意味 を抽出できる事例としての存在物の大多数は、前項要素によって表される<行為>がその存在物に備わった使用(利用)目的である。しかし、<汚れや不純物を取り除くべきである衣類や食器類>を意味する「洗い物」や、<携帯すべきである諸々のもの>を意味する「持ち物」などは、前項要素によって表されるのが<実現すべき行為>であり、このように言語使用者の心的態度(すなわち、前項要素によって表される行為が、義務的な行為であるという判断)が付加された事例も存在する。

なお、(3)の用例の多くは、前項要素が主に動機づける<行為>が、存在物に備わった利用(使用)目的である。しかし、例えば「握り鋏」において、存在物(鋏)の利用(使用)目的(物を切ること)は構成要素としては言語化されておらず、前項要素によって表される行為(握ること)はその目的を実現するための<手段>である、という点で、(3)における周辺の事例であると位置づけられる。同様のことが、「引き金」、「割り箸」、「踏み台」にもいえる。

構文的意味 を抽出できる個々の事例も構文的意味 の場合と同様、「洗い物」における「物」や「折り紙」における「紙」といった後項要素によって表される存在物は、それぞれの前項要素によって表される<行為>の対象を表すヲ格としての役割を担っている。

5.4.4 構文的意味

次に、(4)にグループ (計 66 例)のうちの主な事例を提示する。

- (4) 揚げ油・編み機・入れ物・祝い膳・送り火・飼い葉・飾りボタン・
消しゴム・仕切り板・すり鉢・焚き木・だまし絵・包み紙・流し台・
縫い針・招き猫・守り刀・蒸し釜・焼き網・渡し舟

以上の事例のうち、例えば「揚げ油」の意味は、<野菜や魚介類や肉などの食材に衣をつけるなどして熱した食用油の中に入れるという調理を行うために用いる、諸々の食用油>と記述できる。

また、「消しゴム」の意味は、＜鉛筆やシャープペンシルなどで書いたあとを、擦ることによって消すために用いるゴム製品＞と記述できる。

その他、(4)に挙げた例を含む 66 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体が、ある存在物に対するある行為を実現するために用いる、後項要素が表す無生物>

構文的意味を抽出できる個々の事例において、「揚げ油」の「油」や「消しゴム」の「ゴム」といった後項要素によって表される無生物は、それぞれの前項要素によって表される＜行為＞の道具を表すデ格としての役割を担っている。

なお、「揚げ油」における「揚げる」という行為の対象物としての食材や、「編み機」における「編む」という行為の対象物としての布製品など、構文的意味における＜行為＞の対象となる＜ある無生物もしくは有生物＞は、構文的意味と同様、複合名詞の構成要素としては言語化されず、この対象物に関する情報は、百科事典的知識によって補われるものである。

5.4.5 構文的意味

次に、(5)にグループ（計 45 例）のうちの主な事例を提示する。（なお、45 例のうち、意味の事例でもあり、後述する意味の事例でもあるケース、すなわち＜物＞としての意味と＜行為＞としての意味を共に有する事例は 12 例¹³みられた。）

(5) 揚げ荷・当て木・当て布・入れ歯・置き傘・置き手紙・置き物・落とし蓋・
掛け軸・掛け汁・貸し家・掛布団・差し歯・敷布団・敷物・添え木・
付けまつげ・詰め物・投げ銭・張り紙

¹³ なお、この 12 例とは、「当て木、当て布、入れ墨、入れ歯、置き手紙、置き土産、贈り物、落とし蓋、差し歯、差し水、差し湯、張り紙」である。

以上の事例のうち、例えば「入れ歯」の意味は、＜口内の、歯が抜けたり欠けたりした部分に取り付けることによってその歯と同等の機能を果たすようにするための、人工の歯＞と記述できる。

また、「置き物」の意味は、＜（眺めて楽しむことを主な目的として）机の上や床の間などに設置しその場に留めておくための、諸々の装飾品＞と記述できる。

その他、(5)に挙げた例を含む 45 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体が、後項要素が表すある無生物に対する、その無生物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為を実現するための無生物>

構文的意味を抽出できる個々の事例において、「揚げ荷」の「荷」や「当て木」の「木」といった後項要素によって表される無生物は、それぞれの前項要素によって表される＜行為＞の対象を表すヲ格としての役割を担っている。

また、「揚げ荷」の意味は、＜陸に揚げるべき船荷＞と記述でき、「置き手紙」の意味は、＜ある場所から立ち去る際や留守にする際に、その場所に後からやってくる人に伝えたい用件を書いて机の上などに残しておくための紙＞と記述できるが、前者における＜陸＞や後者における＜机の上＞など、ある物理的領域の存在が必須である。（なお、そのような物理的領域は複合名詞の構成要素としては言語化されず、百科事典的知識によって補われる情報である。）

5.4.6 構文的意味

次に、(6)にグループ（計 35 例）のうちの主な事例を提示する。

(6) 編み物・洗い物・合わせ鏡・折り紙・買い薬・買い物・書き物・探し物・

縛り首・捨て駒・摺り足・染め物・焚き火・断ち物・接ぎ木・付け火・
積み木・摘み草・積み樽

以上の事例のうち、例えば「洗い物」という語は、(3)の事例として既に提示した＜汚れや不純物を取り除くべきである衣類や食器類＞という意味（「洗い物がたまっている。」のような文において用いられる場合の意味）と共に、＜衣類や食器類の汚れや不純物を取り除くこと＞という意味（「洗い物に30分かった。」のような文において用いられる場合の意味）を有している。

また、「折り紙」という語は、(3)の事例として既に提示した＜主に子供が、曲げたりたたんだりすることで鶴や風船などの形を作る遊びを行うために用いる色紙＞という意味（「折り紙を買いに行ってきた。」のような文において用いられる意味）と共に、＜主に子供が、遊びとして、色紙を曲げたりたたんだりすることで鶴や風船などの形を作ること＞という意味（「息子は折り紙が好きで、毎日していても飽きないようだ。」のような文において用いられる場合の意味）を有している。

その他、(6)に挙げた例を含む35例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、ある行為>

構文的意味においても、構文的意味や構文的意味と同様、後項要素によって表される存在物は、それぞれの前項要素によって表される＜行為＞の対象を表すヲ格としての役割を担っている。

さて、構文的意味を抽出できる個々の事例は、2節でも述べたように、形式と意味がミスマッチしているケースである。すなわち、本稿で考察対象としている[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞は、本来、後項要素によって表される存在物の意味を前項要素によって表される＜行為＞の意味が修飾しているという意味的關係を有していて、全体として＜存在物＞を表す形式である。しかし、構文的意味と後述する構文的意味は、そのような形式を有しながら、＜存在物＞の意味は背景化し、＜行為＞の意

味が前景化しているケースである。

このことに関連して、意味 から意味 の中で、「洗い物をする」「摘み草をする」のように、複合名詞に「をする」という形式が結び付いてある行為の遂行を表す用法は、意味 を抽出できる事例と意味 を抽出できる事例のみにみられる用法である。

5.4.7 構文的意味

最後に、(7)にグループ (計 30 例)のうちの主な事例を提示する。

- (7) 当て木・当て布・生け花・入れ墨・入れ歯・打ち水・置き手紙・置き土産・贈り物・返し針・掛け湯・くわえ煙草・くわえ楊枝・挿し木・差し歯・差し湯・敷き砂・投げ荷・張り紙・振り塩

以上の事例のうち、例えば「打ち水」の意味は概略、＜夏の暑さを和らげたり、土埃や砂埃の飛散を鎮めたりするために、道路や庭先などに水を散布すること＞と記述できる。

また、「生け花」の意味は概略、＜植物の花・枝・葉などを切り取り、水を入れた瓶などの花器に挿して飾ること＞と記述できる。

その他、(7)に挙げた例を含む 30 例に共通する意味特徴を踏まえ、構文的意味 を以下のように記述することができる。

構文的意味 : <行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、その存在物のある物理的領域に存在させる過程を含むある行為>

構文的意味 も構文的意味 と同様に、本来＜存在物＞を表す形式を用いて＜行為＞を表しているという点で、形式と意味がミスマッチしているケースである。

また、構文的意味 は構文的意味 と同様、ある物理的領域の存在が必須である。(な

お、そのような物理的領域は、百科事典的知識によって補われる情報である。)

5.4.8 構文的意味 と構文的意味 に関する類義構文との比較

さて、構文的意味 と構文的意味 は、ある対象（存在物）に対する行為主体の何らかの行為を表すという点で、「草むしり、花見、ごみ捨て」など、＜行為＞を表す[名詞（目的語） + 他動詞連用形]型複合名詞の構文的意味と類義的であるといえる。

但し、[具体名詞 + 他動詞連用形]型複合名詞の多くは行為主体から対象への働きかけが焦点化されているのに対し、本稿の考察対象である[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞においては、行為主体から対象への働きかけが、その行為の完了後に対象（の状態変化）がもたらす何らかの効果や影響を意図したものである。

例えば、「置き手紙」であれば、行為主体が机の上などに手紙を置いてある場所を立ち去ることで、その後その場所に来た人がその手紙を読むことで、その人に用件などを伝えることが可能になる。

また、「打ち水」であれば、行為完了後しばらくして周辺の温度が下がり快適さが得られるであろうことを意図して、道や庭先に水を散布することを表す。

これに対し、例えば「草むしり」は、その行為の完了後に行為を遂行した場所が（雑草が除去されて）きれいになるということを意図した行為であるが、その場所がきれいになるという効果は対象そのものがもたらすものではない。

また「花見」は、楽しさなどのプラスの感情は、「花（桜）を見る」という行為の完了後にもたらされるというよりは、基本的にはその行為の最中にもたらされるものであろう。

5.5 [他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の意味形成に関与する比喻

[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞の意味形成において、比喻が関与していると考えられ、またその関与には少なくとも2つの異なるレベルが存在すると考えられる。

本節ではこの2つのレベルの比喩の関与について、具体的に検討する。なお、本研究において3種の比喩、すなわちメタファー（隠喩）・シネクドキー（提喩）・メトニミー（換喩）の定義は、本稿第2章の2.3節で既に提示した、靑山(2002)に従う。

また、メタファーによる拡張とスキーマの抽出との関連性についても、本稿第2章の2.4節で既に提示した靑山(2001: 36-44)における考え方に従う。

5.5.1 個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩

複合名詞の意味形成に関与している2つのレベルの比喩のうち、まず1つ目のレベルとして、本節では個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喩について検討する。

影山(1982: 四節)では、語形成ないし語彙化に全般的にみられる特性として、言語の伝達の経済性に基つき豊かな意味内容を簡潔かつ的確に表現するという点を挙げている。本研究では、この特性が比喩に基づくものである、と位置付ける。

この比喩の関与には、さらに少なくとも2つの下位のケースが存在している。

1つ目に、後項要素に関して、比喩の一種であるシネクドキーが関与しているケースが相当数存在する。

例えば、「焼き鳥」という語の「鳥」については、「鳥」という本来は類を表す語を用いて「鶏」という種を表す、というシネクドキーが関与していると考えられる。

また、「和え物」という語の「物」については、「物」という形式は本来、その基本義として、靑山(2000)が提示しているように<人間（および他の動物）以外の形のある存在>を意味する。しかし、「和え物」という語においては「物」は<野菜や魚介類や肉>を意味する。この場合も、後項要素「物」に関して、本来は類を表す形式を用いて種を表すというシネクドキーが関与している¹⁴と考えられる。

¹⁴ 但し、「和え物」における「物」の意味の限定は、ここで指摘したシネクドキーによってのみ動機づけられるものではないと考えられる。前項要素が、概略<野菜や魚介類や肉などに、味噌や胡麻や辛子などを混ぜ合わせて調理する>という意味を有する「和え(る)」という形式であるということも、「物」の意味の限定の方向性を決定づける1つの要因である。(すなわち、「和える」という動詞の連用形が前項要素であるから、後項要素「物」によって表される意味も、存在物一般ではなく、「和える」という行為の対象としてふさわしい物であろう、という認識が生じると考えられる。) このように、「物」を後項要素とす

2 つ目に、前項要素（それぞれの構文的意味における＜行為＞という意味特性）に関して比喩の一種であるメトニミーが関与しているケースが相当数存在する。

例えば、前述の「焼き鳥」という語に関しては、靱山(2006: 176)が指摘するように、「焼く」という行為は、＜鳥肉を小さく切って串に刺し、たれや塩をつけて焼く＞という一連の行為の中の一部である。

また、「炒り卵」という語に関しては、「炒る」(概略、＜水気がなくなるまで熱する＞という意味)という行為は、＜鶏卵を溶きほぐし、塩や胡椒などの調味料で味を付け、それをフライパンに入れ、水気がなくなるまで熱する＞という一連の行為の中の一部である。いずれの例においても、時間的な隣接性に基づくメトニミーが関与していると考えられる。

5.5.2 構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喩

次に本節では、5.5.1 節において提示した比喩とは異なるレベルの比喩の関与をみていく。すなわち、5.4 節で提示した7つの構文的意味、すなわち7つの節点を含む構文的多義ネットワークにおいて、それらの7つの節点を結び付けている、拡張のリンクとしての比喩の関与である。

なお本研究では、柏野・本多(1998)、靱山(2001)及び瀬戸(2007)を踏まえ、意味拡張の動機づけとしてのメタファー・シネクドキー・メトニミーという3種の比喩に基づく意味ネットワークが、言語表現の多義の実相を適切かつ詳細に捉えられるモデルであるという考え方を複合語レベルの構文的な多義性に適用し、以下の分析を進める。

ここで、構文的多義ネットワークにおける拡張のリンクを提示する前に、5.4 節で認定した7つの構文的意味を再掲しておく。

る一連の複合語における「物」の意味の限定は、後項要素レベルのシネクドキーによる動機づけと、前項要素の意味による動機づけという2つの動機づけが連携して生じるものであるといえる。

構文的意味 : < 行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する（もしくは生じる）存在物 > （例：和え物、焼き魚）

構文的意味 : < 行為主体による、ある存在物に対する何らかの行為が実現した結果として生じる、後項要素が表す無生物 > （例：揚げかす、押し寿司）

構文的意味 : < 行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための（実現すべき）存在物 > （例：折り紙、飲み物）

構文的意味 : < 行為主体が、ある存在物に対するある行為を実現するために用いる、後項要素が表す無生物 > （例：揚げ油、消しゴム）

構文的意味 : < 行為主体が、後項要素が表すある無生物に対する、その無生物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為を実現するための無生物 > （例：入れ歯、置き物）

構文的意味 : < 行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、ある行為 > （例：洗い物、折り紙）

構文的意味 : <行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、その存在物のある物理的領域に存在させる過程を含むある行為> (例: 打ち水、くわえ煙草)

さて、以下に構文的多義ネットワークにおける拡張のリンクを網羅的に提示していくが、その前提として、「焼き魚」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する(もしくは生じる)存在物>)を構文的多義ネットワークにおける中心義であると位置付ける。

本稿第2章の2.3節でもみたように、本研究では、中心義を共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義であると位置づけている。また、既に提示したように、中心義における概念的な中心性の特徴として、「文字通りの意味である」、「関連する他の意味を理解する上での前提となる」、「具体性(身体性)を持つ」、「認知されやすい」などが挙げられる。

構文的意味 は、4節で認定した7つの意味の中でも、これらの性質を最も有していると考えられる。なお、構文的意味 は、前項要素によって主に表される<行為>は実際に実現されたものであるという点で具体性が高く、現代日本語の複合語形成において他動詞と最も結びつきやすいと考えられるその目的語(行為の対象を表す存在物を表す語)が後項要素であり、かつ前述の通り、採集した371例の中で、構文的意味 を抽出できる事例の数が最も多い、という特徴も有する。

さて最初に、この中心義である構文的意味 から、「押し寿司」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体による、ある存在物に対する何らかの行為が実現した結果として生じる、後項要素が表す無生物>)へ、メタファーによって拡張していると考えられる。

この2つの構文的意味からは、共通性として<行為主体による、ある対象に対するある行為が実現した結果として生じる存在物>という構文スキーマを抽出することができる。

なお、構文的意味 においては前述の通り、<行為>の<対象(無生物)>は複合名詞の構成要素としては言語化されておらず、この<対象>に関する意味情報が百科事典的知識によって補われなければならないという意味的制約がある。(この制約は構文

的意味 には存在しない。)

次に、「折り紙」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物>)は、構文的意味からメタファーによって拡張していると考えられる。

この2つの構文的意味からは、共通性として<行為主体による、後項要素が表すある対象に対するある行為が関与する存在物>という構文スキーマを抽出することができる。

なお、構文的意味 (及び構文的意味)においては行為主体による対象への<行為>が実際に実現されているのに対して、構文的意味 (及び構文的意味 ・)においては<行為>の実現は必要条件ではなく、<行為>はあくまで構文的意味 を抽出できる個々の事例の存在意義(存在理由)として機能するものである。つまり、<実現された行為>を前提とする構文的意味 に比べて、<実現可能性を有する行為>を前提とする構文的意味 は、前項要素によって表される<行為>と後項要素によって表される<存在物>との間の関係の読み取り(解釈)は、相対的に主観性¹⁵が高いものであると位置づけることができる。このことを踏まえると、構文的意味 から構文的意味 への拡張の方向性は、Traugott が Traugott(1995)などにおいて提案している主観化¹⁶の方向性に相当するものであると考えることができる。これが構文的意味 から構文的意味 への拡張の方向性を決定付ける1つの根拠であると考えられる。

次に、「揚げ油」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、ある存在物に対するある行為を実現するために用いる、後項要素が表す無生物>)は、「折り紙」などから抽出できる構文的意味 (<行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物>)からメタファーによって拡張していると考えられる。

この2つの構文的意味からは、共通性として<行為主体が、ある行為を実現するために必要な存在物>という構文スキーマを抽出することができる。

¹⁵ なお、本稿第3章の3.6節で既に提示したように、「主観」及び「客観」について、深田(2001)における定義に従う。深田(2001: 72)は、発達心理学や神経心理学の知見を踏まえつつ、「主体」を「自己」、「客体」を「他者」と位置づけた上で、「主観」を「主体が知覚し、判断、認識、推論した内容」と規定し、「客観」を「主体の知覚、判断、推論の対象となるもの。主体の認識作用の対象(概念化の対象)となるもの」と規定している。

¹⁶ 主観化の定義、位置づけに関しては、本稿第3章の3.6節を参照されたい。

なお、構文的意味 を抽出できる個々の事例において後項要素が表す存在物は、前項要素が主に表す〈行為〉の対象を表すヲ格としての役割を担っている。これに対し、構文的意味 を抽出できる個々の事例において後項要素が表す無生物は、前項要素が主に表す〈行為〉の道具を表すデ格としての役割を担っている。(〈行為〉との概念的結び付きは、対象を表すヲ格に比べて、道具を表すデ格の方が低いと考えられる。)

次に、「置き物」などから抽出できる構文的意味 (〈行為主体が、後項要素が表すある無生物に対する、その無生物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為を実現するための無生物〉)は、「折り紙」などから抽出できる構文的意味 (〈行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物〉)からシネクドキーによって拡張していると考えられる。

すなわち、構文的意味 に関与するのは〈行為〉一般であるのに対し、構文的意味 に関与するのは〈ある物理的領域を必要とする行為〉であり、また構文的意味 は〈存在物〉を表すのに対し、構文的意味 は〈存在物〉の一種である〈無生物〉を表し、類から種へ拡張していると位置付けられる。

次に、「焼き魚」などから抽出できる構文的意味 (〈行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する(もしくは生じる)存在物〉)及び、「折り紙」などから抽出できる構文的意味 (〈行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物〉)から、「買い物」などから抽出できる意味 (〈行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、ある行為〉)への拡張は、〈行為主体による行為が関与する物〉と〈行為主体による行為〉との概念的関連性に基づくメトニミーであると考えられる。

また、構文的意味 (〈行為主体が、後項要素が表すある無生物に対する、その無生物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為を実現するための無生物〉)から、「打ち水」などから抽出できる構文的意味 (〈行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、その存在物がある物理的領域に存在させる過程を含むある行為〉)への拡張も、同様のタイプのメトニミーであると考えられる。

さて、構文的意味 と構文的意味 を抽出できる事例は、前述の通り、形式上は他動詞連用形(によって動機付けられる〈行為〉)が名詞(によって動機付けられる〈物〉)を修飾していながら、実際には〈行為〉を表しているという点において、形式

と意味とがミスマッチしているケースであり、構文的意味₁と構文的意味₂は構文的多義ネットワークにおいても周辺に位置付けられるものである。

なお、靱山(2002: 79-80)が指摘しているように、「Aさんは本当に酒が好きだ。」や「やっとレポートが終わった。」という場合、「酒」や「レポート」といった本来<物>を表す語で、<そのものに関わること>(ここでは、<酒を飲むという行為>や<レポートを書くという行為>)を意味している。構文的意味₁・構文的意味₂から構文的意味₃への拡張と、構文的意味₁から構文的意味₄への拡張は、このような「酒」や「レポート」などのタイプの(単純語レベルの)メトニミーと並行的であると言える。

さらに、構文的意味₁・構文的意味₂から構文的意味₃への拡張と、構文的意味₁から構文的意味₄への拡張は、さらに一般的に、「図地反転」¹⁷という認知能力が反映している言語現象であると位置付けることができる。

すなわち、構文的意味₁・構文的意味₂・構文的意味₃においては、<行為の関与する物>が図(前景的情報)であり、<物に対する行為主体による行為>が地(背景的情報)であると位置付けられる。そして、これらの意味からのメトニミーによる構文的意味₃及び構文的意味₄への拡張は、知覚した対象に対して図と地の役割が逆転するという認知能力によって動機づけられていると考えることができる。

最後に、構文的意味₃(<行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、その存在物のある物理的領域に存在させる過程を含むある行為>)は、構文的意味₄(<行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、ある行為>)からシネクドキーによって拡張していると考えられる。

すなわち、類としての<行為>(行為一般)から種としての<行為>(物理的領域を必要とする行為)へ拡張していると位置付けられる。

以上の検討を踏まえ、以下の図1に本節で検討した構文的多義ネットワークを図示する。なお、図1において四角で囲んだmは構文的意味(ネットワークにおける節点)、破線の矢印はメタファーリンク、実線の矢印はシネクドキーリンク、二重線の矢印はメトニミーリンクを示している。

¹⁷ 「図地反転」の定義については、本稿第2章の2.4節を参照されたい。

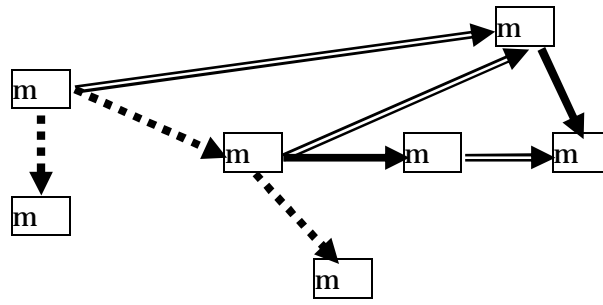


図1：構文的多義ネットワーク

5.6 本章のまとめ

以上、本章では、[他動詞連用形 + 具体名詞]型複合名詞を考察対象とし、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に7つの構文的意思を認定し、また個々の複合名詞の意味形成に関与する比喻と、構文的多義ネットワークの形成に関与する比喻とについてそれぞれ明らかにした。

第6章 結論

本章では、本研究のまとめと今後の検討課題を提示する。

まず、以下に本研究のまとめを提示する。

本研究は、[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞（「殴り倒す」「降り始める」など）、[普通名詞＋他動詞連用形]型複合名詞（「花見」「鉛筆削り」など）、[他動詞連用形＋具体名詞]（「焼き魚」「打ち水」など）という現代日本語における3つのタイプの複合語を考察対象とし、これらの複合語の意味形成を認知言語学における構文理論 (construction grammar) の枠組みに依拠して共時的に分析した。

従来複合語の研究は様々な理論的枠組みのもとで、精力的に研究がなされてきている。しかし、いずれの研究においても、トップダウン的、要素還元主義的なアプローチが採られている。

これに対し、本研究では、構文理論のボトムアップ的、ゲシュタルト的なアプローチを採ることにより、複合語の意味形成の過程を、人間の事態認知の実態に即した形で分析し、記述した。また、個々の分析を通して、従来詳細に扱われてこなかった構文理論の枠組みにおける複合語研究の方法論を検討した。すなわち本研究は、複合語研究及び構文理論における記述的貢献を目指したものである。

以上の点を踏まえ第2章では、まず構文理論における「構文」の位置づけを確認した上で、構文を「意味と形式との結び付きが慣習化したゲシュタルト的な複合体」と定義付けた。そして、現代日本語の複合語を構文と位置づけることで、複合語の意味形成を包括的、体系的に分析できるという可能性について提案した。

次に、様々な研究者によって共有されている構文理論の理論的特徴として、以下の3点を提示した。

文法体系も語彙（レキシコン）と同様に、意味と形式のペアとしての記号であり、語彙的知識と文法的（統語的）知識は連続的なものである。

構成要素の意味は構文（複合表現）の意味を動機づけるものの、構文（複合表現）全体の意味は構成要素に還元して捉えられるものではない。

構文は典型事例から拡張事例までの幅を有するカテゴリーであり、構文的意味同士及び関連する構文同士がネットワーク的に連携している。

本研究もこの3点に基づいて具体的な分析を行ったものである。

次に、構文理論の枠組みにおいて現代日本語の複合語を分析していくアプローチの諸側面（複合語における構文的意味拡張、構文的多義ネットワーク形成など）について検討した。

続いて、本研究において援用する認知言語学の諸概念（概念化、百科事典的意味、フレームなど）について確認した。

第3章から第5章までは、個別分析である。

いずれの章においても、最初に個々の複合語の意味について百科事典的意味観に基づいて詳細な検討を行い、そこからボトムアップ的に現代日本語において確立していると考えられる複数の構文的意味を抽出した。そして、その複数の構文的意味によって形成される構文的多義ネットワークを提示することで、複数の構文的意味の連続性及びそれぞれの複合語の意味形成の全体像を詳細に記述した。

構文的多義ネットワークの形成に関しては基本的に、主体の言語使用や言語習得の過程に関わるボトムアップ的なアプローチである、Langacker(2000)の「動的使用依拠モデル」(dynamic usage-based model)の考え方に従った。すなわち、複合語の意味形成を、実際の言語使用に基づいてボトムアップ的に形成されていくネットワークとして捉えるもので、相互に類似性を有する複数の具現事例（本研究においては、個々の複合語）から共通性としての構文的意味が抽出され、それが定着することで更に新たな具現事例（個々の複合語）が認可される、と考えた。また、構文的意味に適合しない事例（個々の複合語）が出現した際には、構文的意味が動的な拡張のプロセスを介して新しい事例を提示する、と考えた。

また、構文的多義ネットワークを構成する節点が複数の構文的意味であり、それらの節点同士を結ぶリンクがメタファー、シネクドキー、メトニミーの3種の比喻による拡張のリンクであると位置づけた。すなわち、認知言語学における言語表現の多義性に関する先行研究を踏まえ、意味拡張の動機づけとしてのメタファー、シネクドキー、メトニミーという3種の比喻に基づく意味ネットワークが、言語表現の多義の実

相を適切かつ詳細に捉えられるモデルであるという考え方を複合語レベルの構文的な多義性に適用した。

なお、Langacker の考え方に基づき、第3章から第5章までにおいて検討する複合動詞及び複合名詞はいずれも、現代日本語における（2つの形態素による単一の合成によって形成される）最小構文(minimal construction)の事例であると位置づけた。

さて、第3章では、「殴り倒す」、「降り始める」などの[動詞連用形+動詞基本形]型複合動詞を考察対象とした。まず、個々の複合動詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計13の構文的意思を抽出し、さらにそれらの構文的意思間の相互関係を、比喻による拡張という観点から分析した。そして、複数の構文的意思によって形成される構文的多義ネットワークを提示した。以下に、13の構文的意思及び構文的多義ネットワークの略図を再掲する。

- 構文的意思 : < 移動主体が、ある動き_{v1}を伴い、ある移動_{v2}を実現する > (例 : 「駆け上がる」)
- 構文的意思 : < 移動主体が、何らかの対象に対する働きかけとしてのある行為_{v1}を、反復的もしくは(長期)継続的に伴い、ある移動_{v2}を実現する > (例 : 「売り歩く」)
- 構文的意思 : < 移動主体が、ある行為もしくは状態変化_{v1}を伴い、かつその行為もしくは状態変化_{v1}の結果として、ある移動_{v2}を実現する > (例 : 「焼け落ちる」)
- 構文的意思 : < 変化主体が、ある行為もしくは状態変化_{v1}の結果として、ある状態変化_{v2}を実現する > (例 : 「歩き疲れる」)
- 構文的意思 : < 変化主体が、他者や、他の事物からの働きかけによって生じるある動き_{v1}の結果として、ある変化_{v2}を実現する > (例 : 「突き刺さる」)
- 構文的意思 : < 使役行為者が、ある行為_{v1}により対象に働きかけ、その結果として対象にある使役行為_{v2}を実現させる > (例 : 「打ち上げる」)
- 構文的意思 : < 主体が、ほぼ同時に、ある事態_{v1}及び別の事態_{v2}を実現する > (例 : 「光り輝く」)

構文的意味 : < 主体が、ある事態_{v1}を、継続的であり程度性・徹底性が高い事態_{v2}として実現する > (例:「晴れ渡る」)

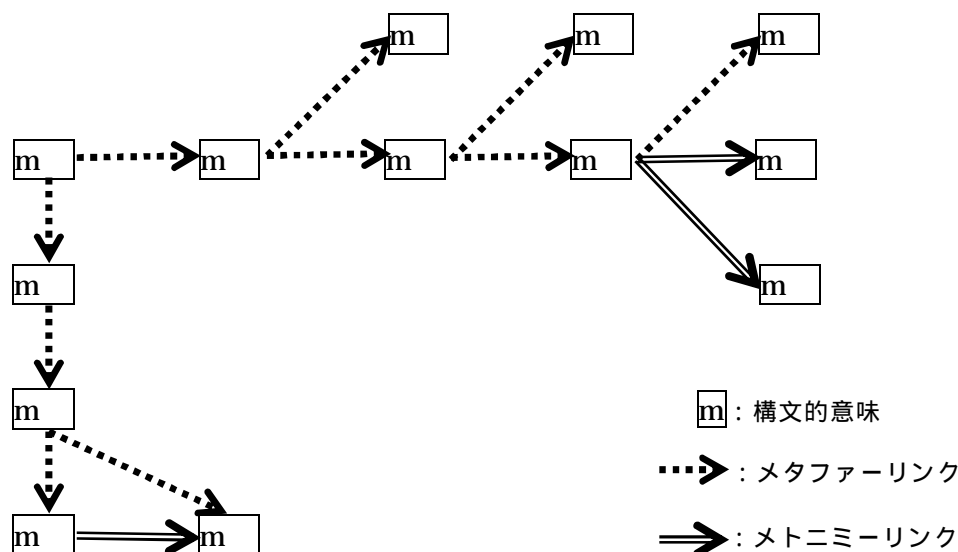
構文的意味 : < 主体が、本来ならば実現するはずの、もしくは実現すべきある事態_{v1}を、未遂・不成立に終える_{v2} > (例:「{食べ}残す」)

構文的意味 : < 主体が、ある事態_{v1}を、ある期間もしくは習慣的に継続する_{v2} > (例:「{走り}続ける」)

構文的意味 : < 複数の主体が、ある事態_{v1}を、同時もしくは交互に(ある期間)継続する_{v2} > (例:「{話し}合う」)

構文的意味 : < 主体が、ある事態_{v1}を始動する_{v2} > (例:「{食べ}始める」)

構文的意味 : < 主体が、ある事態_{v1}を完了・完遂する_{v2} > (例:「{歌い}終わる」)



また、複数の構文的意味(ネットワークにおける節点)によって形成される構文的多義ネットワークを提示し、このネットワークにおける Langacker が提案している主体化(略図における m を起点とする下方向への拡張)及び Traugott が提案している主観化(略図における m を起点とする右方向への拡張)の関与について検討した。

なお、この章では、従来の先行研究を批判的に検討しつつ、より詳細な複合動詞の意味的な分類を提示し、さらに従来詳細に検討がなされてこなかった語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性についても主体化及び文法化という観点に基づき記述した。

次に、第4章では、「花見」、「鉛筆削り」などの[普通名詞+他動詞連用形]型複合名

詞を考察対象とした。

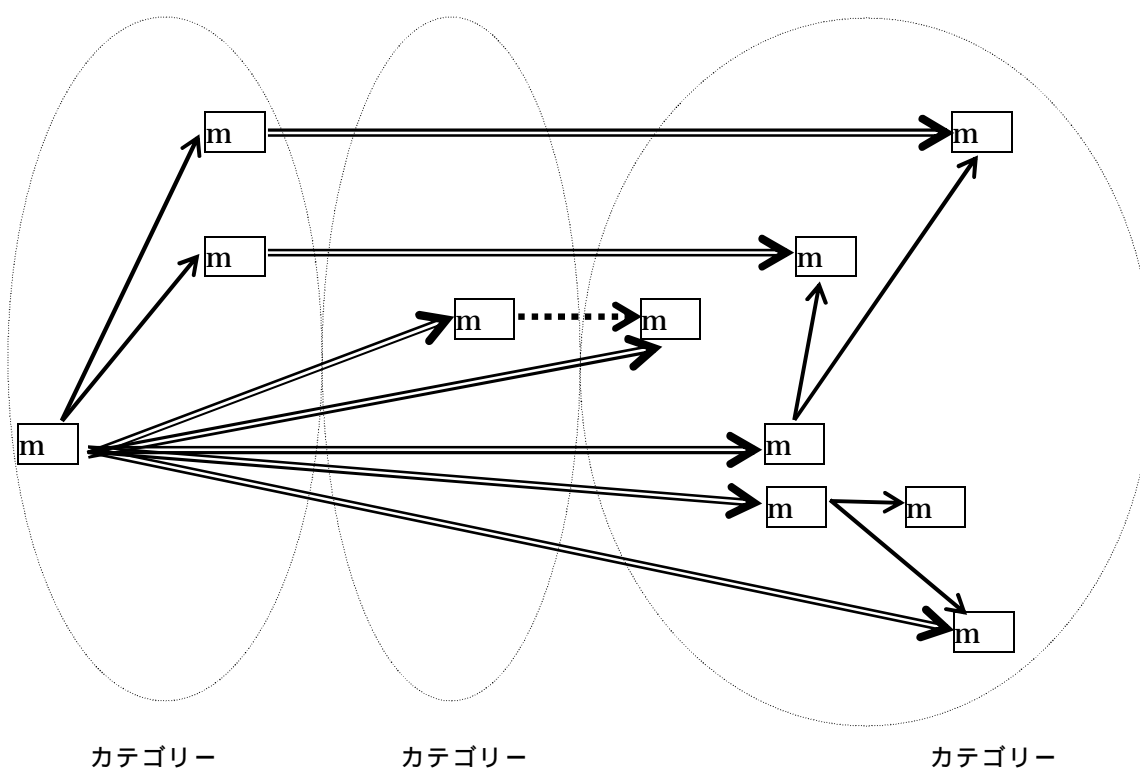
まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計 11 の構文的意味を抽出した。次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻、及び構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻という、2 つのレベルの比喻の関与について検討した。なお、後者のレベルの比喻に関しては、「花見」などにおける〈行為〉、「金持ち」などにおける〈人間の性質〉、「鉛筆削り」などにおける〈道具〉などの複数の構文的意味の相互関係を、〈行為〉に関するフレーム内での概念的関連性に基づく拡張であると捉えることで包括的に分析できるということを提示した。

また、11 の構文的意味における 3 つの上位カテゴリー（カテゴリー・カテゴリー・カテゴリー）における意味的性質の相違点（「花見」などの動詞的な複合名詞カテゴリー、「金持ち」などの形容詞的な複合名詞カテゴリー、「鉛筆削り」などの最も名詞らしい複合名詞カテゴリー）及びその連続性と、現代日本語の品詞構造における（動詞・形容詞・名詞の）性質の相違点及びその連続性との相関関係を明らかにした。

以下に、11 の構文的意味と 3 つのカテゴリーを示した表、及び構文的多義ネットワークの略図を再掲する。

カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 構文的意味 : 〈行為主体が、主に何らかの目的を実現するために、前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと〉(例: 草刈り) ・ 構文的意味 : 〈行為主体が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての行為を、前項要素が表す無生物を用いて、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと〉(例: 水洗い) ・ 構文的意味 : 〈行為主体である人間が、何らかの目的を実現するために、ある存在への働きかけとしての、前項要素が表す場所を必要とする行為を、一定時間(一定期間)継続もしくは連続して行うこと〉(例: 田植え)
カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 構文的意味 : 〈前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある状態が永続的に続いている、行為主体の人間的特徴・性質〉(例: 金持ち)
カテゴリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 構文的意味 : 〈前項要素が表すある存在への働きかけとしての行為が主に日常における主要な活動や役割である、行為主体の職業・社会的立場・社会的位置づけ〉(例: 絵描き)

- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表すある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物 > (例: 野菜炒め)
- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す無生物を用いて行う、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物 > (例: 油揚げ)
- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す場所を必要とする、ある存在への働きかけとしてのある行為の結果、完成する産物 > (例: 鉢植え)
- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す無生物への働きかけとしてのある行為のために用いる、道具 > (例: 郵便受け)
- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す位置に接するようにする過程を含む、ある存在 (道具) への働きかけとしてのある行為のために用いる、その存在 (道具) > (例: 耳当て)
- ・ 構文的意味 : < 行為主体である人間による、前項要素が表す存在への働きかけとしてのある行為が日常的に行われる場所 > (例: 車寄せ)



\boxed{m} : 構文的意味/ $\cdots \rightarrow$: メタファーリンク/ \Rightarrow : メトニミーリンク/ \rightarrow : シネクドキーリンク

次に、第5章では、「焼き魚」、「打ち水」などの[他動詞連用形＋具体名詞]型複合名詞を考察対象とした。

まず、個々の複合名詞の意味の検討を踏まえてボトムアップ的に合計7の構文的意思を抽出した。

次に、個々の複合名詞の意味形成の動機づけとしての比喻、及び構文的多義ネットワーク形成の動機づけとしての比喻という、2つのレベルの比喻の関与について検討した。以下に、7つの構文的意思及び構文的多義ネットワークの略図を再掲する。

構文的意思 : <行為主体による、後項要素が表すある存在物に対するある行為が実現した結果として完成する(もしくは生じる)存在物>

(例: 和え物、焼き魚)

構文的意思 : <行為主体による、ある存在物に対する何らかの行為が実現した結果として生じる、後項要素が表す無生物>

(例: 揚げかす、押し寿司)

構文的意思 : <行為主体が、後項要素が表す存在物に対するある行為を実現するための(実現すべき)存在物>

(例: 折り紙、飲み物)

構文的意思 : <行為主体が、ある存在物に対するある行為を実現するために用いる、後項要素が表す無生物>

(例: 揚げ油、消しゴム)

構文的意思 : <行為主体が、後項要素が表すある無生物に対する、その無生物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為を実現するための無生物>

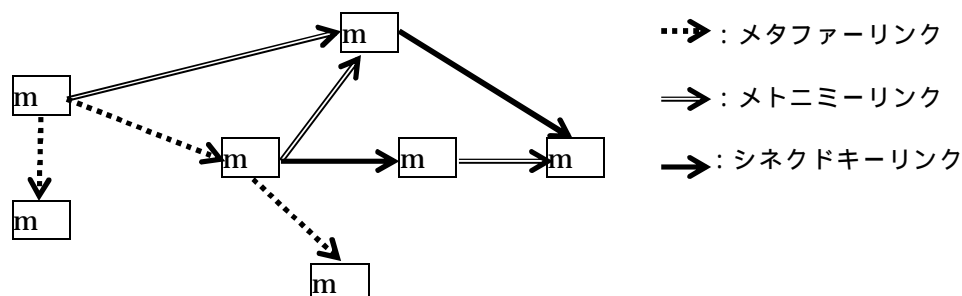
(例: 入れ歯、置き物)

構文的意思 : <行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、ある行為>

(例: 洗い物、折り紙)

構文的意思 : <行為主体が、後項要素が表すある存在物に対して行う、その存在物をある物理的領域に存在させる過程を含むある行為>

(例：打ち水、くわえ煙草)



また、後者のレベルの比喩の関与について、「焼き魚」、「飲み物」などの、行為主体による何らかの行為が関与する存在物を表す構文的意味から、「打ち水」、「買い物」などの、何らかの行為を表す構文的意味へのメトニミーに基づく拡張を、さらに一般的に、「図地反転」という認知能力が反映している言語現象であると位置付けることができることを提案した。

以上、本研究のまとめを提示した。

最後に、本研究を踏まえた今後の検討課題を提示する。

まず、第3章では、[動詞連用形 + 動詞基本形]型複合動詞の考察において、「駆け上がる」などから抽出できる構文的意味をネットワークにおける中心義であると認定することで、この意味を起点としての比喩に基づく意味拡張や、主体化・主観化の関与を詳細に説明できると考えて分析を行った。合計13の構文的意味の中で、構文的意味を中心義であると認定する根拠のさらなる検証をはじめ、本研究において提示した構文的意味を起点とする構文的多義ネットワークの心理的実在性に関して、今後さらなる検証を進めていきたい。(なお、その検証方法自体も今後模索していく必要があると考えられる。)その中で、本研究で提案した構文的多義ネットワークをさらに精緻化させていきたい。

また第3章では、Langackerの提案する主体化とTraugottの提案する主観化に関して、両者の一定の相違点に着目した上で複合動詞の意味形成の分析に援用したが、今後、これらの意味拡張が関与していると考えられる(複合語や、その他の言語単位における)様々な言語事実の分析を踏まえ、主体化と主観化の整理、検討(この2つの概念に関する共通点の抽出、及び相違点のさらなる検討)を進めていく必要があると

考えている。

次に、第4章と第5章では、構成要素が「他動詞連用形」であるタイプの複合名詞に限定して考察を進めたが、今後、「自動詞連用形」を構成要素とするタイプの複合名詞に関しても詳細な検討を進め、それらのタイプの複合名詞における構文的多義ネットワークが、本研究で提案した構文的多義ネットワークとどのように関連づけられるのかに関して、従来の他動性に関する一連の先行研究も踏まえつつ、検討していきたい。

次に、第5章で考察対象とした複合名詞は、前項要素によって表される意味が後項要素によって表される意味を修飾するという構造を有するものであった。この点を踏まえ、このタイプの複合名詞の意味形成と、節や句レベルの連体修飾構造の意味形成との並行性や相違点についても今後検討していきたい。

次に、本研究では第3章から第5章において、いずれも、同一形式を有する構文における多義ネットワークについて検討してきた。すなわち、本研究で考察対象としてきたのは、構文理論において一般的に「構文内ネットワーク」と呼ばれるネットワークである。今後、例えば第4章で扱ったタイプを含む[名詞＋動詞連用形]型複合名詞と第5章で扱ったタイプを含む[動詞連用形＋名詞]型複合名詞との関係性や、[動詞連用形＋動詞基本形]型複合動詞（「書き直す」、「降り始める」など）と[動詞連用形＋動詞連用形]型複合名詞（「書き直し」、「降り始め」など）との関係性をはじめ、意味的に強い関係性を有すると考えられる異なる構文同士の関係性、すなわち「構文間ネットワーク」についても検討していきたい。

以上の点も踏まえ、今後、同様のアプローチによって異なるタイプの複合語の意味形成の過程の記述を進め、その中で（現代日本語をはじめとする）複合語という言葉単位への構文理論の適用可能性をさらに検討すると共に、人間の事態認知の実態に即した包括的、体系的な複合語構成（意味形成）論のあり方を模索し、複合語研究と構文理論双方におけるさらなる記述的貢献および理論的貢献を目指していきたいと考えている。

参考文献

- 有園智美(2009)「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究」
名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社.
- 石井正彦(2007a)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房.
- 石井正彦(2007b)「複合語の形成と『意味表示の二重性』 複合語形成論における『くみあわせ性』と『ひとまとまり性』」『月刊言語』36-8 pp.50-58 大修館書店.
- 今井忍(1993)「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ 「～出す」の起動の意味を中心に」『言語学研究』12 pp.1-24 京都大学文学部言語学研究室.
- 上原聡(2007)「第4章 認知語形成論」上原聡・熊代文子『音韻・形態のメカニズム』pp.99-152 研究社.
- 上原聡(2010)「名詞化と名詞性 その意味と形」『日本語学』29-11 pp.24-38 明治書院.
- 大堀壽夫(2001)「構文理論：その背景と広がり」『英語青年』147-9 pp.526-530 研究社.
- 沖久雄(1983)「複合名詞の意味と構文」『日本語学』2-12 pp.47-57 明治書院.
- 尾谷昌則(2006)「構文文法の歴史的背景と今後の展望」『人間情報学研究』11 pp.25-43 東北学院大学人間情報学研究所.
- 影山太郎(1982)「日英語の語形成」『講座日本語学 12 外国語との対照』pp.85-102 明治書院.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版.
- 影山太郎(2009)「外心構造における意味と形態のミスマッチ 『太っ腹』タイプの形容名詞」由本陽子他編『語彙の意味と文法』pp.25-45 くろしお出版.
- 何志明(2001)「日本語の語彙的複合動詞における『原因』の複合動詞の組み合わせ」『筑波応用言語学研究』8 pp.1-14 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース.

- 柏野和佳子・本多啓(1998)「IPAL 名詞辞書における多義構造の記述」『情報処理学会論文誌』39-9 pp.2603-2612 情報処理学会.
- 加藤重広(2006)『日本語文法入門ハンドブック』研究社.
- 河上誓作(2001)「第4部 ことばと認知の仕組み」原口庄輔他編『ことばの仕組みを
探る 生成文法と認知文法』pp.165-214 研究社.
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15 日本言語学会(金田一春彦編
(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 pp. 5-26 に再録).
- 國廣哲弥編(1982)『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』平凡社.
- 小泉保他編(1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 斎藤倫明(2004)『語彙論的語構成論』ひつじ書房.
- 佐々裕子・堀江薫(1998)「文および語構成における形式名詞『もの』『ところ』『こと』
の相関性に関する一考察」『KLS18』 pp.133-143 関西言語学会.
- 澤田浩子(1999)「現代日本語『もの』の複合名詞をめぐって モノとコトの認知の
世界」『KLS19』 pp.153-163 関西言語学会.
- 柴田武編(1976)『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』平凡社.
- 柴田武編(1979)『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社.
- 杉岡洋子・小林英樹(2001)「第9章 名詞+動詞型の複合語」影山太郎編『日英対照 動
詞の意味と構文』 pp.242-268 大修館書店.
- 瀬戸賢一(2007)「メタファーと多義語の記述」楠見孝編『メタファー研究の最前線』
pp.31-61 ひつじ書房.
- 玉村禎郎(1992)「第3章 語彙: 2 語構成」玉村文郎編『日本語学を学ぶ人のため
に』 pp.85-98 世界思想社.
- 辻幸夫編(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社.
- 中村芳久(2004)「第1章 主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」中村芳久編『認
知文法論』 pp.3-52 大修館書店.
- 西村義樹(1998)「第2章 使役構文のプロトタイプとその意味」中右実・西村義樹『構
文と事象構造』 pp.119-135 研究社.
- 野呂健一(2010)「現代日本語の反復構文 構文文法と類像性の観点から」
名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.

- 早瀬尚子(2001)「英語における形容詞コピュラ構文の一考察」『英語青年』147-9
pp.541-543 研究社
- 姫野昌子(1979)「複合動詞『～かかる』と『～かける』」『日本語学校論集』6 pp.37-61
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 姫野昌子(1982)「対称関係を表す複合動詞：『～あう』と『～あわせる』をめぐって」
『日本語学校論集』9 pp.17-52 東京外国語大学外国語学部附属日本語学
校.
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 深田智(2001)「"Subjectification"とは何か：言語表現の意味の根源を探る」『言語科学
論集』7 pp.61-89 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座.
- 松本曜(1997)「第 部 空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と
移動の表現』pp.126-230 研究社.
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114
pp.37-83 日本言語学会.
- 松本曜(2003)「第2章 語の意味」松本曜編『認知意味論』pp.17-72 大修館書店.
- 松本曜(2009a)「複合動詞『～込む』『～去る』『～出す』と語彙的複合動詞のタイプ」
由本陽子他編『語彙の意味と文法』pp.175-194 くろしお出版.
- 松本曜(2009b)「多義語における中心的意味とその典型性：概念的中心性と機能的中心
性」『Sophia linguistica』57 pp.89-99 上智大学国際言語情報研究所.
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化 内容語と機能語の連続性をめぐって」
『日本語の研究』1-3 pp.61-76 日本語学会.
- 粕山洋介(2000)「名詞『もの』の多義構造 ネットワーク・モデルによる分析」山田
進他編『日本語 意味と文法の風景 国広哲弥教授古希記念論文集』
pp.177-191 ひつじ書房.
- 粕山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」山梨正明他編『認知
言語学論考』No.1 pp.29-58 ひつじ書房.
- 粕山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社.
- 粕山洋介(2006)「1-8 認知言語学」鈴木良次他編『言語科学の百科事典』pp.157-177
丸善株式会社.

- 森田良行(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版.
- 湯本昭南(1977)「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27 pp.31-46
東京外国語大学.
- 由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房.
- 米山三明(2001)「語彙・概念的な意味論の成立と展開」辻幸夫編『ことばの認知科学
事典』 pp.147-157 大修館書店.
- 李在鎬(2004)「認知事象の複合的制約に基づく結果構文再考」『認知言語学論考』No.3
pp.183-262 ひつじ書房.
- Bolinger,Dwight(1977)*Form and Meaning*. Longman.
- Croft,William(1991)*Syntactic Categories and Grammatical Relations: The
Cognitive Organization of Information*. University of Chicago Press.
- Croft,William(2001)*Radical Construction Grammar*. Oxford University Press.
- Croft,William(2007)“ Chapter18 Construction Grammar ” *The Oxford Handbook of
Cognitive Linguistics*. pp.463-508 Oxford University Press.
- Fillmore,Charles J., Paul Kay and Mary C. O'Connor(1988) “ Regularity and
Idiomaticity in Grammatical Constructions ” *Language*64(3) pp.501-538.
- Goldberg,Adele E.(1995)*Constructions: A Construction Grammar Approach to
Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson(1980) “ Transitivity in Grammar and
Discourse ” *Language*56(4) pp.251-299.
- Kövecses, Zoltan and Günter Radden(1998) “ Metonymy: Developing a Cognitive
Linguistic View ” *Cognitive Linguistics*9(1) pp.37-77.
- Lakoff, George(1990) “ The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on
Image-schemas? ” *Cognitive Linguistics*1(1) pp.39-74.
- Langacker,Ronald W.(1987)*Foundations of Cognitive Grammar*, Vol.1. Stanford
University Press.
- Langacker,Ronald W.(1990)*Concept,Image,and Symbol: The Cognitive Basis of
Grammar*. Mouton de Gruyter.
- Langacker,Ronald W.(1999)*Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. (2000) "Dynamic Usage-Based Model" In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-Based Model of Language*. pp.1-65 CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs (1995) "Subjectification in Grammaticalization" In: Stein, Dieter and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation*. Cambridge University Press.
- Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans (2001) "Reconsidering prepositional polysemy networks: The case of *over*" *Language* 77 pp.724-765.

謝辞

本論文は、筆者が名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。本論文の執筆にあたり、多くの方々から薫陶を賜りました。

指導教員である名古屋大学大学院の靱山洋介教授には、博士前期課程・後期課程での研究活動全般に渡り、終始懇切なるご指導とご鞭撻を賜りました。先生のご指導なくしては、本論文は形になりませんでした。心より感謝を申し上げます。2002年11月9日（学部1年生の頃）に、福井大学で行われた日本語教育学会北陸地区研究集会で初めて先生とお会いし、ご講演「現代日本語の多義表現 認知言語学のアプローチ」を拝聴したことが、私が現代日本語の意味論、認知言語学の研究に関心を抱くきっかけとなりました。それ以降、これまでもこれからも、靱山先生の存在は、私の「大きな志」です。

また、本論文の審査において、今後の研究においても非常に貴重なものとなるご指摘、ご助言を賜りました、名古屋大学大学院の堀江薫教授、李澤熊准教授に深く感謝申し上げます。李澤熊先生は、研究室の先輩でもあり、博士前期課程入学以来、研究の進め方などについて度々温かいご助言を下さいました。重ねて感謝申し上げます。

学部時代の指導教員である金沢大学の加藤和夫教授には、金沢大学教育学部在籍中に、日本語研究における基本的な考え方を、講義やゼミなどを通じて幅広くご指導いただき、このことが大学院での研究の土台となりました。そして、金沢大学卒業後も、常に温かい励ましのことばをおかけくださることが、学部1年生の4月に抱いた志を持ち続けて歩いていく上での、大きな原動力となっています。深く感謝申し上げます。

金沢大学の守屋哲治教授には、金沢大学教育学部に在籍中より、言語学の様々な理論や諸概念などに関して、幅広くご指導を賜りました。さらに、学会発表や論文執筆をはじめ、本論文における研究を進める過程で、要所要所で極めて有益なご指摘、ご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。

そして、学内外の研究会や学会活動においてお世話になりました方々に、御礼申し上げます。金沢大学の中村芳久教授、関西大学の鍋島弘治朗教授、東北大学の上原聡教授、法政大学の尾谷昌則准教授、札幌学院大学の眞田敬介講師には、本論文の基盤

となった複数の学会発表や刊行論文の執筆に際し、理論的側面、記述的側面共に、様々なご指導をいただきました。また、名古屋大学大学院の鷲見幸美准教授、名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士の有蘭智美氏、野呂健一氏、国際言語文化研究科大学院生の梶川克哉氏、大西美穂氏をはじめ、現代日本語学研究会のメンバーの方々、現代日本語学講座の修士、在学生の方々には、研究に関するご助言をいただいただけでなく、研究を続ける上で、精神的にも大いに励ましていただきました。名古屋大学大学院国際言語文化研究科大学院生の Becky Taylor 氏は、刊行論文の英文校正に協力してくれました。また Becky Taylor 氏とは博士前期課程入学以来、大学院生として研究を続けることの苦労、その中で得られる希望など、同級生として様々な思いを共有しながら、励まし合い、高め合うことができました。複合語研究を進める同志でもある、京都大学人間・環境学研究科大学院生の中馬隼人氏は、本論文に何度も目を通してきて、形式面でも内容面でも、実に多くの示唆に富むコメントをくれました。他にも、この場で具体的にお名前は挙げておりませんが、実に多くの方々から、多大なるご助言や励ましのことばをいただきました。ここに感謝の意を表します。

最後に、常に一番身近にいて、研究活動を続ける私を励まし、支え続けてくれている妻、何不自由なく育ててくれて、この道を進むことを全力で後押ししてくれている両親、私の研究に興味を持ち、いつも温かいことばで応援してくれる妻の両親、そして、本論文の執筆を進める上での大きな支えとなってくれた、今年の1月9日に生まれた娘に、心から感謝致します。